
アリスな話！

遊元 もえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アリスな話！

【Zコード】

N1204A

【作者名】

遊元 もえ

【あらすじ】

アリスは普通の男子高校生。ある日、不思議な空間へと迷い込む。そのせいで、大嫌いなホモに囮まれることになつた。どうにか元の世界に戻れたのに、気付けばまたあの空間について！？アリスな世界！の続編です。あちらの世界中心に進んで行く予定。詳しくはアリスな世界！を読んでください。

第1話 感動できな再会ー? (前書き)

アリスな世界！の続編となっています。ボーイズラブとなっており
ますので苦手な方はご注意を！

第1話 感動できな再会！？

本日、アリスの通う学校は文化祭が行なわれる。

「アリスちゃん！～頑張れよ～！」

「アリスちゃん！俺も行くからな～！」

あの事件があつてからその後、アリスは普通に学校生活を送っていた。またシンクロするのでは？と思うこともあつたけど、今のところはそんな心配もなさそうだし。そう毎回毎回、シンクロされても困るって話だし。

そして、そんなことを考えながら田々は過ぎ。文化祭当日。例の女装喫茶の本番なのである。朝からヤジをとばされまくっているアリスは・・・。もちろん、不機嫌である。

しかし、文化祭の開始時間は待つてくれない。そろそろ着替えて用意をしなければならない。なんせ。アリスはクラスの目玉なのだから。そう思いながら、家庭科室の一角を陣取つて作った控え室にこもつてはや20分・・・。

「ア・リ・スーどうした？機嫌悪そうじやん～？」

みんな着替えていなくなつてしまつた控え室で盛大にため息をつくアリスの背中をたたくのは、悪友の裕馬である。

「機嫌だあ？最悪に決まつてんだろ！」

一人大道具に逃げた裕馬を恨めしく振り返りながら、アリスは言った。

「そんな顔してちゃ、お密に逃げられるぜ～」

完璧に・・・。ちやかしに来てるだろう・・・。

そんな裕馬をさつさと控え室から追い出す。

「はあ・・・やつてらんね～」

今までは、衣装合わせだ何だつてアリスの衣装を着たとしても見るのは気心知れたクラスメートだけだった。それが。今日は外部の

人間やら他の学年の奴やらと、不特定多数の人間にこの格好をお披露することとなるのだ……。かといって、いつまでも控え室にいるわけにはいかない。アリスは覚悟を決めて、衣装に袖を通すのであった。

衣装はある日と同じ、“不思議の国のアリス”をモチーフにしたものである。長いウエーブのゆるくかかった金髪と、青いワンピース。……どこまでも乙女チックな……。

アリスは鏡の前で衣装を再確認した後、家庭科室を出て自分のクラスに向かうのだった……。

「うー・・・

人のいない廊下を誰にも会いませんよ！」と祈りながら歩くアリス。知らず、緊張からか変な声が出る。

「やべえ。緊張してきた・・・」

心臓の音が早くなるのを感じながら、アリスは歩みを止め、目をつぶつて深呼吸をし気持ちを落ち着けようとした。大きく、息を吸う。

「わー・・・

「ぎやあーー？」

ただでさえ、心臓がバクバクいっていぬといふに、後ろから脅かされる。

つーか、心臓に悪すぎ。

「だつ・・・！？何すんだ！！！？」

「冗談が今は通じねーんだよー！」つちは！

そんな表情で振り返った、その先にいたのは……。

「どつ・・・ビビビ！？」

さーつと、アリスは全身の血の気が引くのを感じた。

何で！？

どうして！？

だつて・・・！！！

お前は・・・！！！

「ハロー お久しぶり！アリス姫
「リ・・・リアン～～～～！？？」

やつと聞えた言葉がそれ。

いやはや、またしても嵐の予感・・・。

～続く～

第1話 感動できな再会ー? (後書き)

次あたりから、カッピングも公表していきます。誰が誰とくつ
くのか、当てるみてくださいね(^ - ^)

第2話 クイーンの事情（前書き）

ボーアズラブとなつております。苦手な方は『遠慮ください。』
「またまたシンクロに巻き込まれたアリス。今度はいつたいどう
なるのか・・・？」

第2話 クイーンの事情

「あら、覚えててくれたの？嬉しいねえ」

「相変わらず、どこまでもおしゃらけたこの男。

「ちょ！？ちょっと待て！－何でリアンがここにいるんだよ！－？」

アリスなんて、こんなにいいリアクションしてくれてるのに。

ていうか、パーク？

「そつれがさー、またシンクロしちゃって～！」

あはははは！と、まるで人事のよつと言つ（リアンからしてみればきつと人事なのだわ）。

そんなリアンの後ろから。

ぴょいくん

抱きつ！

アリスに抱きつき、すりすりと頬をすりつけのは・・・。

「バ・・・バニー・・・？」

アリスに名前を呼んでもらい、バニーは嬉しそうに田を輝かせる。そして、今以上に、ひとつアリスにくつこいてくる。

あ、ちょっと頭痛が・・・。

なんて、とりあえず。バニーはそのままにしておいて。

「ていうか！シンクロって・・・どうことだよ！？」

「クイーンに聞いてくれる〜？」

のれんに腕押し。

どこまでも我関せずなリアンに。最近ちよつとキレやすいお年頃なアリス君は。

「てめー！ちやかしてんじゃねーーシンクロ解いたばっかなのにーどうなつて・・・！」

アリスが声を荒げたその瞬間。

なんか、抱きつき具合がきつくなつたような・・・。

そろりと、バニーのほうへ田をやると・・・。

לען

（「おおむね」とした瞳がそこには…）

ה'ג

怒るとウサギは嬉々としてくつついでくるし、
リアンはおちやら
けてて話にならないし。状況は把握できないし。
「つたー、ジーなつてござなー！！

「……こんなところにいやがつたのか！？」のクソチビ……」
頭がパニックなアリスの後方から、聞いたことのある声が響く。
その声の主は。

麗しのクイーン様であった。クイーンは、ずかずかとアリスたちのほうまでやって来ると、むんずとバーを持ち上げた。

そのケイリンにはアリスが声をあける

「どうなってんだよ！クイーン！？またシンクロしてーー！」
そして、じことばかりにクイーンに詰め寄る。

だが、ケイーンはまたく躊躇せず。一瞬、アリスに驚き、次の瞬

間は斧を洗たべ

やがて、アリスは、思わず笑ってしまった。

あ・・・悪夢だ・・・！

そう、アリスは心の中で叫ぶのであつた。

リストは得してると言えば得をしているのだが。

そんなこんなで、再び訪れたこの状況に、アリスがへたつている

१०

「あー！クイーンや！お？アリスもおるで～」

「まあつたシンクロしたんか～？」

「どこからともなく、愉快な双子の声が・・・。

「ああ、ちょっとな」

それに、クイーンが言葉を濁して返事をする。

そしていつの間にか、見渡せば続々と集まって来る住人達。

「まあまあ、みなさん。立つていないで座つて紅茶でもいかがですか？」

アリスの心のオアシス、紅茶のお兄さんことマスターがそう言ってナプキンを一振りすると、そこには、テーブルと椅子、紅茶道具一式が・・・。

実はマジシャンか？などとどつでもいいことを思つアリス。

「準備がいいな。マスターは」

そう言つて椅子に腰かけているのは、ガーデンである。

「みなさんとお茶が飲みたかつただけですよ。ガーデンさん」

ぶつきらぼうなガーデンにも、マスターは優しく微笑んでいる。

「おやおや、全員集合か～？」

のほほんとそう言つのは、もちろんrianである。

そして、廊下のど真ん中に、のほほんと座つてお茶を始める人達。アリスは深いため息をつくと、リアンの隣に座るのであつた・・・。

「今日の紅茶はオレンジ・ペコです」

そう言いながら、ポットから紅茶をくんでみんなに紅茶を配るマスター。しかし・・・あきらかにポットの容量と、出でくる紅茶の量がおかしいと感じる心には・・・フタをしどうかなーと半ば投げやりなアリス。

投げやりにもなるつてなあ。人気のない廊下のど真ん中で、金髪少女と美形の男性陣。そして、可愛い美幼児。どんな集団だ。オイ。

「今回のシンクロのことだが」

紅茶が配り終えられ、一息ついて。クイーンはしゃべり始めた。
アリスは緊張して、クイーンのほうを見る。

「全部、このバーがやつた」

ひょいとバーの首根っこをつかんで持ち上げながら、クイーンは言った。当のバーはといふと、出されたクッキーをむしゃむしゃ食べている。

『バーが……?』

双子の声が重なる。

「そうだ」

クイーンは重々しくうなずく。それを受け、アリスはクイーンに質問をする。

「シンクロって、クイーン以外の奴でもできるものなのか?」

「ああ、アリスさんはシンクロについてよく知らないんですね?」
マスターがそう言つと、その後をリアンが続けた。

「シンクロつづけのは誰でもできるわけじゃないんだよ。一部の選ばれた者だけができる技」

「ようするに、僕達の世界では王家の血筋の方ですね」

なるほど。誰でもできるってわけじゃないんだな。なんて関心してみたり。

「ん? てことは……。

「王家って……」と……は……」

アリスは、ゆっくりバーへ向ぐ。

「バーは俺の息子だ」

じりく真面目な顔をして、クイーンが言った。

「ええええー? マジで! ?え? ジやあ、奥さんは! ?」
「いないの! ?」

そうである。よく考へれば、クイーンがこの世界のトップならば。側室だけでなく、正室がいてもおかしくはない。クイーンの息子が

バーーだといひにには驚いたが、まだ見ぬクイーンの奥さんも氣になる。

「アリスさん、奥さんというか、女でないと子供もが産めないといつのはあなた方の世界のことだけで、ここでは男でも子供もが産めます。・・・といひか、ここには女といひ生き物は存在しません」

マスターは控えめにアリスに説明する。

「そりなのー?」

いつたい、この世界の繁殖メカニズムはどうなつてゐるのか・・・。そんなことには、触れないほつがいいよねーとばかりに、アリスは次に気になつていることを問う。

「てことは・・・誰がクイーンの・・・妻(?)・・・?」
この場合、妻であつてゐるのかはともかくとして。
その問い合わせを受けて、全員がリアンのほうを向く。

「あらら」

本人は、いたつてのんきな声を出している。

「リ・・リリリ・・・!？」

「リアンだよ。アリス姫」

紅茶をすすりながら、リアンはせらりと言った。

「リアンがーーー!？」

「ちよう、意外!！」

まさか、クイーンとリアンがそんな仲だつたなんて・・・!何

より、ホモネタの苦手なアリスの思考はストップ状態である。

「そういうのを差別と言つんだ。すべてをお前の常識でくくるんじゃない」

ガーデンに静かに言われて、アリストぐつとつまる。

まあ、確かに。いろんな人が世の中にはいるし。しかも、ここは自分のいる世界とは違つた世界なわけだから・・・。

そんな感じで悶々と考えていると。

「話がそれた。シンクロのことだが・・・解けない」

「・・・!？」

そのクイーンの言葉に、全員が顔をこわばらせるのだった・・・。

（続く）

第2話 クイーンの事情（後書き）

いかがでしたでしょうか。クイーン×リアンのカップリング。当たつた方はいましたか？また感想などいただけると嬉しいです。これからもよろしくお願いします！

第3話 シンクロを解け！（前書き）

ボーライズラブとなつておつままで、苦手な方は「注意を」
r > < b

第3話 シンクロを解け！

クイーンのその言葉に、全員が顔をこわばらせる。
「どういう・・・」とですか？」

しん、とする中で、マスターがそう切り出す。

「シンクロをかけた者にしか、シンクロは解けない」
クイーンは短くそう告げた。

「え？ ジャあ、解けるやん」

そのクイーンの言葉に、能天気にアリスは答える。
だつて、シンクロをかけたのが誰かわかつて、しかも、ここに
その本人がいるんだから。何の問題もなくね？

正味な話。アリスにとつてはそんな話なわけで。

「そー や。そー や」

「解けるやないか」

そのアリスの発言に、ホワイトとブラックも口をそろえて何が問
題あるんや。とつなげる。

その2人の台詞に。

眉間にしわを寄せながら。

クイーンは、盛大にため息をついた。

「ホワイト・・・ブラック・・・。アリスはいいとしても。お前た
ちはバニーがなぜシンクロをかけたのかわからないのか？」
心底。いいかげんにしろよ。というオーラ全開なクイーン様。
もちろん。

双子がそんなことを意に介すはずもないが。

「クイーン、しわが増えるぞ」

横からちやちやを入れるガーデンをちらりと見たあと、すぐにホ
ワイトとブラックに向き直る。

「え？ 何でて。アリスに会いたいからやろ？」

そんなんあたりまえやん。知つとるわあ。と双子。

そこまでわかつていて、何でこの話の流れがわかんないかね～・・・

・と、人知れずrianがぼやく。

とりあえず、そんなrianは置いとして。

「俺に?」

アリスはクイーンを向く。

「そうだ」

「よつするこ～・・・

クイーンヒリアンは。口を開いて、続きを話した。

『ベタボレ』

「ここにいると心臓に悪い。何回、倒れそうになつたことか。つか、いつか心臓止まるね。」

「だから、アリスに会いたくてシンクロしたのに、わざわざアリスを帰すよつなこと、すると思つ~?」

「まず、しないな」

ガーデンがきつぱり言つてのける。

「ここにきて、よつやくつながつた話。

「じゃ・・・じゃあ、シンクロは元に戻らないのかよ!~?」

よつやく、ことを理解できたアリスは。

身を乗り出してあたりを見渡す。

「・・・バーがシンクロを解くまではな」

はあ、とため息つきのお言葉。

「そ、そんな・・・」

一難去つてまた一難。そんなことわざを脳裏に浮かべつつ。てい
うか。お前、親だろーどにかしゃがれ!~!と、いつそのこと暴れ
てみようかと思つてみたり。でもちょっと。それつて何の解決にも
なんない上に、諸悪の根源が喜びそつだからやめとくか。と、ちよ
つと頭をフル回転させるアリス君。

「どーにかならへんの?」

「アリス、可哀想やん」

あせあせしているホワイトと「ラックに。
ちょっと、遠くを見ている感じのアリスに。
シンクロが解けなければ、アリス同様、自分たちの世界へ帰ること
のできないクイーンたち。

そして。
のんきに紅茶をするバー・・・。

いいかげん、マジでその耳むしるぞ。このガキ・・・と、誰が
思つたのかは追求しないこととして。

重い沈黙をやぶつたのは、クイーンだった。

「シンクロを・・・解けなくもない・・・」

「あいかわらず、表情は硬いが。

「成功するかわからんが、やってみるか?」

「何? どんな方法なん? ていうか、失敗したらどうなるん?」

「さあ?」

肩をすくめてクイーンは言ひ。

「・・・どんな方法か知らないけど。このままじや、帰れそうにな
いしねえ。この際、何でもいいからやつてみる?」

親身なのか何なのか。判断しかねるリアンの言葉。

「・・・方法によるけどわあ・・・俺もこのままじや困るしなあ・
・・・」

実際問題、そこだよな。

「で? その方法ってのは?」

ガーデンがクイーンを見る。

「・・・もし無事にシンクロが解けたとしても、だ。またバーが
シンクロをかけるともかぎらない」

クイーンはそう前置きすると、その美しくも澄んだ瞳をアリスに

向けた。

「そこでだ、アリス。無理を承知で頼みたいのだが……」
のわりには無表情で淡々としますな。

「……シンクロが解けるなら……」

「ああ。何か。嫌な予感。最近どうせ当たるんだよね。
そんなことを、冷静に思いながら。

「バニーの、婚約者になつてくれないか？」

リング　ン

今、一瞬。天使が飛ばなかつた？あ、何？俺、幻視？うつわ、や
べく。鐘の音まで聞こえちゃつたよ。あはは。
・・・そう思つたのは、どうやらアリスだけではなによつて。
全員がぽかーんとしている。

まあ、約1名、お茶に飽きて廊下の端でぴょんぴょんしているの
もいるが。

「言つておぐが、形だけでいいのだからな？」

「・・・・」

「ア、アリス？」

「・・・」

「あかんわ。放心しとるで？」

アリスの目の前で手を振りながら、ブラック。

「しつ、してない！！」

「ようやく、現実へおもどりなさい、なアリス。
は～？どうじつこと？クイーン」

みんなの心の代弁を、リアンがする。

「だから、アリスを婚約者に迎える、といつ形でシンクロを解いて
俺たちの世界へ帰ることにする。まずは、だ。もちろん、アリスも」

「お、俺も！？」

帰りたいとは言つたけど、アリスの帰りたい世界はそっちじゃない。

「表向きだ。アイツはまだ一人前じゃない」

ちらりと見ると、どこからか入つてきただチョウと戯れている。「時空の歪みを見つけて向こうの世界へ戻す」

「それって、かなり危なくない？」

さすがのリアンも真面目に返す。

「それにや。それやつたら、またバーーがシンクロしてまうんやない？」

「せやせや」

「だからだ。“腕の未熟なお前では、アリスに嫌われる”とでも何とでも言え、ばいい。アリスは死んだことにしてもいいしな」

勝手に殺さないでくれ。

ただでさえ、雲行き的にその方向も近そなんだからさー。

「じゃあ、何か？アイツが一人前になつたら……俺はウサギの結婚相手になるのか〜〜！！？」

うん、まあ、何ていうか……。問題はそこか？

「バニーが一人前になるには、平均してあと60年はかかるから大丈夫だ。そつちとこつちの時間の流れは違うからな」

「一人前になつたころには、思い人はよぼよぼのじーさんつてか！…そら、傑作やな〜と、あくまで人事な双子。

嬉しくない発言をどうもな！」

「ちょ・・・・ちょっと待つてください！本気でそんな方法をとる気ですか！？無茶ですよ！危険すぎます！！」

それまで黙つて聞いていたマスターだったが、本当にその方法をとるような雰囲気を察し、意義を唱えた。

「それは成功したら、の話でしょう？空間の歪みからアリスさんを戻すなんて・・・！そんな不確かな方法・・・！」

マスターは本気でアリスの心配をしている。

何だかアリスは、それだけでとても嬉しくなる。マスターがいるおかげで、俺、こいつらの中でも何とかやつていけてます！みたいにな。

「じゃあ、一生ここにいるって言うのか？いつ戻れるかもわからな
いまま」

ガーデンが冷たく突き放す。

「・・・それは・・・でも！何か他に方法が・・・」「
方法つて言つても、バニーをどうだますかが変わるだけで、やること
は大して変わらないと思うがな」

「ガーデンさん！」

無神経なガーデンを、マスターはたしなめる。
が、ガーデンがそんなことに懲りるはずもなく。
「俺・・・それでいいよ」「
どうせ、方法がないのなら。
どれにかけても同じようなら。
「シンクロを解こう・・・」「
かけてみるしかないだろう？」

人生、早また・・・？

バニーは、大好きなアリスが婚約者となり、しかも、自分の世界へ来てくれると言つて大喜びである。さっそくシンクロを解く気になつたらしい。

その喜びようとは裏腹に、他のメンツは沈黙である。
成功するか、否か。

もちろん、一番不安なのはアリスである。
そこへ、リアンがぽんっと肩を叩く。

「大丈夫だよ～ん。俺のダンナがヘマするわけないっしょ？」

アリスの緊張を解いてじっとしてくれる、リアンの心が、とても嬉しくて。

「・・・大丈夫です。絶対・・・！」

そう言って、抱きしめてくれるマスターに。

「・・・うん…」

にっこりと、微笑む。

アリスの金色の髪と、青いスカートがたなびき始める。
バニーがシンクロを解き始めた。

誰もが無事を祈る。

一瞬、田の前が真っ白になって。

消えゆく意識の中で・・・。

アリスは、声を聞いた・・・。

“ア・リ・ス”

その直後。

ドスン、という音と、お尻を地面にぶつけた感触。

「いつてえ・・・」

まぶしい光に、しばらくしてようやく田が慣れる。

五感が、戻る。

「・・・い・・・は？」

そこは、見たことのない場所だった。

次にアリスが聞いたのは・・・。

「アリス・・・？」

クイーンの間の抜けた声だった。

「どうしてここにー？ 時空の歪みから元の世界に戻したはずだぞ！？」

いつもはのほほんとしているリアンも、血相を変えて。

「アリス！？・・・まさか、自分でこっちの世界に来たのか？ もう戻れないよ！？」

いきなり知らない場所に落ちてきて。

別れたはずのクイーンとリアンが目の前にいて。大きな声で、何か言つてる。

もう、戻れない・・・・？

「・・・え？」

今度は、アリスが目を見開く番である。

「戻る必要はないよ」

凛とした声が、あたりに響く。

この、声は。

「だつて、アリスは僕の妻だもの」

アリスは、声の方を向く。

そこに立っていたのは、どこかクイーンに似た顔の。どこまでも人を引き付けるような顔立ちの18歳くらいの少年・・・やわな感じはなく、すらりと伸びた手足はほどよく筋肉がついている。身

長はクイーンと同じくらいか。アリスより頭一つ分大きい。金色の髪の、透き通るような目をした、彼。

「つ・・・妻あ！？」

妻！？何！？俺は！いつ、誰の妻になつたんだ・・・？

アリスは動転して、口をぱくぱくさせている。

「・・・・お前！・・・バニーか！？」

そこで。気付いたようにクイーンが声を出す。

「・・・そうだけど？」

ちらりとクイーンを見やり、そう、言ひ。

「や～・・・ちょっと見ない間におつきくなつたねえ・・・」

リアンもちょっと、頭の回転が付いていつてないかな？

「それよりも、僕の一人前になつたことだし。アリスとの結婚式の日取りでも決めようか？」

□元を弧に描き、微笑する、その少年。

「あと・・・60年先じゃなかつたのか！？」

そう叫ぶアリスを、誰も責められないわけで。

「・・・お前が、アリスを・・・！」

「何のこと？」

クイーンの言葉を軽く流しながら。

アリスを見つめ、笑うその少年。そう、バニーがアリスをこの世界に引き込んだのだ。

「何てこと・・・」

リアンも、次の言葉が出ない。

アリスは呆然としたまま、その場に立ち尽くしていた。

これから一体どうなるのか・・・。

アリスはただ、目の前の少年を、見つめるだけだった・・・。

} 続く

第3話 シンクロを解け！（後書き）

あつちの世界へご到着～ しかも、おつきくなりました。バニーケン。あんまりマジっぽくないご様子。これからどうなつていいくのでしょうか。お楽しみにー。さて、ぴーえす。更新が遅くてすみません；

第4話 花嫁候補！？（前書き）

ちょいとボーイズラブっぽい雰囲気になつてきました！…（ようやくか）

第4話 花嫁候補！？

「クイーンもリアンも“嘘”なんて言わないよね……？自分たちが決めたんだから。僕の……婚約者……」

今までの愛くるしい表情はどこへやら。明らかに、ああ、そういう血を引いてるよねっていうような勝ち誇った笑みを浮かべるバニー。うん。あのマジっぷりはもう微塵も感じさせないわけで。

「それに……これはアリスの意思でもあるんだから……」

小さく呟かれたその言葉は、アリスには届かなかった。呆然とみんなが立ち去り、その中で。

「…………わっ…………？」

バニーは、クイーンたちを無視してアリスの腕を引き寄せ、アリストを抱えあげる。

「なッ…………お、おろせよ…………」

軽々と抱えられたアリスは赤面してバニーに抗議する。もちろん、そんなこと、バニーが聞き入れるはずもなく。柔らかな笑顔だけアリスに向けて、スタスターと歩き出したのであった。

「…………行っちゃったねえ」

その場に残つたりアンが、人事のように呟く。

「…………どうすんの？クイーン」

先を歩く息子を眺めながら。クイーンは額を押さえながら渋い顔をしている。

「どうすると言つてもな…………」

「…………血は争えないね」

「やけど、何やら苦悶の表情を浮かべるクイーンに。リアンは意味深な言葉を向けるのであつた…………。

「・・・・・」

あれだよな。

ぽかんとするつて、言つじゃん？あれ。何見たらそんなになるんだよつて、そんな呆けたことになるわけねーだろつて、思つてた。だけど。本当。人生の中でも、ぽかんとすることつてあるんだなつて。つか、問題はそこじやないんだけど。脳が拒否？みたいな。

「・・・・・すげえ・・・」

約30秒間固まつて。出た台詞がこれ。

アリスがぽかんとしている原因は。

眼前に聳え立つ、えつと、ここは中世ヨーロッパですかね？と、時代の確認をしてしまいそうな、そのお屋敷。てか、城だろ・・・。

「ふふ。今日から、ここがアリスと僕の城だよ」

アリスをあらししながら、わらつと恐ろしことを言つてのけるバ

二一。

「・・・・・・・え？」

はい？

何？

ここが？

俺とバニーの城、だあ？？

「やつぱり、狭い？」

小首をかしげながら、可愛らしく聞くこの男。

「せま・・・！？全然！－！」

どんな思考回路をしていたらこのばかでかい屋敷が狭いつつ一話になるのか。てか広すぎだつーの！－！

心の中で一人庶民的つっこみをしながら。

そんなアリスを見つめながら。

「とりあえず、中に入ろうつか。部屋に案内するよ」
にこりと、アリスに微笑む。

「あ、うん」

「それに、着替えたいでしょ？僕はそのままでいいけど……」
そういうて、指さされて。アリスは。ナチュラルに忘れていた事実と直面した。

「そう。いまだアリスは……アリスルックだったのである……。
き・・・着替えます・・・」

真っ赤になつて改めて恥ずかしさを痛感しつつ。案内するバニーのあとに、小さく続くのであった。

「とりあえず、この部屋で着替えて？僕は隣の部屋にいるから。終わつたらおいでね」

バニーはアリスに着替えを渡すと、そのまま部屋から出て行つた。アリスは、だだつぴろい部屋で一人、ふうっと呼吸を落ち着けた。

何だか、今回もいろんなことが一度に起きすぎて、思考がついていかない。

バニーがあつきくなつたことも、だけど……俺がこいつの世界に来てしまつたこと……それに……

「俺は……」

元の世界に、戻れるのだろうか……。

さつきまでのリアンやクイーンの様子だと、元の世界には戻れない感じだった。でも、何だか、そう言われても実感がない。それに、別の世界に来てしまつている実感もないのだ。ようは。脳が考えることを全面的に拒否している感じ。

考えてしまつたら、壊れてしまいそうで……。

アリスは、ぞくつと走る寒気を振り払つと、明るい声をあげた。

「さつ、とりあえず、着替えるか

できればもう少し。

俺の心が落ち着くまで・・・。

何も・・・。

今は考えたくない・・・。

アリスは、一呼吸置いて、カツラをはずし着替えることにした。

「・・・・・」

ダダダダダダ

バタン！－

「ん？ どうしたの？ アリス？ そんなに慌てて」

のんきに紅茶をするこの男（ここらへん、リアンゆずり）。

そのバーの前には、真っ赤な顔をしたアリスがいた。肩で大きく息をしながら。

「てめえ・・・何だ！－！」の服は～～～！－？」

アリスは、腹の底からそう叫ぶと持っていた着替えを床に叩き付けた。

その叩きつけられた衣装は・・・。

春らしいピンク色に、白いレースがふりふりと。ところかしこには可愛らしいリボンが結わっている。

そんな・・・男物の服ってないよね

「あれ？ 気に入らなかつた？」

あははは。似合つと思うけどーとバーは朗らかに笑う。

「だつ・・・！ 気に入るか！－何でこんなツ・・・げほ」ほツ・・

・！－」

勢いあまつてむせるアリス。ちょっと涙目・・・かつちょ悪・・・。

「大丈夫？ アリス？」

そんなアリスの背を、バーは優しくさする。

「ゼーゼー・・・」

アリスは息を整えながら肩で息をする。

「冷めてるからどうぞ」

すかさず、バーーは紅茶を手渡す。アリスは、それをもらつて一気に飲み干した。そのおかげで、幾分楽になった。

「・・・さんさゆ・・・」

そして・・・。

アリスの記憶は途切れた。

「ダメじゃない、アリス。花嫁がそんな格好してちゃ・・・自分の腕の中で、ぐつたりしているアリス。そのアリスに、バーーは優しく口付ける。

額に。

頬に。

瞼に。

唇に・・・。

深い眠りについた花嫁に。バーーは何度となく、口付けをするの

だった・・・。

「・・・頭がパンク寸前だ」

「アンタでもそんなことあるんだねえ」

真剣な顔をしたクイーンと、相変わらずなリアン。

こちらもだだつぴろい部屋の中。ソファに腰掛け、話している。いつもは、たいていのことでは動じないクイーンも、さすがに今回のこととは予想の範疇外だつたようだ。

「息子が成人したんだ。いいことじゃん?」

リアンはそう言つと、クイーンの首に手を回す。

「だが、アリスはどうする?アリスには自分の国や家がある

クイーンの瞳は、静かに語る。

軽率だった。

甘く見ていた。

誰を？何を？

否。すべてを……。

もつといい方法があつたのでは？

どこかで……、思つていたのかもしれない……。

それもまた、運命だ、と。

所詮、自分のことではないのだから……。

「……アリスは必ず残つてくれるよ。帰れないってのもあるけど……だつて、アリスは……」

クイーンは、リアンが最後まで言つ前にその口を塞いだ。
「ん……」

舌と舌を絡ませて、長い長い、キスをした

今、アリストたちがどうなつていてるかも知らずに……。

いつの間にか、眠つていたらしい。
どれくらい眠つっていたのだろうか。

目が覚めた時、もう窓の外は薄暗くなつていた。
起きぬけの頭で、自分が今ベッドの中にいるのだと認識する。ア
リスは上体を起こし、しばしの間ぼーとしていた。

「ンンン。

そこへ、タイミングよくノックする音がした。

「アリス？入るよ～」

リアンの声。

「うん～」

半分重い頭で、アリスは返事を返す。
ガチャっと音がして、リアンが入って来る。

「・・・！おや、まあ・・・」

リアンは入つてくるなり、まじまじとアリスを見つめた。その後、
にやりと笑みを浮かべる。

「・・・？」

アリスは、相変わらず・・・リアンつて變・・・。とか思いながら
（失礼）

「安心したよ、アリス。よかつた。クイーン、入りなよ。アリスは
もうその気だぜ？」

アリスは、ドアの外へ向かって声をかける。

何だか、いきいきしてるように気がする・・・。

「・・・リアン、そんなわけ・・・」

重くため息をつきながら、クイーンが部屋に入つて来る。そして、
アリスを見て、一瞬。止まる。

「・・・アリス・・・本当に、いいのか？」

クイーンは、アリスをまじまじと眺めた後、そう呟くように言つ
た。

「・・・え？」

どうも話が見えない。でも、それを考へることすら今は億劫で。
頭も重く、機能していない。

こんな時。

人はよく、どうでもよくなるものだ。
もちろん、アリスも例外ではなく。

「うん」

と、答えるのであつた。

「そりか・・・お前がいいなら俺はもつ何も言わん」

「嬉しいねえ。よかつたよ。アリスで」

「3日後、お前の他に3人、バーの花嫁候補が来る。まあ、どうせアリスで決まりだらうが」

クイーンは、やれやれといった様子で部屋をあとにした。

「んじゅ、アリス、ゆっくりしなよ。でも、いつまでもその格好じやカゼひぐよ~」

つきつきと、クイーンのあとを追い、出て行つたリアン。

・・・・・花嫁・・・候補・・・?

・・・・・カゼ・・・・?

クイーンたちが退出した数秒後。何だか、アリスは大きな不安を感じた。

何か・・・おかしい。

少しずつ、頭がはつきりしてきた。

そして、何だか体がスースーすることに気付いた。

ちゅう、嫌な予感・・・。

「・・・!?!?」

ちらりと自分の体に目をやると、アリスは素つ裸だつた。かろうじて幸いなことと言えば、下半身はシーツに包まつていてのことくらいだろうか。

何！？
何で！？

アリスはパニックを起こす。

さつきまで着ていたあのアリスの衣装は！？ビニー！？

きょりきょりとあたりを見回していると、後ろに鏡があ

、後ろに鏡があることに

氣付く。アリスは、その鏡を手にす

叫んだ。

アリスの白い肌には、無数のキスマークが散っていたのだった。
首筋から、わき腹。腕の内側。

点々と、赤い印が・・・。

「…」それを見て…rianたちは…

セラ。誤解を取るの。いや、誤解と書くても、

どうなのが定かではないのだが……。
そう 詰觸をしたのだ いや 詰觸と書いても 万々火が無事か

「だ・・・誰が・・・！」？」

アリスが頭を抱えて白黒しているところ。

あおむかして騒闘でもないか

「ああ、おまえがやるのなら、何でもいいんだよ。」

「おっ・・・お前か～～～！！！」

「え？ 何が？？」

怒れるアリスに、どこまでも爽やかな笑顔で応じるバーニー。

すとほんた!!俺の脇はどうした!!
しかしもしかしも

アリスの顔が。。。。体が、朱色に染まりだす。

「…しかも？」

バーは、アリスに顔を近づける。

「この……！キスマーケだよ……！！！」

羞恥心は震えるアリスを楽しそに眺めたから
ベニは、アリスをさら一瞬キラキラして

「・・・自分から誘つたくせに」

・・・・・！！？

今度は一気に青くなる。
アリスも赤くなったり青くなったり大変である。

バニーは、冷たいほどにつこりと笑顔を作る。

「かわいかつたよ、アリス」

「か・・かかか・・・！？」

あまりのことに固まるアリスをよそに。
バニーはちゅうとその頬にキスをする。

お・・・俺・・・！

アリスは・・・。

もうお婿に行けない・・・！

わけのわからないことを、心の中で叫ぶのであつた・・・。

（続く）

第4話 花嫁候補！？（後書き）

いかがでしたでしょうか。更新が遅くて申し訳ないです…次の話では、もう一組夫婦が出てきますのでお楽しみに。アリスを読んでくださっている方々、評価をくださっている方々、いつもありがとうございます！リアンとアリスはくつつきませんが（笑）、今後はボーアズラブ要素が強く…なる？予定です。今後とも、よろしくお願い致します！

第5話 夫婦な話（前書き）

このカップリングは、想像していた方も多いのではないかと・・・。

第5話 夫婦な話

「大丈夫だったかな・・・アリスさん・・・」
ぽつりと呟くのは、爽やか代表、マスター。
クイーンとリアン以外は、バニーたちとは別の場所へ帰っていた。
そのため、マスターはアリスがこちらの世界へ来ていることを知らなかつた。

ここは、アリスが心中で絶叫している屋敷から数100メートル離れた場所にあるマスターの屋敷である。部屋の中を、ほのかに紅茶が香る。マスターは珍しく上の空で紅茶をいれている。
その、向かいには。

「・・・・・」

仏頂面のガーデン。

なぜ、このツーショットなのかといふと・・・この2人も、実は夫婦だからである。

「・・・どうぞ」

マスターは、紅茶をガーデンに差し出す。

「・・・・・」

その様子を一瞥しながら、ガーデンは紅茶を受け取つた。その様を、気が抜けた表情で見つめるマスター。

「まずい」

「・・・え？」

ガーデンが放つたその言葉を理解することに、数秒要した。

「え？す、すいません・・・！おいしくなかつたですか！？もう一度入れなおします・・・！」

あたふたするマスターの。

腕を掴む。

「・・・そんなに、アリスが心配か？」

「・・・え・・・？」

ガーデンは、まっすぐマスターを見つめる。数秒の沈黙が、数分にも感じられた。

ガーデンは、がたんと音を立て、席を立つた。そして、足早に部屋を出て行つた。

「！－ガーデンさん・・・！？」

後には、マスターだけ残つた。

「お～い、マスター！いる～？」

リアンはマスターの屋敷を勝手知つたると入り、マスターの部屋の前に来ていた。扉の向こうに、人の気配がする。

「？入るよ～」

返事がないことをいぶかしみながらも、リアンはそのドアを開けた。

「・・・・・」
「・・・・・」

そこにいたのは。

例の爽やかお兄さんではなく・・・。

「何・・・してんの？・・・ガーデン・・・」
やせぐれガーデンだった。

「・・・別に」

ふいと、そっぽを向く。そんなガーデンに。

ははあ。喧嘩したな。こいつら。と、思い切り悟るリアン。

「ところで、ガーデン。アリスを正式にうちの息子の婚約者にする
ことにしたよ」

とりあえず。用件だけ伝えて。

触らぬ神にたたりなし、で。

「・・・・あ？」

「それだけ。マスター借りていいくよ。アリスの衣装合わせしてもうから」「うから

早口で用件を伝えるリアン。

「・・・アリスを正式に・・・?どうことだ?」

アリスは向こうの世界の人間である。それを正式と、とは?しかし、さきほどシンク口を解いたばかりではないのか・・・。

「アリスが来たんだよ。いっしの世界に」「リアンは、目を細め、そう言った。

「母さん、2階のつきあたりの部屋、誰の部屋だっけ・・・?」「2階の・・・?」「

「そうよ。私の隣の」

「あの部屋は・・・えっと、誰も使つてない物置じやなかつた?」「だよねえ。でも、ブレザーが置いてあるのよ。男子校の」「男子校?変ねえ。うちには男の子なんていないのでねえ」「隣の裕馬くんのかなあ?」「

「そうかもしれないわね、でも・・・何どうち?・・・?」

ざわざわ

「なあ、あそここの席つて誰だっけ

「あ~?そこは・・・えっと、誰だっけ?・?・?」

「は?お前り向言つてんだよ。あそここの席はもともと誰もいなかつただる」「

「あ、そつか」

「んなことよつねー・・・」

おかしい。
おかしいだろ。

裕馬は、その眉を寄せ、クラスメートの会話を聞いていた。

そこは、アリスの席だろ？ 何で、誰もアリスを覚えてないんだ？
クラスメートも、先生も・・・そして、アリスの家族までも。
「・・・どうなってんだよ・・・？」
いたはずなのだ。あの、文化祭の途中までは、確かに。それなのに・・・。

アリスは、突然いなくなつた。

この、世界から・・・。

「どう、なつてんだよ・・・」

もう一度、小さく呟く。

その声は、クラスの喧騒の中で儚く散つた・・・。

「泣くなよ～・・・」

そう言いながら、引きつった笑みを浮かべるのはリアン。

「そ、そうだよ、マスター！ ね、泣き止んで・・・」

必死になだめる、アリス。

「あ！ 紅茶とか飲みたいな！ 僕～マスターのいれたやつ！」

元気にリアン。

「・・・・ガーデンさんになまずいつて言われました・・・」

地雷を踏んだのは、リアン。

「リーアーン～～・・・」

「だ・・・だつてえ～・・・」

小さく話す、アリスとリアン。その前に、背を向けしくしくと

いたたい、どうなつているのかといふと。

涙を流すマスター。

いたたい、どうなつているのかといふと。

リアンがマスターを探し当た時には、すでにこの状態だったのである。

よくわからないが、「ここにいたくないと」言つので、アリスの所まで連れて来てみた。ちょいびびーがいなかつたといつこともあるが、一人でのマスターをどう扱えばよいのかに困つたからだとも言える。

そして、アリスはマスターとガーデンが夫婦だといつことにもまず驚き。しかし、驚いている場合ではないことを悟り。そして、今にいたる。

「ど、どこので……どうしてガーデンと喧嘩になつたわけ?」「ほんと、気を取り直してリアンが聞いた。

「……僕がいけないです……。今日は帰つてきてからも、アリスさんのことが心配でほーっとしてたから……それで、きつと怒つたんだと思います……」

クスンと話すマスター。

それって――――!

ただのヤキモチなんじゃ――――――――?

アリスとリアンの思考が合致したのは……言つまでもない……。

「やつぱり……僕はガーデンさんにふさわしくないんです……」

「そ……そんなことないって……何でそんなこと言つんだよ!」

マスターを嫁にもらつて幸せでないはずがない!と、アリスは強く返す。

「……ガーデンさんには、妻さんがたくさんいるんですね……」

ガーデン――――!

再び、アリスとリアンの心の叫びが合致したのは・・・当然つてことで。

てか、マスターがこんなにマイナス思考者だとは・・・。とアリス。

あ～あ。ガーデンさえ余計なことしなけりや、いいお兄さんなんだけどねえ・・・。とリアン。

2人は、人知れず、ため息をつくのであった。

「ていうかさーーこの国はおかしいんだよ。前回も、余えれば愛人になれだの言つてきてさ。こっちの貞操觀念つてどうなつてるわけ？」アリスは、じごくまともなことを聞いてみた。

ガーデンにしても！クイーンにしても！正妻がいるじゃん！！

「いや～耳が痛いねえ～」

というのはリアン。

「まあ、あれだよね。生活に刺激が欲しいんじゃない！？」

あははははー！とリアン。・・・本当に、この男は・・・。

「いやいや、冗談抜きで。こっちは時間の流れがゆっくりだからねえ。歳もとんないし。ずっと一人だけを愛していくつてのも、難しいのかもねえ・・・」

リアンはふと、静かにそう言った。表情は相変わらず、読めないものだつたけれど・・・。
「それって・・・」

それって・・・何か、とっても寂しくない・・・？

アリスの呟きは、言葉になることなく、宙に消えた。

「さてと、気を取り直して」

リアンは、だいぶ落ち着いたマスターの方を向く。

「マスター、いいかげん浮上してアリスの衣装合わせしてくれよ~
・・・?衣装合わせ??」

「さう。3日後にある、婚約者選別会でアリスが着るドレスよ」

「はあ!?!?・・・ドレス!?!?」

「そうだよ!一番似合う格好しなきゃね!」

「こいつ・・・首しめたろか・・・。」

「一人でんな恥さらせるか!!--・・・!」
ありますは、何かに気付いてにやつと笑む。

「・・・何よ・・・?」
何か、嫌な予感。

「正妻様方も・・・ドレスがいいと思つんですがね」

アリス。反撃開始。

～ 続く～

第5話 夫婦な話（後書き）

いかがでしたか？ガーデン×マスター。というか、いろいろほっぽつてる内容が・・・。次回、いろいろの説明を出します。あと、ガーデンとマスターの続きもね そりして、ドレスアップした面々も。ぜひお楽しみに

第6話 裏話？（前書き）

ちょっと話が前後していただけます。みづやへ、少しずつですが話が進んできています。・・・進んでるのかなあ（笑）

第6話 裏話？

時間をちょっと遡ります。

婚約者選別会って何？と思われた方、アリスとバーーはあの後どうなったのよ！と思われている方のために・・・いや、今まで忘れていたわけじゃないですよ？ええ。まったく。これっぽちも。ちよつと、いつ出そうかなって思つてただけで。ハイ。では、時を戻して・・・。

「大丈夫、大丈夫。僕が責任とつてあげるから」

「何の責任だあ！！？だいたい！テメー！一服盛つただろ！！！」

やつとこさ、アリスの衣装 マッパ シャツにズボンとまともな格好になれたアリス。元気にバーーに詰め寄る。

「何のこと？」

しらつと、あくまでもその笑顔を崩さないバーー。

「てつめ・・・！」

「だいたい、クイーンたちはもうその気だよ？それに・・・アリスはもう帰れないって」

その言葉に、アリスはびくりと反応する。

「何で・・・？」

じごく明るく。バーーは言った。

「だって、アリスは僕の奥さんだもん」

「いつなつたんだよ！！！」

アリス、ナイスつっこみ。

「・・・アリスは、僕のこと嫌い？」

アリスにつっこまれ、急にしおらしくなるバーー。

「バ・・・バニー・・・？」

「僕みたいなのは、親が決めた婚約者と結婚しなきゃいけないんだ。・・・好きでもないのに。だけど、僕はアリスが好きなんだ。・・・

3日後に婚約者の選別会があるんだ。そこで、僕の結婚相手が決まつてしまつ……僕は、好きでもない人と結婚なんでしたくないよ」
まるで、子どものように、アリスに抱きつきながらバニーは話す。
「お願い、アリス。嫌なら何もしないし……一緒に暮らさない。
……いつかは、元の世界に返してあげるから……僕の……僕のお嫁さんになつて……？」

その切実さと、子どものような可愛さに、アリスは胸を打たれる。
が。もちろん。言つまでもなく。演技である。わかつていなのはアリスだけ。

「う・・・・じゃ、じゃあ・・・少しの間だけ・・・なら・・・」
「！ありがとう！－アリス！－大好き！－」
そのお許しの言葉に、バニーはアリスをよりいっそう強く抱きしめる。そして、頬にキスをする。
「わ－！それ・・・やめろ！－てかそうだ！－何もしないって・・－！お前！俺が意識のない間に・・・！」
「何もしてないよ。キスマークはつけたけど。」「・・・え？」

「意識のない相手を抱くほど、鬼畜じやないよ」

ふふつとバニーは笑む。

要は、リアンたちに見せ付けるためだけにしたつてことね……。はは。

頭痛え……。

そんなこんなで、アリスは丸め込まれ、今にいたつているというわけで。

そんなわけで（？）3人の衣装合わせは行なわれていた。

「・・・・足元がスースーする……」
「・・・・ひらひらする……」
「2人とも、よく似合つてるぜ？マスター、その格好見ればガーデ

ンに独り占めしてもらえるぜ！」

と、ピースをするアリス。その、田の前には……。

マスターは、清楚な感じが漂う白いシンプルなドレスを着（もちろん、胸がなくても似合つ型）、前髪をあげ、後ろ髪はウイッグをつけアップにしていた。どこの深層令嬢のようだ。

一方、リアンはと、こちらは黒のチャイナ風のドレスである。七部の袖に、長いスリット。大きな牡丹の刺繡が黒の大人っぽい中にも、派手な印象を与える。リアンは、前髪を横流しにし、ストイックな美女となつている。

そして、元気いっぱいアリスくんは、リアンにお返しとばかりに薄いピンクのふりふりリボンなピンハ系のドレスを着せられた。髪は金髪のウェーブのかかったロングヘア。

何かもう、壮絶な感じである……。

「しかし、すっかり遅くなっちゃたね～」

リアンは、時計を見ながらけだるそうに言った。もう田付が変わつていた。

「何、だかんだ文句つけてきたのはリアンだら～」

あれにしろこれにしろと着ては脱ぎ着ては脱ぎをさせられたのはアリスとマスターである。

「だつて、せつかく可愛くするんだしねえ」

似合うのがいいじゃない。と言うリアンの言葉にまあわからなくもないけどつてか、似合つてなくともいいんだけど。と思いながらアリスは。

ていうか・・・何で女がいないのにこんなにたくさん文物のドレスやらアクセサリーがあるんだろうか・・・と。心の奥底で。一人で思つてみるのであつた・・・。

「それよりさ！細かい直しは明日にして、今日はそのまま帰りなよー！マスター！絶対ガーデン喜ぶよー！」

田の前で儂げに潤む瞳のマスター。

「・・・そう、ですか？」

「自身持ちなつて！なあ、リアン！」

だつてもう、誰が見たつて。パーフェクトに美人なのだ。

「そーそ。これで勃たなきや男じやない・・・」

「はいじゃ～行こうか～～！！！」

リアンの教育的指導が入りそうなコメントは置いておいて。
気乗りしないマスターをひっぱりながら。3美人はマスターの屋敷に向かうのであった。この道すがら、誰にも会うことがなかつたのは・・・ある意味幸運と言えよう。

「こ～にいるのか？」

「・・・多分・・・彼と僕は一緒に暮らしていますから・・・」
「で、マスターの部屋に、いるんだよな」

からかうリアンを放つて、アリスはマスターの背を押し屋敷の中へと入る。玄関の扉を入り、豪勢な造りの階段をあがりガーデンがいる（らしい）マスターの部屋の前につく。

マスターは、数度ためらつたあと控えめにノックをした。

「ガーデンさん・・・います、か？」

ていうか・・・自分の部屋入るのにノックつて・・・。と2人が思つたかどうかは別として。

半分、寝てるかも。と思つていたから。

勢いよく扉が開いたのには、ちょっと心臓止まりかけたよ。

「マスター！～？こんな時間まで・・・！～？」

ガーデンは、怒つた様相でそこまで言つて・・・止まつた。

「ご・・・ごめんなさい・・・」

びくつとするマスターは・・・まさにお嬢様。

「・・・マ・・・マスター・・・？」

その様相は、驚きに変わり。

「はい・・・に、似合いませんか・・・?」

控えめに、瞳を潤ませるマスター。

ぐつとこない、男はいないう。

「いや・・・」

どうやらツボに入つたらしいガーデンは、珍しく感情を全開にして。今すぐ抱きしめたい。というオーラを出している。

「・・・その、格好は?」

感情を抑えながら、ガーデンはマスターに聞いた。

「・・・ガーデンさんに・・・好きになつてもうれるよつに・・・

「・・・は?」

「僕が役不足なのは・・・わかっています・・・!愛人がいてもいいです!!だから・・・」

「僕を・・・捨てないでください」

その頬を、涙が伝う。

きっと、今まで。マスターはいろんな思いを抱えてきたのだろう。夫婦という関係でありながら、ガーデンには愛人が大勢いて。愛情を確認できなくて。

それでも。

愛していたのだろう・・・。

顔を臥せつているマスターを、ガーデンは抱いた。

「・・・!」

「捨てるわけ・・・ないだろう・・・!」

マスターの体が、折れるほど強く。

「俺は、今も昔も……ずっとお前だけを愛してる」
ガーデンの、告白。

「俺のほうこそ……お前に嫌われないと……」
「そんな！何でですか！？」
「俺が何人愛人を作つても、何にも言わないからだ」
「そ、それは……僕のことを好きじゃないんだと思つて……」

「……」「……」

「らぶらぶである。

「俺たち、存在忘れられてない？」

「……帰るか……」

そう。

まだいたのだ。アリスとリアンは。
で、何かもう。目の前は2人の世界だし。そのままにして、マスターの屋敷を後にするのだった。

「何だかんだで、ラブラブじゃねーか。あの2人……」
おもしろくなさそうに言うのはリアン。

「ていうか、人のああいう場面見ちゃってよかつたのかな……」
顔が真っ赤なアリス。

「……できればもう2度と見たくないけどな……」
リアンは苦笑しながらそう言った。

「あの2人もねえ。……不器用なんだよね……マスターも、ガーデンも。……それに……」
夜空を見上げながら、リアンは静かにそう話した。
「……さー俺も早く帰つて愛しのダーリンにこの姿を見せてあげるか……！」

リアンは全開の笑顔で楽しそうにそう言った。

「俺は、あんまり会いたくない・・・」

アリスは心の底からそう思つた。

「いいじやん。似合つてんだし〜」

しなを作るリアン・・・・。はまりすぎ。

「それとも、恥ずかしい？」

にひとつ、アリスの前でからかうよつな笑みを見せる。

「だ・・・！だって、こんな格好だぜー？そりや・・・」

再び真っ赤になるアリスに。

「おやおや〜？それは、バニーだからかな〜？」

「ち・・・ちが・・・！」

なぜか動搖してしまった自分。

そういうしながら2人が家についたのは、もう2時も近かつた。

それでも、クイーンとバーーはきちんと起きて待つていて。・・・

というか、いたくご立腹でと、いたく心配してと。

それぞれ、帰ってきたリアンとアリスにどんな反応をしたかはさておき・・・。

この時、これから起こる事をアリスはまったく想像していなかつた。

3日後（正確には2日）には、アリスの人生を変える大きな事態が起こることは・・・この時まだ、アリスは知らなかつた・・・。

（続）

第6話 裏話？（後書き）

何か、何がメイン？っていう感じですね。唐突なガーデンとマスター
一話（笑）ちょっとここにどうしても入れときたかったので。話が
急展開で申し訳ないです。これから更にラブがたくさんでてくる
予定。基本、この話のコンセプトは愛の国です（笑）皆様、今後も
見捨てずお付き合いのほどを。

第7話 ラブカップル（前書き）

「ううな話や、シコアスやらがまぜじゅ。 ねゅいじとアダルティなムーデも漂わせてみたり（ムードのみです／笑）

第7話 ラブカップル

「・・・リスト・・・」
「ア・・・ス・・・」

「ん・・・・・」

誰かの、声がする。

誰の、声だつけ・・・。

意識の朦朧とする中に、呼びかける、声。

「アリス、朝だよ

「・・・兄さ・・・ん?」

「アリス、僕だよ。おはよっ

「目の前には、バーー。」

「・・・バーー?」

アリスは寝ぼけた頭であたりを見回す。そこで、自分がベッドの中にいるのだと認識し。そして。昨夜、バーーの元へ帰りそのままいつの間にか眠りこけ。バーーのバッドを占領していたのだと。気付いた。

「わ・・・悪いっ・・・!お前のベッドなのに・・・!・・・!・・・!

アリスはガバッと慌ててベッドから起き上がる。

そんな慌てるアリスに、バーーは優しく微笑み軽くキスをした。

「そんなに慌てなくていいよ。今、朝食を持って来るからね

バーーは嬉しそうに微笑みながら、部屋を出て行った。

その微笑に。

アリスの胸は知らずと高鳴る。

な・・・何で！俺はバーに微笑まれただけで赤面してんだ・・・
！？

枕にやつぱたりをしながら、動悸を鎮めるアリスであった。

「クイーン・・・」

「ひからはうつて変わつて。

「どうした？」

アダルト担当クイーンとrian。キングサイズのベッドの上でダラダラ過ごすrian。

「腰イタイ。眠い。腹減った・・・」

「そうか？」

けだるそうに言つrianに、自分はもうキチッとした格好をして新聞に目を落としているクイーン。

「そうか？じゃねーつつーの。このバケモン」

すましているクイーンにべーっと悪態をつくrian。

「お前があんな格好して帰つてくるからだろ」

あんな格好とは、もちろん、あんな格好です。

「だつてアリスがさー・・・」

苦笑いを浮かべながら。ふと。

遠くを見つめて。

「大きく・・・なつたよなあ・・・」

rianは、隣にいるクイーンにも聞こえないくらいの小さい声でポツリともらした。

「・・・？何か言ったか？」

「いゝえ。何も。た、シャワーでもあびてスッキリしようかねえ」

rianはそのままと、備え付けのシャワーブースへと消えた。

所変わつて。

パシヤ

「あ・・・！すいません！」

マスターは、琥珀色に染めてしまつたテーブルクロスをふきんでたたきながらガーデンに謝る。

「大丈夫だ」

相も変わらずぶつきらぼうなガーデン。

「すいません・・・何だか体が痛くて・・・」

寝違えたのかな」と呟くマスターに。

「悪かつた。・・・昨日はヤリすぎた・・・

紅茶を含みながら、さらりと。

その言葉を頭の中で反芻し。その意味に気付いたマスターは。

「・・・いつ・・・いえ・・・！」

か」と赤面し。今度はポットを落としそうになつたのであつた。

ラブラブですな・・・。

そして。こちらへと戻ります。

「？クイーンたちのどこ？」

「そうだよ。アリス」

朝食を食べて、一息ついたところで。アリスは、バーにクイーンとリアンの屋敷へ行くことを告げられた。

「明日は婚約者の選別会があるから。その打ち合わせに行くんだ。アリスも関わることだから、一緒に行こうか」

「あ～、そうだね。行つたほうがいいよね」

「それに、クイーンたちが住んでいるのは公館でもあるからね。これから何回か行くこともあると思う」

せりりとそう言われて。

アリスは、一抹の不安に刈られた。

いつ、帰れるのだろう・・・。

すっかりここ環境に慣れた気がしていた。・・・ここは霧囲気が嫌いではないのだ。

でも、アリスはまだ。この非現実的な世界を完璧に受け入れることができなかつた。

目を覚ましたら。

いつもの世界に、戻つていそうで。

ここは、夢の中のような気がして。

だつて。

すべてを捨てるには。

忘れられないものが、多すぎたから・・・。

「バッカじやねえ？」

ここは、クイーンの部屋。

「バカとはひどいねえ。親に向かつていう言葉？それがぶーたれながら、リアンは言った。

「本当のことだろ？確かに昨日、あんな格好でアリスが帰つて来た時には押し倒そうかと思つたけど。だからつて、立てなくなるまですんなよ」

「（）もつともだけど・・・やつたのはクイーンだから」

自分のせいじやないとリアンは主張した。

「ほう。責任転嫁か・・・？」

青筋を立ててクイーン様。

「・・・あら、いたの・・・」

動けないリアンの代わりに、しかたなくお茶を淹れタイミングよく帰つて来たクイーン。そのクイーンにバツの悪そうなリアン。

「ところでバニー、押し倒そうと思つたつて？」

「あ？」

「え？何？してないわけ？？」

「・・・普通、親子でこんな会話するのか・・・？」

「してないよ。アリスとは、一度も「
につこりと。そしてさらりと、バニーは言つてのけた。

「えつ・・・えへへへ！？」

「何だ、じゃあ、あの時は・・・」

「誰か）・・・」「

タイミングよく。

アリスの声がした。

「ドア開けて～」

クイーンのお手伝いをしていたアリスは、お菓子を見繕つて持つてきたのだが・・・。持ちすぎた・・・して、ドアが開けられなくなつたのであつた。

バニーにドアを開けてもらひ、ようやく中に入るアリス。

「何かどれもおいしそうで、持つて来すぎちゃつた

何だか・・・。知らないって素晴らしいって感じ。

そのアリスの様子を皮切りに。クイーンはバニーを連れて、奥にある執務室へと入つていった。あらかたのことを決めたら呼ぶから、と役に立たないと判断された2人は取り残されたのであつた。

お菓子をぱりぱりと食べながら。
たわいもない話をして。

「大きく、なつたよねえ」

リアンがふと、真剣な面持ちでアリスを見据えた。

「?バニーのこと?」

アリスは口をもぐもぐさせながら答える。

「・・・違うよ。バニーもだけど・・・ねえ、アリス。こっちに来て、もっとよく顔を見せてくれる?」

アリスは、一瞬戸惑った。

リアンの意図するところがわからない。

「黙つてようかな、とも思つたんだけど。説明するにはこれがつとり早いかなと思つて・・・」

リアンは、アリスの頬に触ると、少し悲しげな顔をした。

「やつぱり・・・覚えていないんだね。アリス・・・」「・・・え?」

（続）

第7話 ラブカップル（後書き）

中途半端な所で切れました。うふ。この先は想像しやすくなってしまいこと（笑）！ゆっくりですが、書きたい話が少しずつ形になってきて嬉しいです。感想などありましたら、お願い致します

第8話 告白。（前書き）

リアンの告白。シリアルスパッカジヤアレなんで。双子とか出してみたり・・・。え?違うって?

第8話 告白。

「アリス、俺はお前にも幸せになつて欲しい
「・・・リアン・・・?」

いつもと違い、どこか悲しげに。
真面目な顔で、リアンはアリスと向き合つ。

アリスの頬に、手を置いて。

「アリス・・・俺は、お前の兄だよ・・・」

リアンは、静かにそう告げた。

アリスはとうとう。

話がうまく飲み込めず、頭にハトが飛んでいく。

「リ、アン。人違ひだよ・・・?俺、男兄弟・・・いない、もん・・・」

アリスは、そう確信しながらも、大きな不安に押しつぶされそうなのを感じていた。

脳が警告している。

深みにはまる。

深みに、はまつていぐ。

「・・・アリスの両親は10年前に離婚して、7年前に再婚した。
新しい父親には連れ子がいる。それが、今の義姉の雪姫だろ? 雪姫

はスチュワーデスをしてる。アリスの母親は弁護士だし。……祖母は生きてて、今はアメリカにいる……

「なんで、知ってるの？
どうして、そんなことを言つの？」

「俺が、一時、アリスの義兄だったからだよ……」

リアンは、動搖を隠せないアリスに、話を続けた。

「俺は、向こうの世界で5年前、16歳でここへ来たんだ
5年も、前に。」

「か・・・・仮に！ リアンが俺の兄さんだとしても・・・何で俺や・・・
・俺の家族すら・・・リアンのことを覚えてないのさ・・・？」

頭痛が痛む。
頭痛がする。

「異世界へ来た時点では、本来あつた時空がゆがみ、それは、他の人間の中にあるその人の記憶にも影響しだす。・・・記憶は、消えてしまふ・・・。そしてじきに・・元の空間は、異世界へ行つた人間の存在を許さなくなる。あとかたもなく、その世界から抹消される。・・所有物も、何もかもが・・・」

リアンは言いにくそうに話した。

「・・・・！ それじゃあ・・・！」

「それが・・・元の世界へ戻れない理由だ」「
その一言が、アリスに大きく突き刺さる。
・・・もう・・・戻れ・・ない・・・？」

リアンは、一度まぶたを閉じて。

その瞳を開く。

「アリス、最後の選択だ。お前は、バニーを愛しているか？」

その言葉が、いつまでも、鮮明に。

アリスの耳に残つた・・・。

時間というのは時にも残酷で。
誰の意思にも関係なく進んでいく。

「かつたるいな」

「普通、息子の婚約者決めるパーティーでそんな事言つが?
ざわざわと賑わう会場。」

そう。今日は婚約者選別会。

かと言つて、特に何をするわけでもないのだが。

要は、幼少の頃よりぜひ、うちの息子をバニー様の嫁に。と望んでいた人々の中からそれ相応、と選ばれていた3人+飛び入りのアリスからバニー自身と婚約者候補の意思により一人の婚約者に厳選する。といった会なのである。その他の人間は、その様子を見に来たり、クイーンやバニーに挨拶をしに来たり、とりあえず呼んでもみたりした人間たちなのである。この世界は、クイーンを王とし中心とし回つておりその血縁者がクイーンの傍にいるだけで。別段、争いや権力抗争などはない。というか、みんな結構自由気ままに暮らしている。まあ、ある一定の地域ごとにそこを治めている者はいるのだが。

「だつてそうだろ？ もうアリスで決まってる」「しけつと言うクイーン。

「・・・一応、ね」

「ぶすつとした顔で、バニーは答える。
そこへ。

「よお、クイーン！」

「ハロー！ バニー！」

まったく空氣の読めない2人組み、登場。

クイーンなど、この2人を見た瞬間、あからさまに顔をしかめた。
「ああ！ …そんな嫌そうな顔せんといてや！ …」

「うるさいぞ。ブラック。周りに迷惑だ。・・・帰れ」

「来た早々、帰れとか言いよるし！ …」

「あいたーと、ホワイト。

「ま、それは置いといて」

都合の悪いことはさらりと流し。

「朝もはよから豪勢やなあ。各地域のお偉いさんも来とんやな～。
10人か。相変わらず、変わり映えせんメンツやわ！ …」

「はははは～」とブラック。

「せや、肝心のアリスはどうや～？」

「リアンもおらんのんぢやう？」

きょろきょろと、あたりを見回す2人。

その質問に、眉間を押さえながら。

クイーン様は大きなため息をつかれ。

「・・・寝坊だ・・・」

何ともありえない言葉を口ことされるのでした。

前日、詳細をバニーから部下やらと話し、決めてアリスとリアンを呼びに行つてみれば。

リアンより、今日は2人でラブラブするから部屋に入るなと言わ
れ。クイーンもバニーも追い出され。朝、迎えに行ってみれば。リ

アンに。まだ眠たいから寝させると追い出され。

「……夫の威儀はどこへやら。最強妻、リアンなのであつた。

「……さすがやのう。リアン……」

「ある意味、ゴーリングやからなあ……」

「……お前たちに言われたくない。と思いながら。

「あ、せやつたら。他の候補者教えてや！」

まあ、とりあえず。そこでしきょう。

「ああ。まず一人目は、あそこの長髪のたれ目の男だ。レンとか言ったか。バーランの富豪の息子だ。大変デキがよろしくそうだ」

クイーンの視線の先にいるのは、いかにも、な男。

「うわ～・・・遊んでそ～・・・」

「性格悪そうなツラしてんna

好き勝手。

「あ、気付いた・・・」

まあ、4人の視線が注がれれば、否が応にでも気付くだろうが。

「こ、こっち来るで！」

なぜかわたわたする2人に、無表情な2人。

「どおも。バーランから来ました。クインツの息子のレンです」

にやにやと、その舐めきつた態度に。

「クイーンだ。遠路はるばるようこそ」

棒読みで慄然と対応するクイーン様。

「うわ～・・・この男、命知らずやなあ・・・」

「クイーン、この手のタイプ嫌いやからなあ・・・」

ひそひそと、ホワイトとブラックが話していると。

「あんたがバーー？」

さらに、レンはぶしつけにバーーにそう聞いた。

「・・・・・・」

あきらかに不機嫌なバーーをもろともせず。

レンは、につこりとバーーに微笑むと。

「あんた、俺を選びなよ。絶対後悔しねーぜ?」

不敵に笑む。

「いつ・・・一国の王子に・・・」

「ほんま、命知らずやなあ・・・」

「じゃあ、また。・・・このパーティーが終わる頃には、あなたの隣には・・・俺がいることになるけどね」

それだけ言つと、レンはバーーから離れパーティーの輪の中に戻つて行つた。

「・・・何かたくらんでそうだな・・・」

「・・・ああ・・・」

レンの後ろ姿を追いながら、クイーンとバーーは小さくじぼした。

「クイーン様、バーー様、ご無沙汰しております」

1人の少年が、クイーンたちの前で深々と礼をした。

「ああ、ソウか」

深々と礼をするこの少年に対し、先ほどのようなトゲはなく、クイーンは接する。・・・というか、スマイル〇円状態。

「今日はお招きいただきまして、光栄に存じます。父も、よろしく言つておりました」

「サドナの、ゴーレン殿だな。お会いできなくて残念だ」

「そう言つていただけますと、父も喜びます」

にこやかに、ソウは話す。

ひとしきり、バーーを含め、3人で話した後丁寧に礼をしその場を去つて行つた。

「へへ、あれが2人目」

「1人目とは大違いやなあ」

ホワイトとブラックは、ソウの礼儀正しさに感嘆する。

「まあな。・・・ただ、一癖ありそうでもないが・・・」

目を細め、クイーンはつぶやいた。

「んで? 最後の一人は?」

「それが、見当たらない。まだ来てないのか・・・?」

クイーンは大広間を見渡す。

「…………こいつじゃねえか…………？」

バニーが、憮然と指差す先には……。
何とも愛らしい……坊やが……。

「えへへ。ケイゴです！ よろしく」

「まあ……バニーの婚約者ゆつたら……」いつもなるやうなあ……

・

成人まで時間のかかるこの世界で。
バニーと同じ年の婚約者が……。
元バニーと同タイプでも。
不思議はないってことで。

そんなこんなで、会場の時間は流れていったのであった。

アリスはソファに腰かけ、沈んだ表情をしていた。
その隣に、リアンも腰掛ける。
「ごめんな、アリス。心労増やして」
ちゃかすように、リアンは言った。アリスも、苦笑でそれに返す。
「……俺も、この選択をした。そして……」
「元の世界より……俺たちより……クイーンを選んだんだ……」
?

意地の悪い言い方を、アリスはした。言つて、自分で後悔する。
「ああ。……でも、よかつたよ。もし、元の世界に戻つていたら……。
・ 後悔していたと思う……」
「リアンは……幸せ？」
その問いに、リアンは優しい柔らかい表情でうなずく。
「……ああ。人を愛せて、幸せだよ……」

ちくりと、胸が痛む。

「俺は……わからない……」

「……アリス……」この選択はとっても難しいし、とても残酷なものだと思う。この選択一つで、アリスは幸せにも、不幸にもなると思う。……時間はシンデレラの魔法の解ける1~2時まで……。よく、考えるんだよ……」

リアンは、アリスと額を合わせながらそう言った。
「……うん……」

リアンは、軽くアリスの背を叩いた。

「まあ、なるようになるよ。じゃあ、行こうか」

なぜ、すぐに帰ると言えないのか。
何が心をここに留まらせるのか。

帰ればいい。

いる必要なんて、ない。

捨てられない、家族もいる。

早く帰らないと、戻れなくなる。

なのに。

切なそうに、眉をひそめるバーの顔が……。
頭から離れないのは、なぜ?

} 続

第8話 告白（後書き）

いろいろ設定に無理を感じる今日この頃。こっちの世界のことをもう少し具体的に決めとくべきですね。何分、作ったのが中学の頃だからなあ。あんまりまんま使つのも考え方ですね（笑）。もうしばらく、アリスやらその周りの人間やらの葛藤が続いていきます。しばらくシリーズっぽくなるかなあ？なるべく読みやすく話は続けていくよ。頑張ります。評価や感想を、またよろしくお願ひ致します。

第9話 アリスの思い（前書き）

嫁騒動勃発中。いよいよ、アリスは決断を迫られつつあります。ちよつヒシリアルスめな回でござります。

第9話 アリスの思い

「へ～、マスターってこんなに腰細かつたんだ？」

「・・・・・！」

「白、似合いますね」

「・・・・！からかわないでください！！2人とも・・・・！」

マスターとガーデンは、少し遅れて会場に来た。そして、きれいにドレスアップしたマスターは、来て早々に、クイーンとバーに絡まれている。

「汚い手でマスターに触るな」

その様子を横目で流していたガーデンが、ムスッとしてマスターの腕を引き自分の胸の中に取り返す。

「！・・・・へ～。何があつたか知らないが。よかつたなあ。マスター

ー

くくくと笑いながらクイーンは言つ。

「え！？」

真っ赤になりながら、マスターはガーデンの胸の中に納まっている。

「そういえば、rianとアリスは？」

にやにやとマスターをからかうクイーンに、ガーデンは無表情でそう聞いた。

「そういえば、少し遅いな・・・」

「ま、じきに来るだろ？。rianもついているし。・・・後は、バーが夜の12時までに、婚約者を選ぶだけだ」

バーは、クイーンの言葉に。小さくああ、と答えた。

「ひどいですよ！－rianさん－アリスさん－！」

会場に入るやいなや。血相を変えて、2人の元ヘマスターが駆け

寄つて來た。

「・・・え？」

「え？ ジやないですよ…アリスさん…何で、ドレスじゃないんですか？！」

顔を真つ赤にして、田じりに涙をためて抗議するマスターに。

・・・忘れてたよ・・・。

そう言えば。

今日のために衣装合わせとかしてたな・・・。

「ごめん、マスター・・・。

マスターのみ、律儀にドレス着用で來ていたのであつた・・・。
「い、いやあ、着方がわからんなくつて・・・！」

とりあえず。

忘れていたとは言えない雰囲気なので、適当にごまかすアリスに。
「そんなの！ バーーさんに着せてもらえばいいじゃないですか？！」
「なつ・・・！」

「ぶつ・・・！」

天然な発言つておそろしい・・・。

横でリアンが肩を震わせて必死に笑いをこらえている。

アリスは、マスターの天然発言に思わず真つ赤になる。

「そんなの・・・！」

「そうだよねえ。男同士なんだしね？ 問題ないじゃんねえ」

いつの間にやらマスター陣営に寝返ったリアンが楽しそうに言つ。

「リ・・・リアン～～！」

確かに。男同士だけど・・・！！

でも。

ああ。どうしてこんなに。

バニーのことを考えると、落ち着かなくなるのか。

「いつ・・・いいの！！」

アリスは、やつとそれだけ言つと、2人の元から逃げ出す。顔の赤みを隠すため、下を向いて歩いていると。前方に人がいるのに気付かず、思い切りぶつかった（当たり前）。

「す、すいません！」

鼻を押さえながら、ぱっと上を向くと。そこにいたのは・・・。

「ああ、アリス」

「！バ、バニー！？」

何てタイミングの悪い。

アリスはの顔は、引きかけていた赤みがまた増しだす。

「・・・？遅かったね。顔が赤いけど、熱でもあるの？」

心配そうに見つめてくるバニーに。

ますますアリスは赤面する。

「あ、や・・・う、うん」

もう。しどろもどろで。適当に返事をしてしまつ。

バニーの顔をまっすぐ見れなくて。視線をはずすと、見慣れない3人がそこにいることに気付く。その中の一人と目が合つ。すると、睨むように視線を返される。

「こいつが最後の一人？」

いきなり横柄にそう言われ、アリスは面食らつ。

「ああ。アリスだ」

バニーは短くそう告げる。

「ふーん。俺はレン」

「はじめまして。ソウと言います」

「ケイゴで～す！」

3人から自己紹介をされ、とりあえず、アリスも名乗つた。

「さ・・・佐久間アリスです・・・」

言いながら、バニーに疑問を曰で訴える。

「婚約者候補の方たちだよ」

バーーは優しく微笑みながらそう言った。

ああ、これが・・・と、アリスはその3人を改めて見やる。

何と言つか・・・。濃いメンツだなあ・・・。

「なあ、バーー。」こんなガキどもなんて放つといて俺と2人で楽しもうぜ？」

レンは、妖艶な笑みを浮かべバーーの肩に腕を回す。

「バーー様の前で下品な言動は謹んでいただきたい」

その腕を払いながら、ソウは言った。

そのやりとりを、バーーは無表情で見やっている。アリスはその横顔を心配そうに眺めていると。

その視線に気付いたのか、バーーはアリスに微笑み返す。

「・・・！」

なぜだか。その笑みを直視できなくて。思い切り視線をはずしてしまつ。

「アリス?どうしたの?具合、悪い?」

心配そうに、バーーが声をかける。

「え、あ、ちょっと・・・」

赤らむ顔を見られないように、下向き加減でそう答える。

何だか、バーーのそばに平然といられない。

「大丈夫?部屋で休んで来ていいよ?12時までに帰つて来ればいいんだし」

「そ、そうするね・・・!すぐ、帰つてくるから!」

アリスはそう言つと、逃げるようにして会場を出た。

じうしょべ。

じゅじゅ。

頭が混乱している。

バーを必要以上に意識してしまつ。

リアンは、あんなことを言われたからだ……。

「…………」

リアンが、俺の義兄で。
あいつの世界を捨て、一ひき戻ってきた。

「…………」

胸が締め付けられる。
呼吸が、苦しい。

俺は、じうしたい…………？

考えたくない。

何も、考えたくない。

部屋の扉を、後ろ手に閉める。
しん、とした部屋に入ると。急に、リアンの言葉を思い出した。

『俺は・・・世界で一番、クイーンを愛しているよ・・・』

だから、後悔していないと、話してくれた。
でも、俺は。そう思えるほどバーを愛しているのだろうか。
それ以前に、俺はバーのことをどう思っているのか。

俺は・・・家族や友達を、捨てられるのだろうか・・・。

「どうすれば・・・いいんだ・・・」

頬を、涙が伝う。
とめどなく、流れ始める。

早く帰りたいと、思っていたはずなのに・・・。

今は、帰りたくないと思う自分がいる。
この、胸に大きくなれるものは何なのか。

アリスは、リアンと一緒にベッドに再び身を沈めた。
いつの間にか、深く、眠ってしまっていた。
気が付くと、時計は夜の7時を指していた。

時間だけが無常に過ぎていく中。

アリスは、いまだ答えを持たぬまま、会場へと向かった。

（続）

第9話 アリスの思い（後書き）

いかがでしたでしょうか。いつも読んでいただき、ありがとうございます。嫁騒動のようやく半分まで来た感じです。これからアリスはどうなっていくのか。次回は、新展開があります！ので、どうぞお楽しみに

第10話 驚きと眞実（前書き）

もう一つ話題になるのですね。早いものです。ではでは。嫁騒動の続をどうぞご覧ください。

第10話 嘘と眞実

「アリス、心配したよ。大丈夫？」

広間へ戻ると、バーーが駆け寄つて来た。心配そうに、アリスを見る。

「うん・・・」

そんなバーーに、アリスは笑顔を向けたが、どこかぎこちない。

笑顔つて、どうしたらよかつたつけ。

俺は、つまく笑えてる？

「アリス！！」

どん、つと背を押される。後ろを振り返ると、リアンがいた。

「・・・そう固くなりなさんな」

アリスの表情を見て、リアンは困ったように笑う。

「自然と答えは出てくるよ」

バーーに聞こえないくらい、小さな声で。

「リアン・・・」

アリスは、なぜか胸にこみ上げてくるものを感じた。暖かいような、苦しいような。

「それより、気をつけなよ」

リアンは、笑みを消し真面目な顔をしてアリスに向き直る。

「俺たちとアリスが仲がいいんで、焦つてる奴もいるから」

ちらりと、リアンが部屋のすみを見やる。その視線を追うと、そこにはアリスのほうを睨むように見つめるレンがいた。レンは、アリスと目が合うと、きびすを返してどこかへ行ってしまった。

「・・・レン？」

「他の2人も、何考へてゐるのか・・・」

クイーンの近くで来賓と話をしているソウ。会場を駆け回るケイゴ。

国家としてではないが。

この世界での地位と、このバニーの妻になるといふことが大きな意味を持つのだと、少しばかりアリスは感じてきた。

大きな競り合いもなく、権力抗争もないのは上に立つものの裁量なのでは、と。クイーンの、この世界のトップに立つ王家の物の力なのだと。追随や小競り合いの許されない世界。すべては、己の意思のみが頼りとなる。そんな世界なのではないかと、アリスは感じていた。

そんなことを、うつすら考えていると、人ごみの中からマスターとガーデンが現れた。

「アリスさん、大丈夫ですか？」

「うん、マスター。もう大丈夫」

心配そうに駆け寄るマスターに、アリスは笑って答える。

「・・・まだ少し顔色が悪いぞ・・・」

ガーデンは、アリスの顔を見てするどくそう言った。

「・・・少し、外の空気を吸つて来るよ」

アリスは小さくそう言つと、再び会場を後にした。

「・・・」

その後ろ姿を、切なそうな表情で見つめるバニーに。

「・・・最後の選択だ。邪魔はするなよ・・・バニー」

リアンは、小さくそう言つた。

あの会場にいるだけで、息が詰まりそうになる。

アリスは、賑わう館をあとにし、涼しい風が心地よく吹く中庭へと出た。

「まだ、その心は晴れず。

どうしていいのか、わからず。いつそ、誰かに強制的に決めて欲しいくらいだった。

最善の、道を。

「こんなところで、何してんのさ」

「・・・！レン・・・さん」

顔を上げると、木にすがりにやにやと笑うレンがいた。レンは、

木から離れアリスの方へ歩み寄る。

「ねえ、あんたバニーの何なの？」

レンはアリスの前で足を止め、低くそう言った。

「俺はねえ、ガキの頃からずーっとバニーの正妻になるつて決まってたんだよ」

だつて、彼は婚約者なのだから。

「あんたはさ、遊びなんだよ」

クスクスと、耳元で不快な笑い声がする。

「好きだと、愛してるだとか、あんたも言われたんだろう？」

「・・・あんたもつて・・・？」

頭がぐらぐらする。

「俺も言われたんだよ」

世界が、崩れる音がした。

「ていうか、何で外来者をあんなに熱心に王家の人に身内に入れようとするかわかる？こっちのことは何も知らないうえに、こっちにきちんとガキの頃からの婚約者がいるにも関わらず・・・」

お願い、もう、しゃべらないで。

「王家の人は、外部からの勢力を入れるのが嫌だからさ。権力争いも起きかねない。その点、よその世界から来た人間ならその心配もない。王家の血は守られて、争いも起きない」

そう、なぜなのか、ずっと不思議に思っていた。

何で、ぱっと出の俺をみんな受け入れているのか。

まして。

「世界の王子の嫁に迎えようなど……。

「ただ、それだけなんだよ。あなたの価値は。だから、バーーはお前を嫁にしようとしてんのさ」

呆然と、レンの言葉を受けるアリスに、レンは笑いながら続ける。「本当はね。バーーは俺のことが好きなんだぜ?」

勝ち誇ったような、笑み。

「あんたがいない間に、よろしくヤツてたんだよ……」シャツのボタンをはずし、眼前につきつけられたのは、無数の赤い印。

「俺のことを、本当は。……一番に愛してんだぜ?」

アリスの頬を、知らず涙が伝う。

その様子を、レンは満足そうに見据えるとアリスを一人残してその場から去つていった。

「・・・そだ・・・」

アリスは、立つていられなくて地面に膝をつく。

「うそ・・・!」

だつて、愛してるつて言つたのに。
好きだつて、言つたのに。

全部嘘だつたの?

全部、國のためだつたの?

全部・・・。

涙がボロボロとこぼれる。

「も・・・わか・・ね・・・!」

何が真実で、何が嘘?

ねえ、誰か教えて。

誰か、助けて。

ねえ、誰か・・・。

ドクン。

そこは、自分以外誰もいない教室。部活が終わって、帰ろうとして。忘れ物に気付いて、戻つて來たのだ。

「・・・? 何、だ?」

誰もいない、教室。アリスのいなくなつた、世界。もう、早2ヶ月がたつていた。誰もが彼の存在を忘れ。彼の所有物は無へと還つた。

ドクン、ドクン。

「何だ・・・?」

言いよづのない、不安。

なぜか、胸騒ぎがする。こんな時は、いつも・・・。

「ア・・・リス・・・？」

どうしたらしい？

バニーは、俺を愛していなかつた？

「アリス・・・なのか・・・？」

誰でもよかつた？

向こうの世界の人間なら、誰でもよかつた・・・？

「アリス！－？」

誰か・・・タスケテ・・・。

ドクン。

ドサ。

すぐ横に、何かが落ちる。アリスは驚いてその音の先を見る。
すると、そこには・・・。

「いつて・・・」

「裕・・・馬・・・？」

「あ？」

裕馬は頭をさすりながら、呼ばれた方を向く。そこにいたのは。今まで、忘れることがのなかつたアリスがいた。

「アリス・・・！？」

今度は裕馬が驚く番である。

ナンデ？

ドウシテ？

「裕・・・！」

裕馬を見て、安心したのかアリスは再び泣き出す。その涙は止まることなく。

「・・・やっぱり、泣いてた」

ふつつと、裕馬はアリスの肩をポンポンと叩く。

「お前泣くとわあ、何か胸騒ぎがすんだよなあ。ホラ、もう泣くなつて」

「・・・・・」

それでも、アリスは泣き止むことなく・・・。

「・・・まあ、好きなだけ泣いとくか

諦めたように咳いた後。

「とまあえず・・・」じがどこなのか知りてえ・・・

あたりを見渡しながら。裕馬はそう、ため息をつくのであった。

（続）

第10話 験と眞実（後書き）

裕馬登場。これからどんな風に動いてくれるのか。他の候補者達の動向も気になる所ですね！しかし・・・アリスがだんだんボロボロになつていくなあ（お前が言うな）。続きはなるべく早く書きます～気になるところで終わっているので（＾＾；）＜br＞この間はメツセージも頂きました～ありがとうございます、「アリス」を楽しみにしていただけていると思うと本当に嬉しくなります！！読者の皆様、遅々としていますが、どうぞこれからもよろしくお願ひ致します！

第1-1話 続・嘘と眞実（前書き）

嫁騒動もクライマックスでござります。最近はシリアスが続いておりますが、お付き合いのほどよろしくお願ひいたします

第11話 続・嘘と眞実

「アリス～？ ビニ～？」

外の後期を吸いに出たきり1時間たつても戻つて来ないアリスを心配し、リアンは中庭に探しに来た。

「あれ・・・？」

アリスをなだめながら。

アリスを探して来たらしい男の姿を見つけ。

あの人・・・どうかで・・・？

裕馬の視線に気付いたのか、リアンが寄つてくる。

「そこ？」

ひょこつとリアンが顔を出す。

「・・・？ アリス？」

明らかに様子のおかしいアリスに、リアンは怪訝な顔をし裕馬の方を向いた。

「・・・あれ・・・？ 君は・・・」

新たな、嵐の予感・・・。

「リアンさんから一通り離しは聞きました」

会場の奥のバルコニーで、何やら深刻な話をする一団。アリスはリアンによつて部屋へ戻された。まだきっと、泣いているのだろうけれど。一人にして欲しいと言われ、リアンも会場へ戻つて來た。

裕馬はコホンと咳払いをすると、一同を見据えて言つた。

「何で泣いてるんですか」

「そのまんまやん・・・」

小さく双子が突っ込む。

「僕もそれが知りたいんだけど」

「あ、とため息をつきバニーが答える。

「今来たばつかで知るかよ！？」

裕馬はそのバニーの態度につづかかる。

何だかもう、ピリピリした雰囲気が漂つ。

「とにかく、帰りたいんだけど」

裕馬は苛立ちながらそう言つた。こんなところに長居する必要な
どない。まして男の嫁になるなんて、わけがわからない。

「そんな・・・」

「待つてくれ！ 裕馬くん！ まだ・・・」

アリスを連れて今すぐ帰ると言つ裕馬に、マスターとrianが声
をあげる。

「そうやって・・・！」

裕馬は大きな声を出すと一度言葉を切つて、感情を抑えrianに
答える。

「そつやつてアリスを追い詰めないでください。アリスがそういう
選択が嫌いなの知ってるでしょ？ リアンさん」

そのセリフに、rianはぐつと詰まる。

「・・・どうする？あと3時間だぞ」

ガーデンがクイーンたちを見やりながらそう言つ。

「いーじyan。別に。アリスが候補からはずれりやアリスと俺は帰
るんだから」

むしろさつさと時間よたて、と裕馬は思つ。

「そうだが・・・」

誰もがこの不測の事態をどうしたものかと考えあぐねる。

「どおしたの？ みなさんお揃いで～」

そこへ、相変わらず人をバカにしたような笑みを浮かべたレンが
現れる。

「・・・

それに対し、バーーは冷ややかに見つめるのみで返事を返さない。
「・・・何だよ。その田は。アリスにはあんな顔するの」

チツとレンは舌打ちをする。

「何の用だ? レン」

イライラした様子でクイーンが口を挟んだ。

「・・・別にイ。アリスはビリしたのさ。いへつつもあんまりとこ
たじやん?」

「お前には関係ない」

念むようなレンをバーーはピシャリとはねつける。レンの目が険
を帯びる。

「レン」

その様子をいつから見ていたのか。ソウが割って入ってきた。

「・・・何だよ」

「・・・あまり悪巧みはするものじゃないよ」

ソウのその言葉に、全員が一斉にレンを見る。レンは、わずかに
たじろぐ。

「・・・何のこと・・・」

ガニツ

いつもにやけた顔で、じまかそりとしたレンを。バルコニーの
柵に押さえつけたのは・・・。

「バーー・・・!」

ぎりぎりと、レンを締め上げるその様相は、怒り以外の何物でも
なかつた。

「アリスに・・・何をした・・・!」

「何・・・だよ・・・!」

レンの顔に恐怖が浮かぶ。

「言った方が身のためだと思うが

そのバーに乗じるよう。冷たい瞳で、クイーンが言った。

「く・・・す、少し・・・！からかっただけだろ・・・！？」

最後の強がりで、はつと鼻で笑いながらそう言ったレンの顔を、

バーが容赦なく殴る。

「アリスに、何を言った

。その顔は、背筋が凍るような冷たさと、怒りをたたえていた・・・

「う・・・え・・・」

アリスは止まらない涙を何度もぬぐいながら、枕に顔をうずめた。

何でこんなに悲しいの？

何でこんなに涙が出るの？

もう、何も考えたくない。

何も信じられない。

その時、ばたん、と音がして部屋に誰か入つて来た。
その音に、アリスが振り向くと、

「・・・アリス・・・」

走つて来たのか、肩で息をしているバーがいた。

バーを見ると、アリスの頭の中でレンの言葉が反芻する。

「や・・・だあ・・・」

アリスの瞳から、さらに涙が流れ出る。

「アリス・・・！レンの言つたことは・・・」

「もう嫌だ・・・！何も聞きたくない・・・！」

アリスは耳を塞ぐ。

もう、何も聞きたくない。

何が真実で。

何が嘘かなんて、わからない。

そんなアリスを、バーーは抱きしめて自分のもとへと寄せる。アリスの体が強張る。

「アリス、僕はアリスだけを愛してるよ」

耳元で囁く、優しい言葉。

それなのに、今はその言葉が刃のように胸に突き刺される。

「・・・嘘つ・・・！だつて・・・レンが・・・！」

私を本当は愛していらないんでしょう？

私を、利用したいだけなんでしょう？

ねえ、お願い。

もう、私をかき回さないで。

「アリスは、僕とレンのどっちを信じるの？」
「だつて・・・！」

誰の言ひどいが真実で。

誰が誰を愛しているの？

「信じて、アリス。僕はアリスしか愛していない。レンなんて、抱いてないし、抱く気にもならない。・・・アリス以外に、欲しいものなんてない」

バーーの腕から逃れようとアリスを、バーーはより一層強く抱きしめる。

「ふ・・・う・・・」

「ごめんね。アリス。一人で悩ませてしまつて」

「大好きだよ・・・アリス」

バニーは、アリスの耳元で。まるで子どもをあやすように。優しく、優しく、言葉をかけ続けた。

一方。別室には。裕馬、リアン、マスターがいた。
「アリスは前にもあんなふうに泣いてた」

裕馬は、ポツリと語りだす。

「親の・・・離婚の時？」

「そうです。アリスは、どっちも好きだつたから・・・どちらに付いて行くのかと選択を迫られて。最後まで悩んでた。本当に、見ていて切なかつたですよ・・・」

「最終的には母親についていって、その2年後にうちの親父と再婚・・・。ま、うちもバツ1のゴブ2つ付きだつたけど」

そう話したリアンに、裕馬以外のみんなが驚く。

「え！？じゃあ、アリスさんとリアンさんて義兄弟なんですか！？」
「そうよ。一緒に暮らしたのはほんの数年だけね。こっち来ちゃつたから」

苦笑しながらリアンはそう言った。

「・・・あんな上体のアリスを・・・あいつに任せといて大丈夫なのかよ」

裕馬はぶすつと言つた。

「大丈夫でしょ。あの子は、誰よりバニーを大切にしてるから
・・・んなの・・・わかんねーよ・・・」

仮にも、アイツは。どんな理由があつたとしても。アリスを不安

「」させたのだから・・・。

「」Jつちは終わつたぞ

ばたんと、扉が開きクイーンたちが入つて来る。

「帰つてもらつた？」

「ああ。まあ、無茶を言つのはいつものことだし、こんな事態だからな。結果は追つて報告すればいいこと。結婚しますつー宣言ともにな。だいたいがこういうことでもないと國の人間と会わないからやつてる形だけの式だからな」

クイーンやガーデンは、来賓を帰して回つていった。もう、12時となつていた。本来ならば、12時ちょうどに、バーーの結婚相手を発表する予定であった。しかし、今回、こんなこととなつたためとりあえずお開きという形をとつたのだった。

「クイーン、あのアホはどうにするん~？」

「海にでも流す~？」

あとから入つて来たホワイトとブラックは楽しそうに言つ。アホとはもちろんソレンのことである。今は、トランプ兵により拘束され、別室に換金されている。

「アリスに処分させよ~」

クイーンはしばし考えたあと、そう言つた。

「そうだな」

それがいいだらう、とガーデンも粗槌をうつ。

「お話中、すみません」

そこへ、ソウが入つて來た。

ソウとケイゴはまだ残つてもらつていたのだ。
「すまないな。残つてもらつて。で?どうした?」

クイーンが促すと。

「・・・アリスさんは、どうこう決断を下されるのでしょう?・・・?
?」

「・・・もう少し、待つてもらえるかな。ソウ
その質問に、リアンが答える。

「ケイゴ、待つよ〜〜！！

「えらいね。ケイゴくんは、はい、アイス食べる?
にこやかお兄さん（お姉さん?）はそう言ってケイゴにアイスを
渡した。

「みなさんも、紅茶でも飲んで一息つきましょ〜」

「アリス、落ち着いた?」

「・・・うん・・・」

アリスの涙は、ようやく止まつたようだつた。

「アリス、愛してるよ」

バニーはアリスの目を見て、優しくそう言った。

「僕はね、アリス。アリスがどこの世界の人間かなんて関係なく、
アリスに惚れたんだよ」

一言、一言、バニーは話し始める。

「子どもの頃からの婚約者も、国のこと、僕にとつてはどうでも
いいんだ。ただ、アリスを愛しただけなんだよ。王家の人が、外
来者を結婚相手に選ぶことが多いのはね、損得なしで一緒にいく
れるからなんだよ」

國も、權力も、關係なく。

そこにあるのは、相手を思つその気持ちだけ。

「だから・・・僕がアリスを好きな気持ちは、本当なんだよ」

バニーのその言葉一つ一つが、アリスから不安を取り除いていく。

「アリスは・・・僕のこと・・・」

バニーはそこまで口に出してそれ以上は黙つてしまつた。

もし、アリスに嫌いだと言われたら?

そう考へると、続きを出ない。

どれだけ相手を思つても、相手から思つてもらえないこともある。それに、アリスには、元の世界に家族もいる。友達もいる。

「・・・だよ・・・」

アリスは、ぽつりと言つた。

「・・・え？」

「バニーを信じる。だから・・・ずっと、俺を好きでいて・・・。俺も・・・バニーのことが、好きなんだと・・・思うから・・・。今はまだ、断言ができないけど。

あなたの言葉にこんなに一喜一憂するのは、きっと・・・。

「アリス・・・！」

バニーは、そのアリスの言葉に思い切りアリスを抱きしめる。「ずっと、僕はアリスを愛し続けるよ・・・」

その抱きしめる腕は、かすかに震えていた。

アリスは、その心地のよい胸の中で、いつの間にか眠りについていた・・・。

翌日。

それはもう、超がつくほどいいお天氣だった。

「・・・まだ、目、はれてるなあ・・・」

「しかたないよ」

鏡を覗いていたアリスの後ろからバニーがひょっこり現れる。

「・・・・・！」

それだけのことなのに、アリスは赤くなつてうつむいてしまう。

「アリス」

その様子を見ながら、バニーは軽く笑いながら、アリスを呼ぶ。

「な、何？」

そう言いながら、振り返ると。ちゅっと、バーに軽くキスされた。

アリスはゆでだこになりながら口をパクパクさせている。

「クイーンたちが待ってるよ」

優しく微笑むバーに差し出された手をとつて。アリスとバーはクイーン達の元へ向かった。この時、アリスは一つのことを、心に決めていたのだった・・・。

（続）

第1-1話 続・嘘と眞実（後書き）

愛してゐるを連呼するバー……。ある意味お前はすげーよー！何とかハッピー エンドの方向ですね！（何とかって……？）だんだん愛の国つぱりを發揮してきております。たぶん、嫁騒動は次で終わると思います。続きを楽しみにお待ちください

第1・2話 決着（前書き）

長らく続いた嫁騒動。こんな結末・・・ある意味予想しきれません・
・・（笑）私の中では今回の話が読め騒動のメイン。

第12話 決着

「本当にですか！？アリスさん！！」

一番最初に声をあげたのはマスターだった。感激のあまりか、うつすら涙が見える。

朝、アリスはクイーンたちのいる部屋へと行くと、じりく残ること、バニーの正式な婚約者となることを伝えた。

「よかつたねえ、バニー」

リアンも笑顔で息子の髪をぐしゃぐしゃにしている。・・・嫌がらせか。

「じゃあこれで、正式な婚約者は決まったわけだ？」

ガーデンが、その場にいたソウとケイゴを見ながらそう言った。

「そうだな・・・」

クイーンも、ソウとケイゴに向き直る。

「アリスが婚約者になつたんだー！おめでとおーじゃ、ケイゴ、家に帰つてパパとママに報告するーーー！」

元気一杯ケイゴくんはそう言つといそいそと帰り支度を始める。リアンは、トランプ兵を呼び、ケイゴを無事に親元まで送るよう伝えた。

まったく。

残念そうなそぶりなどない。

「どうか、どうでもいいんだね・・・」

「僕も、別にかまいません。バニー様にはアリスさんが合っていると思いますし・・・それに・・・」

ソウは、にこにこと続けた。

「僕、一日ぼれをしてしまつたんです。自分はバニー様の妻になるとの思いを持ってきたのですが・・・友人を思う、その心に惹かれました」

ソウは、その思い人へ向きかえる。

「絶対、あなたを振り向かせてみせます。裕馬さん」

一瞬。

時が止まつた。

「・・・・へ？」

まつたくもつて。
自分へ話しえの矛先が向くとは思つていなかつた裕馬は。
思いつきつ。

間抜けな声を出した。

「これはまた・・・意外な・・・」

リアンは笑いをこらえるよつた笑いを浮かべ。

「じょ・・・冗談じや・・・!..」

裕馬は突然の申し出に青くなる。

「モテモテですね、裕馬さん」

にこりとマスターが笑む。

ていうか。

モテたくねーつついの!!

「お・・・俺はホモじやね〜〜!!あ、アリスト!!」

いつぞやの誰かのよつた雄たけびをあげつつ。すがるよつにアリスを見る裕馬に。

「親友として応援してやるよー。」

いつもの仕返しとばかりに。笑顔全開。

「・・・ひど・・・!!」

落ち込む裕馬に、リアンが肩を叩く。

「かわいそうにねえ。裕馬くん。アリストは鈍感だから気付かないんだよ」

「こんなに、アリスを思つてゐるのにねえ。と漫るリアン」。裕馬はきょとんとし、リアンを見つめる。

「何が……ですか？」

「え？ 何つて……裕馬くんがアリスを好きつてこと、そりなんでしょ？」と問うリアンに対して。

「ぶつ・・・！ やだなあ！ それ！ すぐ一キモイつすよ～」

ゲラゲラと声をあげて裕馬は笑い出す。

「俺がアリスのこと心配したりしてんのは、別に恋愛感情とかじゃないツスよ。マジ、友人として、です」

きつぱり言いのける裕馬に、リアンはそらなの～？とつまらなさうに声を上げる。

「・・・それでさ、裕馬は、どうすんだ？」

笑い転げる裕馬に、アリスは表情を曇らせながら問い合わせる。自分が、呼んでしまった、裕馬。

でも、裕馬にも、自分と同じように家族がいて、友人もいる。ずっと、ここにいるわけにはいかない。

「あ？ まあ、帰るのは無理だーし。俺もこっちに残るわ」

そんな、アリスの戸惑いを、一蹴するこの悪友。

「アリスのこと忘れるのも早かつたしな。みんな。こっちの時の流れって向こうより遅いんだろ？ もう俺のこととも忘れられてるだろうし。ま、人生こんなことがあつてもおもしれーよなー！」

それでいいのかー？

と突っ込みたくなるのは……間違つていないだろう。
まあ、そこは……裕馬だし、つてことで片付けるといったしまじょう。

そんなこんなで。円満にその場が流れていったところへ。

「てめえ！！離せ！！！」

静寂を突き破るような怒号。

「・・・来たか」

クイーンが扉を振り返る。そこへ入って来たのは・・・。トランプ兵に連れられた、レンだつた。ぎやあぎやあ喚くレン。「さて、最後にこいつをどうするか。アリスに決めてほしこんだが」クイーンはため息をつきながらそう言ひ。

「てめーらー王族だからって俺にこんなことしていいと思ってんのかよーーふざけんな！！！」

「どこまでも躾のなつてない犬だねえ」

リアンも静かにレンを見下ろしながらやれやれといったふうである。

「だいたい・・・お前らみんな、そいつに買収でもされたんじゃねーの！？でなきや、俺がそんな奴におとるわけねーだろーー！」

もう、言いたい放題。

謝罪する気ゼロ。

「・・・躾がなつてない上にナルシストかよ」呆れたように言つガーデンに。

ブツ・・・と何かが切れる音が聞こえた・・・。

ふつ？と思つてゐる間に。アリスがつかつかとレンの元へと向かう。

レンの前で一度止まつた・・・と思つた次の瞬間。

ゴツ・・・！！

鈍い音がして、レンの体が後ろへ倒れる。

「誰が・・・テメーに劣るつてえ？」

地を這つよくな、声。

「昨日のこと謝るかと思えば・・・」

その様子に、裕馬が反応する。

「げ・・・・・アリスが切れる・・・・・」

そう言つと、ぱっとテーブルの後ろに隠れる。

「だ・・・誰が謝るかよ・・・・・！」

アリスから唐突に蹴りをくらつて一瞬、面食らつたが。そのおかげでトランプ兵の拘束から自由になつた。それをいいことに、レンはアリスめがけて殴りかかる。

しかし・・・。

レンはまだ知らなかつたのだ。

本来ならば、ここで土下座をしてでも謝つておるべきだったことを・・・。

「アリス・・・・！」

バニーがそれを見て声をあげた。しかし、そんなバニーの心配もよそに、アリスはひょいとレンの拳をよける。そして、足をかけ、相手のバランスをとる。

そこへ、これでもかとばかりに。

踵落とし。

「あいつ・・・死ぬぞ・・・・」

恐ろしい予言をする裕馬に。

一同は・・・テーブルの後ろに隠れるべきかな・・・と思つのであつた。

バランスを崩したところに踵落としをくらつたレンは、地に体をつく。

そこから、起き上がりとした瞬間。

頭が。

地に引き戻された。

「もお、キレたもんね」

レンの頭には・・・アリス様の、おみ足が・・・。

「あ・・・足をどける！－こんな」として・・・ここと思つてんの

か・・・・！」

屈辱的な体勢となつてもなお。
怒鳴りちらすレンに。

「ああ！？親の力がねーと何にもできねえくせに・・・いい気になつてんじゃね～！！」

さらにもう一発。

「・・・・！—げほ・・・・—！」

しかも鳩尾。一直線。

「・・・いやあ・・・元気に育つてくれて、お兄ちゃんは嬉しいよ」
ほろりと、テーブルの後ろで漫るリアン。

「前にキレた時はこんな感じになかったんだがなあ」
のんきに分析をするクイーン。

「止めたほうが・・・」

「いいんだよ。マスター。あれくらい」

しつつもガーデンは言つが・・・あれくらい？

レンとアリス以外の全員が・・・テーブルの後ろなのにですか・・

・？ガーデン様。

「よ・・・よくもつ・・・！」

それでもめげないレンくんは。

自棄になつて近くにあつた果物ナイフを手に取るとアリスに切りかかつた。突然のことにアリスはよけきれず、アリスの頬を赤い雲が伝う。

「アリス・・・・！」

その血を見てバーーは慌てて飛び出そうとする。他の人間もレンを止めようと立ち上がる。が。

「わ～～！—お前らよせー！血を見たアリスは見境ないんだー！やめろー！手を出すなー！」

と、裕馬が必死の形相でバーーを食い止める。それを聞き、一同。とりあえず様子を見ようかな、なんて。バーーを裕馬が必死で止めている間。

アリスは、自分の頬を伝う温かいものをぬぐつ。

真っ赤な、血。その雲は、絨毯に点々と染みを作った。

「は・・・！－ざまあみやがれ！－」

レンは乾いたように笑いながらアリスを見やる。

その。笑いは。

次の瞬間。

悲鳴に変わった。

「ぎゃあ！！」

血を流しながらアリス様。渾身の一撃を顔面めがけて容赦なく。

「・・・俺の顔に・・・何しやがんだ！－お前の顔とは違うんだぞ
！－テメーやつぱ死ね！－てか殺す！－」

何と言つか。

美人が怒ると般若になるつていうよねつて感じ？

アリスはレンの胸倉を掴み、無理やり立たせる。

これには。さすがのレンも恐怖を覚えてきたのか・・・。

「ひつ・・・！－」

顔から余裕は一切消え、恐怖のみがうつる。

「・・・もう、そろそろかな・・・」

そんなバイオレンスなアリスと時計を交互に眺めながら、裕馬く
ん。

「覚悟は・・・」

「ひー！－すいません！－すいませんでした・・・！－もう勘弁してくれ／＼・・・！－！」

ついに泣きの入るレン。

「・・・！え？あ、うん。わかればいいんだけど」

アリスは、今までの形相はどこへやら。あいつとレンを離す。

「・・・？どうなつとるんや・・・？」

あまりの恐怖に今まで黙っていたブラックがぽつりとこぼす。

「あー、アリスなんですけど、キレても3～5分で元に戻るんです
よ・・・」

人騒がせツスよね」と裕馬。

その人騒がせなアリスに対し。レンはついに土下座まで始めている。

「わーーー顔上げろつて・・・・・！」

「本当にすいませんでした　！！」

「・・・きつとレンつちゅー奴は・・・今一生分の謝罪をしとるんやろな・・・」

ちょっとと遠くを見ながらホワイトはつぶやく。

「あー、ごめん。俺、キレてた？その顔・・・」

「しかも、本人キレてた間のことをはっきり覚えてないんですね・

・・・

「こちらも遠い目な裕馬くん。・・・そんな友人持ちたくねえ・・・

「人騒がせやな・・・」

本心から、しみじみと。

そして、こちらではまだレンの謝罪が続いている。

「本当にすいませんでした！－あんなこと言つて！－全部嘘です！

！」

「・・・いいんだよ。レンさんがそう言つてくれたおかげで、俺も自分の気持ちに気付けたし。・・・俺も、バーーが好きなんだ。ごめんね。バーーは、譲れないや・・・」

その言葉に、レンは涙をこぼす。

汚い手を使つたのは、バーーの妻になるため。

権力が欲しかつたのもあるかもしれないが・・・。本当は、レンもバーーのことを好きだったのかもしれない。もしかしたら、婚約者だと認識した、その時から・・・。

そんなこんなで。レンはトランプ兵に連れられて自分の家に帰つていった。

「やー、これで嫁騒動も一段落だねえ」

どっかりソファに座つてやれやれと言つのはリアン。

・・・あんた、言つほど何かしたか・・・?とつっこみたくなる衝動にかられながら。

「アリス、傷は大丈夫?」

相変わらず、アリスにだけ甘いこの男。

「あ、うん。思つたより深くないみたい。かすり傷だよ」キレたところまで見られて何かもう恥さらしまくりのアリスは、うつむきかげんでバーに答える。そんなアリスの頬に。手当された絆創膏の上から軽くキスをする。

「・・・わ!」

アリスは突然のバーの行動に真つ赤になる。

「・・・早くよくなるように。おまじない」

バーは可愛らしく答える。

そんなラブラブな2人を完全無視し。

「そういえば、ソウはどうすんの?」

にこにこと、その場に残つたソウは。裕馬を見上げ。

「ふふ。ここに残つて裕馬さんと暮らします」

ターゲット・ロックオン。

「なー?帰れよ・・・!お前・・・!」

青くなる裕馬に対し。

「わあ、ご近所さんが増えるんですね~。嬉しいなあ能天気なマスター・・・。

「どうぞよろしくお願ひします」

深々と頭を下げるソウに。こちこちんと話し出す正妻たち。

「え!~や・・・ちょっと待・・・!お、俺は・・・!」

何やら怪しい雲行きに。

裕馬は珍しく慌てふためく。

その裕馬に対し・・・。

ぽん、と肩を叩いて哀れみの表情を浮かべるクイーンとガーデン・

・・・。

「・・・・・」

いやはや。」うして嫁騒動は一段落ついたものの。まだまだ、一
波乱も二波乱も起こりそうな余韻を残して。アリストバニーは、正
式に婚約を交わすこととなつたのであつた。

（続）

第1-2話 決着（後書き）

いかがでしたでしょうか。どうやら仲間が増えましたね。ソウくんと裕馬くん。今私はとっても悩んでいることがあるのですが・・・。ソウと裕馬・・・裕馬×ソウとするか、ソウ×裕馬とするか・・・。うーん。こっちがいい!とこっちを希望お待ちしております(笑)どちらがいいかな・・・。と、いうことで、アリスな話!はまだまだ続きますので、お付き合このまじ、よろしくお願ひ致します!

第1-3話 朝食戦線（前書き）

今回は、アリスと裕馬が出張ります。あまつらづっぽくないですが。新たな波乱（？）への伏線です

第13話 朝食戦線

平和な、平和な朝が訪れました。ただ今、午前8時。ほつとくと暇な人間はううん、あと2、3時間……と（作者だけ？）惰眠をむさぼるその時間。というか、こっちに来てだいぶたつアリスなんか思い切りそのパターンで。眞面目に朝ごはんを食べるのが実は今日がはじめて。

アリスに裕馬、そしてソウと。新しいご近所さんも増えましたということ。食事をしばらくクイーン邸でもある公館でみんなで摑ることとなりました。

爽やかな朝日とともに、マスターの淹れる紅茶の香り。そして。

朝からむせ返るような・・・。

「重つ・・・！」

料理の品々。

アリスは眼前に繰り広げられる、え？今は夕食の時間かな？と小首を傾げたくなるような料理を目の前に、うつとその一言を発する。そしてその横では。ちょっと精気の抜けたように呆然と料理を眺める裕馬がいた。

「これ、何・・・？」

嫌がらせ？とか思つてみたり。

アリスと裕馬は、渋好みなのか2人とも朝はご飯に味噌汁と決めていた。洋食は食べれないことはないのだが、長年の食習慣からか、あまり受け付けない。しかも、パンにスープという次元を超えたこのメニューは・・・。2人の胃に。食べる前から大きな負担をかけるのであつた・・・。

一方、2人が料理を目の前に愕然としている中、他の面々はどうと。

クーンは眼鏡をかけ、何やら文書に目を通している。バーもその横で何やら難しげな本を読んでいた。この2人、ものを読む時の顔が一緒だ・・・。そして、ガーデンは「う」と、自分の目の前で何やらつむぐと騒ぐ例の双子に鋭い一瞥を投げかけていた。投げかけられた双子には、その一瞥の意味は通じてはいなかったが。rianとソウはいそと朝食の準備にいそしみ、マスターはにこにこと紅茶を淹れる。そんな、のどかなのどかな風景。

に、見合わない料理。

「ていうか・・・そこだけ別世界・・・」

遠い目をしてアリスはつぶやくのであった。

ああ、食文化の違いつておそれしい。

そんな心の叫びも虚しく。

モーニングタイムは始まるのであった・・・。

改めて眼前に並ぶメニューを見て。

思わず目をそらしてみたよ。つか、匂いも強烈ね。このご飯たち。ふと裕馬を見やると、がつがつ食べるホワイトとブラックを引きつった顔で眺めている。何と言うか・・・ご馳走様。

「どうしたの? アリス、食べてないみたいだけど」

心配そうに声をかけるバーに。今回ばかりは放つておいて欲しい気満々。

「アリスは昨日大変だったしねえ。食欲ないんじゃない?」

珍しく、rianがアリスの欲しい助け舟をくれる。

その言葉に、アリスは便乗し、そなんだよね~あはは。なんて答える。

「じゃあ、フルーツだけでもどうぞ」

いつも優しいこのお兄さんは、気を使ってフルーツが盛つてあ

る皿をとつてくれる。

「ありがと」

涙が出るほど嬉しいツスよ。と思いながら。適当な量を皿に取ると、それを同じ思いの裕馬にまわす。

「急に環境が変わって、裕馬もあんまり食べれねーだろ?」

そんなアリスに対して。サンキューーー！アリスー愛してるぜ　なる笑顔を向け。そのフルーツの盛られた皿を受け取る。

そのやりとりを。

静かに見つめるバニーとソウがいた。

「いやはや。これはおもしろい」

それを見ながら、こんな不謹慎なことを言つてのけるのは。もちろんリアンさん。

「楽しそうだな・・・」

呆れ顔でリアンを見ながらクイーンはつぶやく。

「そお？」

言つてるその顔には・・・満面の笑み、であった。

そんな楽しい朝食会も終わり。だるだるとしかし、各自が好き勝手に過ごしている時間に。

「・・・腹へった・・・」

何ともぞぐわないアリスのこの一言。

いつもはおなか一杯食べるご飯と味噌汁を抜いて。しかも起きた時間は早いし。食べたのはフルーツのみ。そりやあ、健全な男子高校生はお腹もすくよ。ソファで隣に座る裕馬なんて。アリスより代謝のいい分。余計辛そうに見える。

そんな状態で昼ご飯までの時を過ごすうとしていた2人に。扉のところにリアンが手招きをしてくる。

「・・・？俺たちかな？」

「みてーだな・・・」

2人は、呼ばれるままにリアンの元へと駆け寄るのであった。そ

してそのまま、その部屋をあとにした。

「どうしたの？ リアン。 どうか行くの？」

行き先も告げず、公館を出て行くリアンに対し、アリスが問う。
「ふふ～。ま、ね。2人とも、腹減つてんでしょう？ ま、誰だつて朝
からあの料理はちょっと引くよねえ」

あはははは～」とリアン。

「気付いてたんですか？」

裕馬のその言葉に。リアンはにやりと、当たり前だよん。とだけ
答えた。

そして、3人は公館から5分ほど歩いた場所に着いた。
そこには・・・。

「うつわ～・・・」

ここは、さつきまでいた場所と同じ敷地にあるもの？ と、一瞬目
を疑いたくなるような、竹林。

「純・・・日本建築・・・」

その一角に建つ、昔ながらの日本家屋。

リアンは、呆然とその屋敷を見つめる2人をどうぞ、と中へ通し
た。

「！」はね、離れなんだよ。俺、日本文化好きだからさ～ わがまま
言つてクイーンに建てさせたんだよね～」

笑つて言える次元じゃねーよ。それ。

リアンはそんな恐ろしいコメントを残し、アリストたちを密間に通
すとちょっと待つてね～と部屋を出でいった。

「すげえ・・・これ、かけじく？」

「これって、檜？」

残った2人は・・・ ちよう低次元な会話を繰り広げるのであった。
・・・。

30分も待つただろつか。

リアンがお盆を持って入って来た。

「お待たせ〜rianさん特製和朝食よん

アリスと裕馬の前に置かれたのは。

「ありあわせのものだからたいしたモンじゃないけど」

「じめんね〜と語つrianに」。

「く・・・食つてい〜の?」

「う、うまそう・・・」

飢えに飢えてるんだね・・・。

「どーぞ」

その言葉に。アリスと裕馬は景氣よく。いつただきま〜すと食べ始めるのであつた。

「今まで和食派だったなら、じつちの食事は慣れるまでキツイかもねえ。めっちゃ洋食よ。じつちって。しかもやたら重いんだよねえ」「苦笑しながらrianは語づ。

住む世界が変わるということは、じつじつとでもあるんだなあと。2人は改めて感じるのであつた。

「まあ、ここにはたいていのものは揃つてるし。和食が食いたきや作つてやるから。いつでもいいなよ」

おいしそうにがつづく2人を嬉しそうに眺めながら、rianはそういう言つた。

「は〜おいしかった〜!駆走様!〜!」

淹れられた煎茶まできつちり飲み干して。大満足と、顔に書いてある。

「ほんと、うまかったです。じちそつさまでした」

「いえいえ、おそまつさまでした」

ここまでやりとりをし、誰からともなく笑い出す。
久しぶりの、なごやかな時間。

3人で食べたあとを片付け。

アリスの要望で、屋敷の中を案内してもらひことになつた。
檜のお風呂に縁側に。お茶室に。畳の香りが、木のぬくもりが、
どこまでも温かい。

「ここはちょっと毛色が違うんだけど・・・」

そう言つて、rianが止まつたのは、この屋敷ではじめてみるド
アノブのついた扉。中に入つてみると、この部屋だけフローリング
だつた。

「は～ここはフローリングなんスね」

結構な広さのあるその部屋を見渡しながら裕馬が言つ。

「rian・・・あれ、ピアノ・・・？」

アリスが指差すその先には、漆黒のグランピアノ。その部屋の
片隅に、ひとつそりと置かれていた。

「そーそー。グランピアノってかつこにいじやん?・びうしても欲
しくてさあ」

ひけるわけないんだけど、と前置きをし。

「むじうとシンクロした時パクッときちやつた」

あなたの本気はどうまでですか？

ぞうと一歩引くアリスと裕馬に冗談だつてーと言つが・・・本当
のところはどうなのか。とりあえず、疑問にはフタをするとしまし
ょう。

アリスは、気を取り直すと、そのピアノのフタを開ける。
そして、静かに鍵盤をなぞる。

ローン・・・

静かな部屋に、その音が大きく響く。
空気が、締まる。

「・・・綺麗な・・・音・・・」

アリスは、今度は椅子に腰掛け、鍵盤を一つ一つ丁寧に押していく。

「アリスはピアノが弾けるの？」

意外そうにリアンが聞くが、アリスはその問い合わせに対して返事をしない。

「無駄ですよ。もう、アリスの耳には何も届きません」
裕馬は苦笑しながら、でも、少し困ったように言った。

「アリスの前の父親が結構有名なピアニストで。アリスも弾けることは弾けるんスけど・・・」

「音が、いいな」

ぽつりと、アリスはつぶやくと。
本格的に、ピアノを弾く体制に入った。

（続）

第1-3話 朝食戦線（後書き）

いかがでしたでしょうか。あまりラブっぽくない回ですね！続きを楽しむにっこりで

この場を借りて。いつも『アリス』を読んでいただきましてありがとうございます。最近は評価やメッセージもいただけて本当に嬉しいです。こんなところで何ですが。いつも感謝しております。皆様からのコメントやメッセージは参考にさせてもらいますので どんどんリクエストや更新早くしろとの意見（笑）ありますらお願ひいたします。励みになりますので。ではでは、これからもよろしくお願いいたします。

第14話 心の音・前編（前書き）

更新遅くなつて申し訳ありませんでした（平謝）！もう何かそれしか言つことがないくらいな勢いです！ハイ！では、本編へどうぞ！！

「ここにもいないな。いつたいどこへ行つたんだか」朝食を摂っていた公館から。気付いたらアリス・リアン・裕馬の3人が消えていた。それから。バー宅・ソウ宅とまわってみたが、3人を見つけることはなかつた。そして。もとの公館に戻つてきた。

「もう！裕馬さんつてば。僕を置いてくなんてひどいなあ」

ソウはふんふんと可愛らしく立腹中だ。

あと、3人のいそうな所は・・・。

と、クイーンとバーが思いをめぐらせていると。

『あ・・・』

2人の声が重なる。

「・・・え？」

ソウが2人を振り返ると。

「あそこかもしれんな」

クイーンはバーと顔を見合せると、じつちだと、バーとソウを連れて書斎へと入つていった。

実は、この公館にはクイーンの書斎がいくつかある。その用途によつてクイーン曰く、使い分けているらしいが。この書斎は、クイーンが半分息抜きに使う部屋。クイーン好みの洋書や新聞がきっちりと並べられている。そして。本棚と対した壁には。大きなモニターがつけられていた。

クイーンは、ピピットリモコンを操作する。すると、モニターにはいくつかの画面が現れた。

「これは・・・？」

「例の離れにつけた隠しカメラの映像だ」

「・・・今、さらりとアンタ、何て言ったよ？

離れの存在は知つていても、隠しカメラの存在は知らなかつたバーはいささか驚いた顔をしている。そこへ。ソウが。最もな質問

をしてみた。

「・・・なぜ、そのようなものを・・・？」

「rianはよく一人で離れに行くからな。妙なことはしないだろうが。ま、こるかどうかを確かめるためだな」

しけつと言うクイーンだつたが。その後ろからモニターを見つめる2人は、絶対嘘だと確信をしていた・・・。

所在の確認にこんなもん必要ねーだろ。

まさに。その通り。

どこまでも、いいご趣味なクイーン様でした。

「ど、ここだな」

リモコンで各部屋を映していると、その映像の中には3人を見つける。

高性能なモニターくんからは音声も流れている。

そこに写っているのは。感心したようなrianと。嬉しそうな裕馬。そして。真剣なまなざしでピアノに向かうアリスの姿だった。
『おへ。こりや、アリスの演奏聞けるかな。アリス、ピアノが気に入らないと弾かねえもんなあ。すっげーうまいのに』
裕馬は興奮気味にしゃべっている。

『そんなにうまいの?』

裕馬はrianの問いかに、アリスを真っ直ぐ見据え。

『天才的です』

そう、答えた。

胸が、ドキドキする。ピアノを前にしてこんな気分になるのは何年ぶりだろう。

アリスの頭の中は、田の前のピアノでいっぽいだった。

そんなアリスの様子をバーは穴があくほど見つめている。

ソウも同様に裕馬を見つめているが、どこか切なそうな瞳をしていた。

「・・・行つてみるか？離れ」

クイーンは、静かにそう言った。

ふうっと、アリスは大きく息をはく。高まる鼓動を鎮めようと、集中力を高める。

そして。

静かに鍵盤に指を置く。

ピアノの澄んだ音が部屋に満ちていった。優しく、しかし決して弱くない、音色。

透明で、澄み渡るような、そんな音。

アリスはまるで生き物をなでるかの様な優しい手つきで鍵盤に指を滑らせる。

リアンも裕馬も言葉なく、その音に聞き入っている。

やつぱり、いい音色だ……。この、ピアノ。

アリスの頬が自然と緩む。

そのまま、アリスは没頭してピアノに向かっていた。途中、クイーンたちが入つて来たのにも気付かず。

どのくらい没頭してピアノに向かっていただろうか。そんなアリスがピアノから指を離したのは、音に小さな違和感を感じたから。

「・・・違うな・・・」

急にアリスが演奏をやめたので、それまで静かに聞き惚れていた全員が怪訝な顔をした。

「どうかしたのか？アリス」

裕馬がアリスの傍に寄り、声をかける。

「え？あ・・裕馬か。あ・・あれ？いつの間に・・・みんな来たの？」

？」

「気付かなかつたのか？アリス」

クイーンたちの存在に今気付いたらしいアリスの反応に、クイーンが驚いてそう言った。

「あ・・・うん」

「ちょっとバツが悪そう」「アリスが返事をする。

「すごい集中力だねえ」

リアンもそれには感心したらしく、へえっと声をあげる。アリスは曖昧に笑顔を返しながら振り返る。そして。振り返った先で、バーと視線が合う。その瞬間、アリスの頬がかすかに赤らむ。今日、初めてまともにバーの顔を見る気がする。こちらに向けられる、無償の笑顔。自分だけに、向けられる・・・。

つて！－何考えてんだ！－俺ツ・・・！－！

思わずバーに見惚れるアリスくん。まだまだ青い。

「何赤くなつてんだ？恥ずかしがることねえじゃん。うまいんだからさ！」

そして。嬉しくも検討はずれな裕馬のセリフに。現実に戻つてみたり。

アリスは静かに立ち上がる。

「え？もうやめちやうの？もう一曲くらい聞かせてくんない？」

ピアノから離れるアリスを、リアンが引き止める。

「や、ちょっと音がおかしいトコがあつて・・・調律したいんだけど、道具つてある？」

「・・・僕が持つてくるよ」

どことなく、沈んだ表情のアリス。そのアリスの言葉を受けて、バーが道具を取りに部屋を出る。

「・・・じゃあ、俺たちは帰るか

「・・・そうだね。また聞かせてよ。アリス。この部屋は好きなんだ
け使つてくれていいかねえ」

バイバイ、と手を振つてクイーンとリアンが部屋を出て行く。

「・・・裕馬さん、僕たちも行きましょう・・・」

「え？いや、俺は・・・」

アリスと一緒に。そう伝えようとした先のソウの表情は。どうま

でも切なく。声もなく、裕馬のシャツをひっぱる。

「・・・・ああ・・じや、行くか・・・」

さすがの裕馬も、ソウのその表情にソウの意見に従つた。

誰もいなくなつた部屋で、アリスは一人、ピアノを見つめていた。

もう、一度と弾かないつて決めてたのに・・・。

アリスは、俯くようにして、瞳を閉じた。

そうしていると。

あの日のことが、脳裏によみがえつてくる・・・。

あの、寒い、寒い冬の日。

アリスの人生の中で。

忘れるのできない、あの日の出来事・・・。

（ 続 ）

第14話 心の音・前編（後書き）

いかがでしたでしょうか？何か暗く本編が進んでおりますね。しかも前編とかにしちゃいました。たぶん、次でこのもどかしげなカップル事情は一段落つづはず。各カップルの幸せを願いつつ、次話をお待ちくださいませ～（＾＾；）

第15話 心の音・後編（前書き）

やつと「アクション」がある回までいけました）。伏線？というか前置き？の長い話でした。そして、今更なのですが。ピアノに関してはおかしいところが満載だったかもしれませんのが・・・スルーの方向でお願いいたします・・・（笑）！！

第15話 心の音・後編

アリスは、父親の横に座つてピアノを奏でている。

「アリスのピアノは優しい音を出すね」

静かに、微笑む父。

「そう?でも、俺は父さんのピアノの音のほうが好きだな」

アリスは、父親の弾くピアノが大好きだった。自分には、決して出すことができない、音。

「ピアノの音は心の音だよ。アリス。ピアノは最愛の人の前ではとても綺麗に鳴く。心と、ピアノが共鳴するんだ」

その父親の言葉は、幼いアリスにはよく意味がわからなかつた。ただ、その言葉は強烈に、アリスの中に残つた。

「ピアノの音が汚い時は自分の心が汚いのだと思いなさい。本当に綺麗なピアノの音は・・・ピアノが美しく歌うのは・・・ピアノと一緒に、心が最愛を歌つているからだよ・・・」

その時、アリスには最愛の意味がわからなかつた。

そして。時はすぎ。

運命の日を迎える。

父と、母の離婚。その理由はアリスには伝えられなかつた。ただ、もう、父親と一度と会つことはできないのだと、子ども心に感じていた。

アリスは、その時に父親と交わした最後の言葉を覚えていた。
泣きながら、交わしたあの会話を・・・。

「父・・・さん・・・」

「・・・泣くんじやないよ。アリス。母さんのことは頼んだよ・・・」

「いつものような微笑ではなく、困ったような、悲しそうな笑顔で父はそう言った。

「やだ・・・！・・・行かないで・・・！・・・！」

決して、叶うことのない願い。

アリスは、泣きながら父親にしがみついた。そんなアリスの頭を優しくなでながら、父はアリスに優しく言った。

「アリス・・・父さんはいつまでもお前のことを思っているよ。・・・もう、会えないけれど・・・お前のために、いつもピアノを弾くからね。私の、最愛の息子のために・・・」

慈しむように、紡ぎだされたその言葉。

アリスは、その言葉がとても嬉しかった。

大好きだった父親に、最愛だと、言つてもらえたのだ。

「俺も・・・俺も父さんがサイアイだよ・・・！だから・・・もう、ピアノは弾けない・・・！」

アリスは、父から離れながらそう言つた。

「ピアノは、サイアイの人の前じやないと・・・綺麗な音にならないから・・・」

そう言つたアリスに。

父親は寂しそうな顔をしていた・・・。

それからずつと。

ピアノはまともに弾いていなかつた。

これからも、弾くつもりはなかつた。

サイアイの人であつた、父が、そこにはいないから。

それなのに。

このピアノにはひかれるものがあつた……。

どこか、懐かしいような……。

「父さん・・・ごめん・・・」

アリスの瞳に、涙が溢れる。

どこか、温かい、涙。

今までは、貴方が最愛の人だった。

離れてしまつても、私の心をつなぎとめていたのは、貴方だった。

優しかった父さんが、本当に。

好きだつた・・・。

アリスは、ピアノの前に座り込んで、その膝に顔をうずめた。
「・・・もう、あなたが最愛じゃない・・・」

愛する人が、できました。

私を、愛してくれる人が、できました。

今なら、あの時の父の言葉の意味がわかる気がする。

最も、愛する人。

それは・・・。

「アリス?どうしたの?」

道具を持ってきたバーーは、つづくまるアリスを見て慌てて駆け寄つてくる。

心配そうな、バーーの顔。

そういえば、バーーはいつもアリスを心配している気がする。当

たり前のように流していただけれど。その行動が。ビームでもアリスへの愛を感じる。

ためらいがちに声をかけるバニーが。

なぜかとも、とてもいとおしくて。
アリスは思い切りその首に抱きつく。

「ア・・アリス！？」

とつさのことに、バニーは思い切り動搖する。

そのバニーへ、アリスはにこりと微笑む。父親がしていた、あの、慈しむような微笑み。

「調律がすんだら、バニーのためだけに弾いてあげるね」
ちゅうっと、バニーの頬にキスをして、バニーから離れる。
そして、呆然としているバニーを残して調律を始める。

「・・・バニーはどこへも行かないでね・・・」

アリスのその言葉は、どこまでも、どこまでも響く。
「行かないよ。僕はアリスを愛しているから。ずっと、アリスのそ
ばにいるよ」

それだけは、何者にも誓えるよ。

その、貴方の言葉が。
私にはとても嬉しい。

人に愛されることが。

人を愛することが、こんなに素晴らしいことだなんて思わなかつ
た。

ねえ、父さん。

最愛の人人が、できたよ。

「・・・最愛の人の前では、ピアノは綺麗に鳴くんだよ。バニー・・・

・

アリスは、調律を終えるとそう言つて再びピアノに向かった。

「・・・最愛の人つて・・・僕のこと・・・？」

アリスは、そのバニーの問いに、はあ？と返す。

「当たり前だろ？裕馬やリアンたちも好きだけどさあ。それと最愛の人はまた別じやん。最愛の人は、一人だけだから・・・」

アリスが全部言い終わる前に、アリスはバニーに後ろから思い切り抱きしめられる。

「わわ・・！バニー・・・！」

突然のことに、アリスは真っ赤になる。

そこには、柔らかい時が流れ。

しばらくの間、アリスはバニーのぬくもりの中にいるのであった。

・・。

裕馬は、その様子をクイーン邸の例の書斎で見ていた。

「何かなあ・・・。やっぱ、おじさんのこと・・・ずっと、心に残つてたんだな・・・」

ずっと、アリスの中にはたわだかまり。

自分はそれを知つていながらも。

どうすることもできないでいた。

それを、裕馬に言わせれば。バニーはとも簡単に取り除いてしまった。

アリスは、見つけてしまったのだ。

本当に、心を許せる相手を。

「ちえ。心配してることちがバカラしー・・・」

ようやく気付いたか。つづり突つ込みをこつちはしたいですがな。

とか思いつつ。

裕馬は、ちらりと横を見ると、そこには寂しげに俯くソウがいた。

「・・・あ・・・・ソウ」

裕馬は、頬をかきながらソウに声をかける。

「はい?」

裕馬に名前を呼んでもらえ、ソウは嬉しそうに裕馬へ振り返る。「アリスはバニーにまかせときゃいいし。俺も少し、自分のことを考えてみることにするわ」

珍しく、赤くなりながら、裕馬はそれだけ言った。

ソウは最初、きょとんとしていたが、裕馬のその言葉の意味を悟つて。

「裕馬・・・さん・・・!」

ソウは、目いっぱいに涙をためて裕馬にしがみついた。

そして。

「僕、僕・・・! 絶対、裕馬さんを幸せにしてみせますから・・・

! ! !

あれ?

「・・・ん?」「

幸せに、しますって・・・?

「男は初めてでも大丈夫ですよーー! 僕がちゃんと開発してあげます

からー!」

「・・・・! ? 開発・・・! ? ちょ・・・お、俺が・・・もし

かして・・・! ?

何か、一代決心した途端、怪しい雲行きなのですが。
「僕の、お嫁さんになつてくださいね」

天使の微笑で。

悪魔のような言葉を囁くソウ。

そういうえば、しがみつかれている腕がはずせないんですけど……。

「ふふ……。ガタイのいい人、好みなんですね……。」

「お……！お前……一重人格……！？」

さすがの裕馬も何だか身の危険をいっぱいに感じておりますが。

「やだなあ。策士つて言つてください」

よけい悪いわ……！

ようは。

しおらしくして周りや裕馬に可愛さをアピールしつつ。
実は羊の方から罠にかかるのを待っていた狼さんだつたってこと
で。

「……やつぱり、喰えない奴だつたな……。」

その様子を見ながら、クイーンはぼそりと言つのであった。

「はは。しかも、何かカツプルがいやいやしてゐる……。」

ご馳走様。とリアン。

「ところで、クイーン」

ぐるりと全開の笑顔つきでリアンはクイーンへ向き直る。

「？何だ？」

「あれは何かな？」

可愛らしい声で、指さす先には、例のモニター。

「……あれは、お前の所在を確認するための……。」

しれっとした顔で話すクイーンに。

バチーンと平手が飛ぶ。

にこにこと、笑みながら平手をくらわせたリアンは。

「何で風呂場や脱衣所や寝室にまでついてんだ……」のヘンタイ！

！…だいたい、俺に言つてから取り付ける！…！」

珍しく。

お怒り頂点。

「風呂場や脱衣所につけたのは俺の趣味だ。それに、今言つた。だ
いたい、言つたら取り付けさせんだろ」
どこまでも、しらじらと言つクイーン様。

その後。

リアンは離れに行き、カメラをぶちぶちはずし。クイーンを離れ
に立ち入り禁止に処するのであった。

しかし。

実は、リアンの知らない場所に。まだまだ超小型カメラが潜んで
いるのであった。

余談。

カメラをはずし終わり、その数の多さに。

「こんなにカメラつけやがって！このバカ！！」

と、思い切りリアンは文句を言つのであった。

「いいじゃないか。減るものじゃないし」

それに対し、やはり悪びれなくクイーン。

「ていうか。一国の王に手あげるか？お前？しかもバカ？バカっ
たね？後で覚えとけよ？」

この2人も。結局テープにらぶらぶなのであった・・・。

第15話 心の音・後編（後書き）

いかがでしたでしょうか？例のピアノはリアンがパチつてきたものなのですよ（笑）

ようやく各カップルが落ち着き？ましたね。裕馬のことなんて・・・とこなんて・・・！！笑いが止まりませんよ・・・！結局ソウ×裕馬の方向で話を進めていきたいと思います。これからはソウに振り回される日々が始まるんだろうなあ。合掌。
さて、次回はアダルティイにクイーンとリアンの話にでも移っていくかと思します お楽しみに

第16話 愛を語つて・1（前書き）

久しく放置しておりました。申し訳ありません……！…今回からしばらくクイーンとリアンがメインの話になります それでは、長らくお待たせいたしました！！

第16話 愛を語つて・1

「こ」は、例のリアンの離れ。

「こんにちは～」

そこを訪れたのは、アリス、ソウ、マスターの3人。

「いらしゃーい。どうぞ。あがつて」

今日はこのメンツでお茶会。・・・といえば聞こえがいいが。実質はそんな優雅なものではなく。ただのノロケ＆愚痴大会だつたりするわけなのだが・・・。

「もう、裕馬さんってば本当に可愛いんですよー。」

「よかつたですね、ソウさん」

「はい～！」

満面の笑みでのろけているソウだが・・・。なぜ妻の会（勝手に命名）に夫（予定）のソウが何事もないかの「ことく混じっているのか・・・。

と、そんなところへの突っ込みはスルーして。

「いや～、いいねえ。若いつて。ソウもアリスさんともラブラブじや～ん？」

そこへ、オヤジ化したリアンがからかうように口を挟む。

「やつだも～！リアンさんってば！」

まったく否定しないソウと。顔を真っ赤にして俯くアリス。まあ、何と極端な2人か。

「初めてみた瞬間に～、この人だつて思つたんです

そして、ソウのノロケはまだまだ続く。

「一目ぼれですか？」

そのノロケにマスターが愛想良く付き合つ。

「はい～！」

「そういえば……トモヤあきやあ話すソウを眺めながら。唐突に、アリスは言った。

「そういえば……rianとクイーンの馴れ初めと、マスターとガーテンの馴れ初めて、どんなの？」

この一言が。

大きな波乱へつながっていくとは。

この時は、思いもしなかつたのだつた……。

さてさて。

「ちらりはこる変わつて、クイーン邸のクイーンの書斎。

「ばかじやねーの？」

「つぬせこ」

「ここにいるのは、クイーン・バー・ガーテンに裕馬だつた。・・・もちろん、妻の会のよつな可愛らしげ集まりではなく、しぶしぶといつた集まりである。

そして、眼前にはもちろん。

例のモニターがあるのであつた。

「まだモニターつけてたのかよ。今度見つかつたらそれこそrianに離婚でもされんじやねーの？」

バニーは親を親とも思わぬ口調でクイーンに話しかけている。

「お前も同罪だろ。別に見たくなれば外へ出ててもいいんだぞ？」

クイーンは、にやりと息子へ笑む。やはりまだ、クイーンのほうが上手のようである。

クイーンと同罪は嫌だが、アリスのことは氣になる。バーは、言い返せずぶすっとしている。

「いいじゃん、いいじゃん。要はバレンキやいいんだろ？」

裕馬は相変わらずケロリと言つてのける。

別にソウが心配なわけではないのだが。悪友であるアリスに、ソ

ウが余計なことを言わなか気になるのである。

そんなこんな話をしていると、

モニターの前では例の話題になつていた。

『僕と・・・ガーデンさんの・・・?』

『俺と、クイーン・・・の・・・?』

『馴れ初め・・・?』

リアンとマスターは、間の抜けたような声を出している。

そして。モニターの前では。クイーンとガーデンがバツの悪そうな顔をしている。

「そういえば、僕も知らないなあ」

バニーは、にっこりとクイーンへ向き直る。

「へー、ちょっと興味あるかも」

そう言つ怖いもの知らずな2人を。クイーンとガーデンはぎりりとこじりみつけるのであった。

「あー・・・馴れ初め・・・ね・・・」

「馴れ初め・・・ですか・・・」

リアンとマスターはあさつての方向を見ながら歯切れの悪い言葉でその場をにぎす。

「わー、馴れ初めかー！僕も聞きたいです」

ソウは、興味深々といったふうである。

「なれそめ・・ねえ。・・・俺さあ、油絵描くんだけどー」

リアンは、真剣なまなざしで話始めた。

アリスとソウは、真剣にその話に聞き入る。

「この離れに油絵描くアトリエがあるのね」

リアンは、話しながらおもむろに立ち上がる。

「で、だね。俺、筆洗いに行かないといけないからーあとは好きに

やつて…じや…」「

リアンはそうこうと、何とも言えないすばやく部屋を出て行く。

「・・・・」

ぽかーんとその場に残つた3人・・・。

「・・・・逃げましたね！…リアンさん…！」

「リアン…」

リアンに置き去りにされ、マスターは青くなつている。青くなつてこのマスターを置いて、アリスはリアンの後を追う。だつて。あのリアンが。ここまで本気で嫌がることなんてめったにないし。

これはちよいと。

つつこんどくべきところじゃん？って感じで。

そして。

残されたマスターとソウは・・・。

「行っちゃいましたね・・・」

よくわからない展開にしばらへぼーっとしていたソウだが。はたつと思い返し。

「で！？ガーデンさんとのなれそめは・・・！？」

マスターに向き直り、詰め寄る。

「え！？えつと…・・・それは・・・」

マスターはソウに詰め寄られ、青くなつたり赤くなつたりしている。

「マスター、帰るぞ」

そこへ。

いきなりガーデンが現れると、マスターを引き寄せ、立ち上がらせる。そして、ソウから守るように自分のもとへ引き寄せせる。

「・・・・ガーデンさん・・・！」

ガーデンの突然の登場に、マスターも驚いている。驚きついでに再びぽかんとするソウに。

「ソウ、裕馬が外で待ってるぞ」

「え！？ 裕馬さんが・・・！」

ガーデンは、ソウに向かってそれだけ言つとマスターを連れて行つてしまつた。ソウはといふと。ガーデンの言葉を信じ、外へ出たあと。

思い人が見つからず。ようやく、気付いたのであつた。『はめられた』と。

「ガーデンの奴・・・」

自分も行ってリアンを奪還したいところだが。なにぶん、この間の隠しカメラ事件で離れへの出入を禁止されているクイーンは苦々しくはき捨てる。

「ああ、だまされてるよ・・・。仕方ないなあ。俺、ソウんとこ行って来ますんで」

何だかんだで、裕馬もまんざらでもない様子。

そんな感じで。ガーデンと裕馬が去り、そこにはクイーンとバーイーが残つた。

「・・・あんたにしても、ガーデンにしても・・・どんな出会いかたしたんだよ・・・」

バニーは、ながば呆れたように隣でふてくされている男に尋ねる。

「・・・・・」

その質問に対する、クイーンの答えはなかつた。

「rian～、教えてよ～」

ここは、rianが逃げ込んだアトリエ。どうやらrianは本当に絵を描くらしい。その部屋は油絵の具の独特な香りがしており、いくつものキャンバスやスケッチブックが置かれていた。

「・・・・嫌」

断固拒否なリアン。

ここまでリアンがかたくなになる理由が知りたくて、アリスはリアンにしつこく付きまとつ。それを無視し、リアンはアトリエの整理をしている。パーとリアンの様子にアリスはふくれる。そして、ふと、手近にあつたスケッチブックを開いた。古くて、厚いスケッチブック。

「・・・・これ・・・

ばしゃーん!!

大きな音がして、リアンは水の中に洗つていた筆を落とす。

「ア・・・アリス！…どつからそれを・・・！？」

リアンは真つ赤になつてアリスからスケッチブックをひつたくる。そのリアンの慌てぶりに。アリスは珍しく人の悪い笑みを浮かべる。「ねえ、それって・・・クイーン、知らないでしょ？」

にやりと、言うアリス。

リアンはギクリと青くなる。

「アリス♪」

「クイーンに、黙つてあげるからさ~。馴れ初め、教えて」
につっこりと、語尾にハートマークのつきそつた勢いでアリスは言った。

うーん。アリスにあのことを話すのと・・・この中味をクイーンに知られるの・・・。

どちらがいいだろうかと。しばらく悩んだすえ。

リアンは、クイーンとの出会いを話すことにしてしまつた・・・。

そして。書斎では。

モニターではキャンバスやスケッチブックに描かれた絵までは明瞭に見ることができないため、何が描かれているのか確認ができない。

そのため。

「ちょっと待て！そのスケッチブックには何が描いてあるんだ！？」

「この男が黙っちゃいないわけで。

「あんたに見られたくないものだつてことは確かなんじゃない？」

それに対し、さらりと言つた。

「あのこと、人に話したほうがいいくらい、俺に見せたくないつ

てわけか・・・？」

「・・・たかが出会いだろ？」

大げさな。とバーは呆れたように言つた。

クイーンは、モーターを食い入るように見つめながら、ポツリと

言った。

「俺は・・・rianから好きだと、そういう言葉を聞いたことがない」

唐突にそんな話をしだす、クイーンに、バーははあ？と間抜けな声を出す。

「・・・rianはしかたなく、俺のそばにいるんだよ・・・」

（続）

第1-6話 愛を語つて・1（後書き）

続きます 2人の馴れ初めとは? どんなものなんでしょうか~。表でやつていける範囲で話を書いていきたいです。もしかしたらムーンライトあたりで、「アリス」の番外編なんかも書くかもです。また書いた時にはお知らせいたします いつも評価ありがとうございます! ママさんや、初めてBL読まる方など、本当にいろんな方々に「アリス」は読んでいただけているのだな~と思いました。最近は忙しくて更新が遅いですが、気長に待ってやってくださいませ。それでは、これからもよろしくお願いいいたします! ここまで読んでいただきまして、ありがとうございました!!

第17話 愛を語つて・2（前書き）

お待たせいたしました。本当に最近更新が遅くて申し訳ないかぎりです。ほんとスマセン。何か毎回謝りますね・・・。進歩ない・・・。ではでは、本編へどうぞ。今回より回想編です。

第17話 愛を語つて・2

「言つとくけど聞きたいつて言つたのはアリスだからね」
リアンは知らないよ、とアリスに告げる。そして、天井を仰ぎ、
クイーンとの出会いを話し始めた。

「あれはまだ、俺がアリスと同じ高校生だった頃……」

「だからしく。楽だと思って図書委員選んだけどさー……これつ
て寂しそぎ……。」

アリスが通っていたのと同じ高校。実は、リアンもこの学校に通
っていたのだつた。何せ、家から近いしね そして、今は放課後。
図書委員のリアンは、司書の代わりに番をしているのだが……。
何分ここは男子校。しかも、放課後でみんな部活に出払つている。
まばらにいた人も今はもう見る影もなく。つーか、今後誰か人が来
るとは思えません。

「あー、俺も早く美術部行きてえー」
誰にとはなくそう口にする。

図書室の貸し出しカウンターにこれでもかといつぱりやる氣なく
座りながら、リアンはブーたれていた。
そこへ。

図書室のドアが開く音がする。
珍しいね~と、リアンがドアのほうを向くと。

うつわ……外人さん……

金色の髪に、青い瞳。

日本人とは遠くかけ離れた容姿。その整つた顔立ちに、リアンは

思わず見入ってしまった。そして、その男はつかつかとリアンのほうへ近づいて来た。

「・・・お前、何してる?」

澄んだテノールが部屋に響く。どうやら言葉は通じるらしい。と、

リアンは質問に答えるよりも、その男の一挙一動に心動かされる。

「・・・おい!..」

「は!はい!..」

バンッとカウンターを叩かれ、リアンは正気に戻る。

「お前、こんなところで何してんだ?」

「何つて・・・仕事だけど」

つーかこの人、何怒ってんの?

「貴様は親に言葉の使い方も教わらなかつたのか!?」
「ちょっともう。すげー怒つてんですけど。

何よ。言葉遣いって。

仕方ないじゃん。今の日本人の言葉のレベルなんてこんなもん
だつづーの。

つか、俺、日本語そんなに大きく間違えてた?今??

リアンはうんざりした顔でその男を見やつた。

「それとも何か?自分の國の国王の顔を忘れたのか?」

は い ?

「国・・・王・・・?」

えつと、ここは日本ですよね。

国王って何かな?いつから日本は王権制度になつたのかな?
ていうか、この人つてあれかな。こんな綺麗な顔してあっちの世
界の住人とか?

お~い、帰つてこ~い。つてやつ?

「・・・・!」

あつと、つるんな顔をしてその男のことを眺めていたのだ。つい。

その視線を受け、男は何かに気付いたようだつた。

「……お前、まさか」いつの……？

ああ。

「いつとか言つてゐる。」

絶対そうだし。

リアンの中では勝手にこの男の話ができるがつており、しまいには何だか暖かい田なんだか哀れみの田なんだかわからない表情で相手を見やつてゐる。

「わかつた、わかつた。あんたの言つことはよくわかつたよ。俺、別にそういうの悪いと思わないし。ただ、こゝには違うから。とりあえず・・・職員室行こうか」

とりあえず、誰かに渡してしまえ。

「・・・」

そんなリアンの様子に、再びムツとなつたらしく。しかし、今度は何を言い返すわけでもなく、ただ。

「・・・お前、名前は？」

横柄な態度でそう聞いた。

「・・・佐久間 里杏」

「・・・リアン、か」

男は、リアンの名前を聞くと薄く笑んだ。
もう何か。

とつとこの男と離れよう。

リアンの警戒網に、ひつかかる。

何だか、よくない予感がしてきた。

ちょうど、図書委員の終わる時刻に差し掛かり、リアンはほつと
する。

「あつと・・・時間だ。ほら、アンタ・・・・」

「クイーンだ」

「あ・・・クイーンさん? 外出でくんない? こゝはもう閉めるか

「ら

言いつつ、リアンは有無を言わせらずクイーンを図書室から出し、鍵を閉める。そして、職員室へと向かった。クイーンなる男は、といつとなぜかリアンのあとをついてくる。

「失礼しま～ツス」

元気よく、ガラリとあけたその扉に向ひ。

そこには。

「・・・・れ？」

誰も、いなかつた。

「おつかしくな・・・」

いつもなら、教員に生徒に。結構にぎわっているはずなのに。不思議なこともあるもんだねえと。リアンは図書室の鍵を所定の位置にもどし、「失礼しました」と職員室を出た。

職員室を出て、美術室に向かつたため校舎内を歩いていると、とても奇妙な感覚を覚える。

人の気配がしないのだ。視界だけでなく、“声”も“物音”もない。まるで。

そう、まるで。この世界から人がいなくなってしまったかのよう。その空想的すぎる考えに、リアンは笑いながらも薄ら寒さを覚えた。

何かが、おかしい。

「あたりまえだ。こゝはお前の知ってる世界じゃないからな

凛、と響くその声。

リアンはぱつと後ろを振り返る。

そこには、楽しそうに笑む、ときほどの男がいた。まだ後をついてきていたらしき。

「・・・お前・・・何なの?・・・何、言つてんの?さつきから・
・」

リアンはなぜか、大きな大きな不安を感じた。
危険だ。

リアンの中の警報がけたましく音を立てる。

キケン。

「俺の話を、聞かないか?」

その男は悪魔のように綺麗な笑みを浮かべながら、リアンの耳元
に囁いた。

リアンは、知らず、うなづいていたのだった・・・。

（続）

第17話 愛を語つて・2（後書き）

・・・待たせたわりに進展ない話ですね。ていうか、アリスの初シンクロ時代を思い出しますね～。初シンクロ、リアンバージョン。しばらく続きます。ではでは、気長に更新を待つてやってくださいまし。ペコリ。

第18話 愛を語つて・3（前書き）

何か、rianの発言に教育的指導が入りそうでビクビクしながら本編を書いている今日この頃です。どこまでがオッケーなのか・・・。幅広く読んで頂きたいとも思いますしね。そんな18話です。

第18話 愛を語つて・3

「シンクロ・・ね。まるでJFじゃん」

クイーンから一通りの説明を受け、リアンはぽつりと呟いた。
「・・・意外と冷静だな。もつとパーくると思つたが・・・。キヤ
パを越えた話で頭がバカになつたか？」

くくつと楽しそうに笑うクイーンをちらりと見やり。

そうかもしれないな・・・とリアンは人心地に思った。
自分が他人よりも話のわかる奴で、結構、非現実的なことでもわ
りかしづんなり認めたり納得したりする方だとは思つていたけれど。
・・・この話はそんな次元を超えてるよなあ。さすがに・・・。
と思いながらも、どこまでも冷静に受け止めている自分がいる。つ
ーか、もはや・・・。

「ま！なつちまつたもんはしょーがないつかー！はははははー！」
てな世界？？

うーん。この物分りのよさはいいのか悪いのか。

「で？どうすれば元に戻るわけ？」

とりあえず。

リアンは解決の方向へ頭を切り替えることにし、あっけにとられ
ているクイーンにそう尋ねた。

「・・・・・」

クイーンはリアンの問いには答えず、しばらくの間何かを考え込
んでいた。そして、何かを思いついたようにその造りのいい唇をに
つとゆがませる。

「な・・・何だあ・・・・？」

何ですか？その笑顔は。

何か、すごい、嫌な予感がするんですけど・・・。

リアンの背を冷たいものが伝づ。

「リアン、やらせろ」

知らず後ずさりを始めたリアンに一言。
肩を掴んで。

井川の文庫

・・・・・はあ・・・・！！？

リアンの顔から血の氣がひく
え？といふが。やらせろって・・・って・・・・そういう意味で
すよね？？

rianは、変に男子校慣れ（偏見）をしている自分を、この時思
い切り呪つた。

ーンはすぐあとで事を進めていた。リアンを近くにあつた教室へ連れ込む。

「こんなところでやるのは気がすすまないが、しかたないか」
何事もないかのようにリアンに覆いかぶさつてくるその男に。リ
アンはまつこ戻る。

「やー。しかたないじゃなししねー。エナハツのー。」「うぬがー。静かにしてろー。

「誰が静かにするか！？てか、シンクロと関係ないだろ！？つてギヤー！」どこ触つてやがる！！」

名は体を表すとはまさしく。

もちろん、リアンも抵抗に抵抗を重ねてみたのだが……。何分、

そう、悲しいかなワアンさんは、クイーンの魔の手にかかりてしまつたのです。

一
わ！？

そこまで話すと、今まで黙っていたアリスが真っ赤になつて絶叫した。

「わ～わ～！～もういいよ！～2人の出会いはよつくわかったから～～！」

耳を塞ぎながらアリスはリアンの話をさえぎる。

「え～？」アリスが知りたいって言つたのにイ～。その後ねえ、俺の抵抗もむなしくゴウカ・・・

「だから言つなつて！！！」

もう真っ赤になつて涙まで浮かべて。

そんなアリスを見ながら、いやあ、楽しいなあと思うリアン。やはり、アリスはリアンには勝てなかつたようである・・・。もうなんか。開き直つて超楽しそうに昔を語りだしますもん。リアンさん。

そして、その様子をモニターで監視中のこじらひでは。

「リーアーンー・・・」

ペラペラと過去を語りだしたリアンにモニター越しに文句。「てか、バツカじやねえ？強姦なんて普通するかよ・・・」

息子からは、冷ややかな視線。

「・・・・あの頃の俺は気に入つたモノをすぐ手に入れなくちゃ気がすまなかつたんだよ」

「で？そのゴーカン魔とリアンはどうして結婚したわけ？」

“ゴーカン魔”という言葉にびっくりと反応しながら。その質問には答えず、クイーンはブスッとモニターを見やるのであつた。

「あ、でも・・・何で・・・その・・・」
「ゴーカンされた相手と結婚したかつて？」
リアンのストレートな物言いに、アリスは赤くなりながら頷く。
「それはねえ・・・」

ふつと、遠くを見やりリアン。

「もうなんつーか、意識飛んでたつつか。頭バカになつてたつて
いうか。まあ、アレよー思いのほか痛いんだか気持ちいいんだか！
みたいな感じになっちゃつてさあ！！」

あははと笑いながら、教育的指導が入るようなコメントはやめて
ください・・・。

「そんな頭が回つてない状況で“気に入つたから俺の妻になれ”だ
がなんだかつて言われちゃつてさ～」

嫌だ。そんなうろ覚えなプロポーズ・・・！

「よくわかつてないのに“うん”つて返事しちゃつたんだよね～」

笑い事ではありません・・・。

「んで、気が付いたりこっちの世界で？もう帰れないよ、みたいな
あつけらかんと話すリアンに、アリスはあいだ口がふさがらない。
「そ・・・そんな理由つて・・・」

思わずアリスが脱力するのも・・・当然つてことで。

俺のあの怒涛の日々は何だったのか・・・。そう、思えてきてし
まう。

「だから聞かないほうがいいっていったのに～」

そんなアリスの様子にリアンは苦笑する。

そして、脇に置いていたスケッチブックを手に取る。そして、1
ページずつ慈しむように見に入る。

「・・・そんなに、好き？」

そのリアンの様子を見ていたアリスが、ポツリと聞く。
アリスの問いに、リアンは満面の笑みで答えた。

「世界で一番」

(続)

第1-8話 愛を語りて・3（後書き）

いつものことながら・・・更新遅くてすいません。次から怒涛の展開になっていく予定です。また愛の国チックになっていくのかしら・・・。次話はなるべく早く・・・！（毎回言つてる気がする・・・）ではでは、お付き合いいただきましてありがとうございました！――引き続き、ごひいきにしてやってくださいまし――！

第19話 愛を語りて・4（前書き）

『愛を語つて』完結です。長かったなあ・・・いろんな意味で（本当に申し訳ありません）。今回は頑張つて（？）ちょっと長め。

ぶち。

今、何か切れた音が・・・思いつきりしましたが・・・。

「・・・え？」

その音のほうを、バーーは見やる。

そこには、無表情に怒りを湛えたクイーンがいた。クイーンは無言でまわりのものにあたり散らし始めた。その瞳には、すでにバーーの姿は映っていない。

そして、その八つ当たりが止まったかと思うと、次は大きな音をたてて扉をあけ外へ出て行く。走っているわけではないのに、すごいスピードである。その無表情のうちから溢れる激情に、すれ違うトランプ兵たちは壁に張り付いて道をあける。その後ろから、バーーも追いかける。

「・・・まあいいな・・・完璧キレイでんじゃんか・・・。早くアリスを・・・」

バーーは、どうやら本気でご立腹なクイーンの様子から巻き添えをくらつてなるものかと近道をしてリアンのヒアリストのいる離れへと急いだ。

「アリスト！――急いで――早く帰るよ――！」

クイーンより早く離れについたバーーは、それだけ言つと、きよとんとしているアリストを有無を言わせず抱いで離れを出て行つた。まさに、風のよつに・・・。

「・・・どうしたってのさ・・・」

さすがのリアンも、息子の奇行にしばし呆然とした。

まあ、そこにはリアンさん。まあ、いつかと氣を取り直すヒアリスト

にあつた大きな、古いキャンバスの前に立つた。真つ青に塗られた、

キャンバス。そのキャンバスに、リアンは優しく手を這わせる。

「・・・いつか、このキャンバスを・・・渡せる日が来るんだろうか・・・」

リアンは、ふっと、悲しそうに笑むと手に持つていたスケッチブックを両手に強く抱きかかえた。

「・・・やっぱ、ひねくれてんのかねえ」「

それは、遠い昔に自分が決めたこと。

人知れず、この思いを抱いたまま。

伝えることは、ないだろ、う、と。

リアンは、天井を仰ぎ一息つくとアトリエを出ようと振り返った。
そして、そのまま動きを止めた。

「ずいぶん顔色が悪いな、リアン

そこには、無表情で立つ、クイーンがいた。感情なくリアンを見据えている。

「・・・クイーン? ここは立ち入り禁止のはずだけど?」

いつもとはあきらかに違うクイーンの様子に圧倒されながらも、それを表に出さないようにじごく自然にリアンはそう言つた。

「俺に見られたら困るものがあるからか?」

クツとクイーンは乾いた笑いをこぼす。

「・・・まだモニターついてるわけ? ほんと、悪趣味なんだから」

リアンは呆れたようにため息をつく。そして、さっさと部屋から出るため扉へ手をかけようとした。 その手は、扉へ届くことはなかつた。

クイーンはリアンを壁にはりつけると、いきなり貪るようにキス

をした。逃げられないように、壁にはりつけられて。リアンの爪が、壁をかく。

酸欠になりそうなキスの中。

リアンの瞳に、あの真つ青なキャンバスが映る。

あれがあるから。

俺の、心の支え・・・。

あの、真つ青な・・・。

俺の、大好きな・・・。

理由はよくわからないけれど。どうやら、モニターを見ていて何かが気に入らなかつたようだ。

アリスになれ初めを話したことか。

クイーンに見せてないスケッチブックがあることか。

それとももつと、他のことなのか。

リアンは、クイーンの怒りを全身で痛いほど感じながら。

“あの時”と同じように。

クイーンの気がすむのを、ただただ、待っているのだった・・・。

ようやく、噛み殺されそうなキスから解放される。

「は・・・は・・・」

リアンは自由になつた口で大きく息をする。

くたづとしているリアンの様子を、クイーンは冷ややかに見下ろす。

しばらく、そこには沈黙が続いた。

「・・・何も言うことはないのか？」

冷たく、重たい声。

その問いにリアンは答えない。

ただ、息を整える音だけが、部屋に響く。

そのリアンの様子に、クイーンは手近に合つた小さなキャンバスをリアンの顔すれすれに投げつける。

「！」

リアンはさすがに恐怖を覚える。知らず、全身が小さく震えている。

「・・・なぜ、お前はここに残つた・・・！」

クイーンは、堰を切つたように叫びだす。

「なぜ！愛してもいない男と結婚をした・・・！」？

つまれた画材が、クイーンの腕によつて地に落とされる。

そして、クイーンはリアンの胸倉を掴み、その顔を歪めた。

「他に、愛している奴がいながら・・・なぜ、愛してもいない俺と結婚した・・・！」？

「ねえ！バー！」

呼びかけてみるものの、バーから返事はない。

「バーってば！！」

自分を想いで足早に歩く男の背を叩きながり名を呼ぶ。

「あ、ああ」

バーはようやく気付いてアリスを下ろす。

「・・・いったい、どうしたんだ？」

いつもと違うバーの様子にアリスは心配そうに尋ねた。

「・・・クイーンが、キレたんだよ・・・」

はあ、と大きなため息とともに静かにバーはそう言つた。

「・・・え？」

信じられない、といったふうなアリスの反応。

クイーンが、キレた。

いつたい、何があつたといつか。そして、クイーンがキレたこと、離れから想いで連れ出されたこと・・・いったいどんな関係が・・・？

アリスは疑問いっぱいにバーを見上げる。

「・・・実はね、悪いけどアリスたちの行動をモニターを通してクイーンの書斎で見てたんだよ」

「……ええっ・・・・・! ?」

おさまっていたアリスの赤面が再度そのものとなる。

「そこで、リアンとスケッチブックを見てただろ? アリス

「う、うん」

アリスに突つ込む隙を『えず、バーはさくさくと話しを進める。アリスも、バーの真剣な様子に抗議できずおとなしく質問に答える。

「・・・クイーンは、リアンに“愛してる”とかそういうた類の言葉を言つてもらつたことがないんだつて。それなのに、そのスケッチブックに描かれている人のことを“世界で一番好き”とか言つちやつたから・・・それで、ね。」

クイーンがキレちゃつたつて話。はあ、とバーは大きくため息をついた。

その話を聞いたアリスはきょとんとした顔でバーを見据えた。

「・・・え? ・・・だつて、あれ・・・」

「何の・・・こと?」

リアンは掠れた声でようやくそれだけ答えた。

「何のこと? はつ! アリスと一緒にスケッチブックを見ていたらう? それに描いてある奴だよ! ! 僕には見せれないんだろう! ? そうだよな! 一応俺たちは夫婦だから! 他の奴が描いてあるスケッチブックなんか見せれるはずないよな! !」

クイーンは一気にまくし立てる。

今までの、すべての感情をのせるよつ。

「一応つて・・・何だよ・・・」

クイーンはかつとなつてリアンを殴りかけたが、ぐつとそれを堪える。

「一応だろ！？お前はもつむじつに帰れないもんな！一人で生きるより誰かに足開いたほうが生きやすいよな！たとえ愛してもいい奴でも……！」

クイーンは、悲痛に叫ぶ。

「お前は一度だって俺に“愛してる”と言つたことはないだろ？！でも！そのスケッチブックの奴には“世界で一番”と言つただろうが……！」

リアンの瞳に、涙が溢れ出す。

「行けばいい……お前の愛している奴のもと……」

「そうしたら……そいつの前でお前を殺して俺も死んでやる……」

リアンの頬を、涙が伝づ。

「・・・クイー・・・」

「俺は！お前が誰を愛していくても……お前だけを愛している……絶対に、手放すものか・・・！？」

クイーンは、リアンをかき抱きながらそう、叫んだ。

「どこまでも、愛してやまないもの。
愛して、やまないもの。」

リアンは、クイーンの腕の中で瞳をいっぱいに開いて空を見つめている。その瞳からはとめどなく涙が流れている。

「クイーン・・・」

リアンに呼ばれ、クイーンはわずかにリアンから離れる。

リアンは、クイーンにさきほどのスケッチブックを手渡した。

「俺が・・・世界でただ一人・・・愛している人だ・・・」

リアンは、どこまでも優しく微笑んだ。

「クイーンだよ」

「はー?」

今度はバーーがすっとんきょんな声を上げる。

「だから、スケッチブックに描いてあるのも、世界で一番リアンが愛してるのもクイーンなんだって」

「な・・・」

アリスのその話に。

バーーは、言葉を失つたのだった・・・。

「これは・・・」

クイーンは、スケッチブックを1ページずつ見ていた。そして、すべてのページを見終わつたあとに、ゆっくりとリアンへと向き直る。

「ほら、気が済んだ? さ、俺を殺して? そんで、アンタも死ぬ。そしたら、アンタは永遠に俺のものだね」

リアンははつきりと、そうクイーンに告げた。

そのリアンを、再びクイーンは抱きしめる。

「他に・・・好きな奴がいるんだと思つていた・・・」

掠れた声でクイーンは呟く。

「・・・んなわけないでしょ」

リアンは動かずに、ただ、クイーンに身を任せた。

「お前は何も言わないから・・・しかたなくここに残つたんだと思つていた・・・」

その言葉に。

「ばつかじやないの! ! ?」

今度はリアンがキレた。

「さつきもアンタそんなこと言つてたけどさーだれが好きでもない奴と結婚なんかするかっての! 好きでもない奴に抱かれ続けるなんて俺はできねーよー! !

「うどん・そば」

まるで強がるより、コアンセント出す。

アーティスト、歌手、音楽家。

クイーンは、下を向くリアンの顎を掴んで上を向かせる。クイーンのブルーアイズがリアンの瞳に映る。

真の書な
ケイリンの瞳か

何で今まで愛してゐると言つてくれなかつたんだ?」

「アンタ……お前がどうしたんだ？」

rianは耳まで真っ赤にしてボソッともらす。

二

リアンは、クイーンの手をはずし、俯いてしまう。

二二二

二〇一〇年八月

「rian・・・心配しなくても、俺はお前のものだ・・・」

クイーンは笑顔でリアンを抱きすくめると、その額に優しくキスを落とした。

愛らしくて

「だつて、リアン言つてたよ。ここに残つたのはクイーンがいるからだつて。あと、クイーンを愛してゐるからだつて」

「・・・じゃあ、何でそれを相手に伝えないんだ?」

伝えてしれに

「笑いながらだけど・・・何か、それを使うとクイーンに捨てられる」とか言ってた。・・・あと・・・ひねくれてるからかなって言

つてたよ」

「・・・わけがわからん」

バニーは頭を抱え出した。

「ま、あの2人なら大丈夫だつて！」

アリスは明るくそう言つた。

「だつて、バニーの親だもん」

それつてどういう意味・・・？」

「ま、まあ・・・何とかなるかな・・・」

そう言つと、バニーは思いついたようにアリスにキスをした。

「な・・・！？」

それだけで、アリスの心臓はものすごい音で鳴り出す。

これは、まだダメかな・・・。

真っ赤になつて拳動不審となるアリスの様子にバニーは苦笑する。バニーは、まだ当分の間はおあずけを食らいそうである。

そんな、初々しい2人・・・。

「あーー！」

「？どうしたの？アリス」

突然、アリスが何かを思い出したかのように大きな声を上げる。

「・・・マスターと・・・ガーデンの出会い」・・・」

さてさて。1つの謎を残したまま・・・。

バニーとアリスは家路につくのであった・・・。

（続）

第19話 愛を語つて・4（後書き）

いかがでしたでしょうか～。何か先の見えすぎた話でしたね。あは。近々、ムーンのほうでクイーンとリアンの馴れ初め過去編をリアン視点で書く予定です～。B-L要素が強くなるかもですので大丈夫な方はよろしくお願ひします。PNはがー子でござります

いつも感想などありがとうございます！本当に励みです！…うちのパソの関係でお返事ができないのですが、感想や評価は本当にありがとうございました、嬉しく思つて読ませていただいております！！読んでいただけるだけでも嬉しいのに・・・！頑張つて次作も書いていきたいと思います^_^

第20部 傷跡・1（前書き）

お待たせいたしました！20話です！記念すべき20話！…のはずなのに…。今回のお話の主人公は…。アレ？（笑）

それは、平和な日に起つた。

空は晴れていいお天気。

いつもは午後はバラバラのメンツも、なぜか今日は公館もといクーン邸に集まつていて。久しぶりに、みんなで和やかにお茶会と相成つて。

そんな、平和な時間に。

厄介事を持ってきたのは……。

最近、とんと出番の少ない、ブラックとホワイトであった……。

バンツとアリスたちが揃つてお茶を楽しんでいた部屋の扉を荒々しく開くと。

ブラックと、ホワイトが乱入して来る。

この2人は、朝、ご飯を食べる席にもいないことが多い。最初こそいたものの、もともとじつとしていることができない人種なのか、やれ今日は何をする?といつも出歩いているのだった。

「おんや~珍しいねえ。2人とも。お茶でもの……む……?」
リアンのセリフに返すこともなく、2人はズンズン進んでくると。

「お願いや!~」

「かくまつて……!~」

手を組んで。

うるうると、おねだりモード。

そして、言づが早いかテーブルの下に潜り込む。

「!~・・・おい、何なんだ!~一体・・・

さすがのクイーンも説明もせず不可解な行動をとる2人に怪訝そうな顔をしている。

「どうしたのさ、2人とも！？」

アリスも、いつもと違う2人の様子にテーブルクロスをまくつて2人に尋ねる。しかし、まくつたテーブルクロスは、ホワイトについて再び降ろされてしまった。

「何なんだ？一体……」

その場にいる全員が、わけがわからない、と言った顔をしていると……。

「あ、あの……クイーン様……」

おずおずと、トランプ兵が声をかける。どうやら、ホワイトたちの後に入つて来たらしい。

「何だ？」

「その……お客様がいらしているのですが……」

トランプ兵は、ちらりとテーブルの下へ目をやりそう言つた。

「……通せ」

どうやら、本当にブラックとホワイトは誰から逃げていらしい。

果たして。

それは誰なのか……。

「失礼致します」

トランプ兵に促されて入つて来たのは……。

「……これは……また……」

まったく同じ顔をした、2人の青年。長身なうえに、黒い髪に黒い瞳に寡黙な様子がその2人からどこか威圧感を漂わせる。

全員が、その2人を前に呆然としていると。そのうちの1人の青年が口を開いた。

「お初にお目にかかります。クイーン様、皆様。私はサクラと申します」

低いバリトンに、無表情で敬礼をする。

「ツバキと申します。突然の乱入、お許しください」

「こちらも、右に倣え。

どうやら、前髪が右わけがサクラ、左わけがツバキらしいが……何ともややこしい……。

「いや、かまわん。ところで、何の用だ?」

クイーンは、そんな2人の威圧感もものともせず、憮然と答える。「こちらに、ブラックとホワイトがお邪魔していると思つのですが」相変わらず無表情にサクラは言う。

「そこにいる」

クイーンは、間髪入れずにテーブルの下を指差して答える。

「ひどいで!! クイーン!!」

「ちつとは考えるとかセーや……情けつちゅー言葉を知らんのかい!!」

2人は、ぱつとテーブルの下から顔を出すと、クイーンに詰め寄つて文句を言う。

「・・・単純バカ・・・」

バニーはその様子を見ながら呆れたように咳いた。

「ブラック!!」

「ホワイト!!」

サクラとツバキが、2人を見やつて声をあげる。

その2人の声に。

ブラックとホワイトは黙つて静かに振り返った。

「あの2人が・・・黙つた・・・!!」

・・・それは驚きすぎだらうよ。ガーデン様・・・。

そんな何だかピリピリした空気の横で。

「リアンさん! サクラさんたちって、ブラックさんたちどうじつこう

関係なんですか?」

ひそひそ。

「あ! 僕も知りたいです~」

ぼそぼそ。

マスターとソウの“何々？”という興味津々な表情を受け、リアンは。

「そんなの……俺が知りたいって……」

どうやら、今回の件に関してはリアンも知らないらしい。一体、サクラとツバキとはどういう人物なのか？ そもそも、この4人の関係は何なのか……。

「……この国つてさあ」

傍で見ていた裕馬が、ぽつりと。

「双子多いのか？」

論点はそこじゃありません。

「さあ～？」

その言葉に、真剣に悩まなくていいですよ、なアリスちゃん。

「さあ、早く帰るぞ」

サクラが、ぐいっとブラックの腕を取る。しかし、ブラックはその手を強く振り払った。

「何でや！ お前と同じじとこなんて帰らへんわ」

ブラックの、初めて聞く、強い口調。

「わいもお前と帰る氣イなんてあらへんで。ツバキ。はよ帰り」
冷たい視線をツバキに向け、ホワイトは低く言い放つ。

「連れて帰る」

何だか……。

火花が散つてんですけど……。

「こ・・・こわ～・・・」

ぼそりとアリスが言うのも、無理ないってことで。

そこへ、こほんと咳払いをし、クイーンが4人の間に割つて入る。

「・・・とりあえず・・・事情を知りたいんだが・・・？」

「こめかみを押さえながら、一言。」

どうやら、クイーンすらも、この4人の関係を知らないらしい。

「わけなんてあらへん。勝手にこいつらが追いかけて来たんや」

「勝手に？もうとっくに期限はすぎてるんだぞ！？」

「んな事知るかい！だいたい、結婚は両者の同意に基づいて行なうもんやろ！？わいらは同意した覚えなんぞないわ！？」

数十秒間の、沈黙。

『何――！？』

これは、その場にいた当人たち全員の叫び。

「け・・・結婚！？」

「これはバー！」

「ブラックとホワイトと――？」

「クイーンに。」

「本当に――？」

リアンと。

「あんたらが？」

最後はガーデン。

そして、声をそろえて。

『悪いことは言わない。今からでも考え方』

きつぱりと、大変失礼なことを言つてのけるのであった。

「何や引っかかるけどまあええわ。ほんま、考え方

「嫌だ。お前は俺の妻だ」

そして、また問答が始まる。

「あほか――勝手なこと言いなや――」

「お前だつて俺の妻だらうが」

ぎやあぎやあと。

同じ顔が4人で、押し問答。見ると誰が誰だかわからなくなつてくる・・・。

同じ顔で、いつわがしゃべつたかと思えば次はあつちで。あつちはこつち？ん？あなたはどうちでしたつけか？

何だか、催眠術にでもかかりそうだ・・・。

「だいた・・・！」

「うつるさ～～い！～！」

ぶつちんと。

誰がキレたかは言つまでもなく。

アリスの一声に、あたりは水を打つたように静まり返つた。それからアリスはキッとブラックとホワイトを睨みつける。

「ちょっと黙つてろ！話がわからん！～！」

「ひいいいい～！」アリス、目えすわつとるでえ・・・～！」

「」怖いわあ～・・・～！」

さすがの2人も、アリスの怒氣に氣おされ、おとなしくなる。その様子に、うつとりと。

「可愛いなあ。アリスは」

大物発言ですな。バニー様。

キレた人間を見てそんなことが言えるのは、やはりその人を愛しているからなのだろうか。

「・・・苦労するぞ、バニー」

クイーンは撫然とそう言つた。

それに対し、バニーはにつこりと。

「あなたほどじやありませんよ」と言つてのけるのであつた。

「さすが俺とクイーンの息子・・・・」
ぶぶつと噴出すリアンさん。

「性格の悪さは一級品」

間髪入れず、ガーデンさん。

「ガーデンさん！！」

そしてさらに間髪入れず、マスターさん。

なんだか端で関係ない突っ込み大会が始まっている。・。・。

そんな大人たちを放つておいて、裕馬が切り出した。

「で？ 結局、どういった関係なんですか？」

あなたたち、4人は・。・。

『あかの他人や！』

『婚約者もとい夫婦だ』

真剣に叫ぶ4人だが。

その内容たるや・。・。

「まったく、かみ合つてませんね・。・。」

ソウも、もうどうフォローしていいやら、と。

そして、その場にいた当人たち以外全員が。

この時。

何かに巻き込まれていく運命を、感じたのであつた・。・。

（続）

第20部 傷跡・1（後書き）

いかがでしたでしょうか。いつもいつも、お待たせして申し訳ありません！

今回からしばらくな騒がせ2人組みのお話です。でもチマチマとアリスやソウのところのカップルの動向も入れていこうと思つてしますので、楽しみにしていてくださいね

実は、今までの話は中学の時に考えて書き溜めていたものだったのですが、この話の途中で実は途切れています（笑）この先、うまい具合に話進めていけるかな・・・ドキドキ。この時期の感性よ、降りて来い・・・では、これからも暖かく見守ってくださいまし〜。ペコッ。

第21話 傷跡・2（前書き）

まだまだ続きます。お騒がせボーアイズのお話。次話より、タイトルに沿った流れになって行く予定です。

第21話 傷跡・2

「どうぞ、紅茶です」

サクラと、ツバキの前に琥珀色をした紅茶が置かれる。

「すみません」

2人は静かにマスターに頭を下げる。

結局、埒があかないので、とりあえず、話をきいておいたりとなつて。

和やかだったその席に。どこまでも仏頂面の2人と。どこまでも不機嫌そうな顔の2人が加わって。何だかとっても楽しい感じなお茶会と相成ったのであった。

「・・・くつろいどちらんと、はよ帰り」

それでもいまだ喧嘩ごしの姿勢を崩さないこの2人に。

「お前たちが帰るまでは帰らん」

どこまでも譲らない人たち・・・。

あ・・・胃が痛い・・・と、ちょっとか弱い人なら軽くストレスで胃に穴が開きそうな雰囲気の中。
深い、深い沈黙が続く。

「で? いつたい何なんだ・・・? 悪いが、説明してくれないか?」
クイーンは、はあとため息をつきながらサクラとツバキの方を向
き、そう言った。

「はい」

「説明なんかいるかい!..はよ帰れ!..よけいなこと言いなや!..!

お前らがそんなんだから説明が必要なんだつーの・・・。

「バニー、ガーデン」

疲れたように、クイーンが2人を呼ぶと。

同様に疲れた顔をした2人がブラックとホワイトを羽交い絞めにし、その口を塞ぐ。

「ん～～～～～～～！」

「ん～～～～～～～！」

何だかバタバタ抵抗しているが、この際そんなことは放つておいて。

「それじゃあ、話してくれるか？」

クイーンの促しに、最初にツバキが口を開く。

「私たちは・・・幼い頃から婚約していたんです。何度も、お互いの家を行き来したりもしていて」

そして、その続きをサクラが受ける。

「そして、昨日をもつて私たちは夫婦となつたんです」

昨日をもつて？

その言葉が引っかかったアリスは小声でバニーに話しかける。

「どうということ？結婚式とかしてないでしょ？」

結婚したのならば、もつと大々的に結婚したことがわかるものではないのだろうか。

「ああ、アリスは知らないんだよね。僕らの世界では婚約した時に“期限”を決めるんだ。で、その“期限”がくれば自動的に夫婦となるんだよ」

「へー・・・・」

その説明を聞いて。

あれ・・・てことは・・・。

俺とバニーにも、期限があるっていうことか・・・？

アリスの脳裏に、ふと疑問が浮かぶ。

まあ、また聞いてみればいいか。

とりあえず、今は。

「Jの騒動をどうとかしなくては・・・。
どんよりと、現実に戻るのであった・・・。

「は〜、そういうワケだったのね〜」

リアンは命懸けといったというよううなづいている。

ただあとは、その結婚を、理由は知らないが今になつてブラック
とホワイトがゴネている、と。そういうわけなのね。

「それって、親同士の決めたものなんですか?」

親の勝手な政略結婚。それを嫌がっているのではないか、とソウ
がその意を含んだ質問をする。

ソウの質問に、サクラはブラックを見やり答える。

「いえ、私たちも了解の上で、です」

そのサクラの答えに、今までガーデンに羽交い絞めにされていた
ブラックが、そのガーデンの腕に噛み付いた。

「・・・っつ!!」

「ガーデンさん!??」

ガーデンのその力が緩んだ隙に、持ち前のフットワークのよせで
ブラックはガーデンの腕をすり抜けた。ガーデンを心配し、かけよ
るマスター。

そんな2人を無視して。

ブラックはサクラを指差して抗議した。

「了解の上やで? 5歳のガキに婚約じやあ結婚じやあの意味がわか
るかい!! んなモン無効や!! 無効!!」

ブチ切れブラックに対し。

「・・・俺は理解していた

「じこまでもわざいつと。サクラが答える。

「じこまでも・・・。
じこまでも・・・。

ブラックじゃサクラには敵わないだろう。ヒ。その場にいる全員
が思つてゐた（ホワイト除く）。

「お・・・」

細かに震えながら。

「お前が理解しどうても・・・一わいは理解しどうとかつたんや
〜〜!!!」

ブラックは、その主張を。
じこまでも響かせるのであつた・・・。

（続）

第21話 傷跡・2（後書き）

いかがでしたでしょうか。相変わらず更新がトロくて申し訳ありません；次話より話に展開が出てきますので。楽しみに待っていてくださいね

お知らせですが、ムーンライト（ノクターン）のほうに、クイーンとリアンの話をHP致しました。あまり過激なものにはしないつもりですので。大丈夫な方はそちらも読んでやってくださいね そちらにも評価や感想をいただけたとありがたいです。それでは、これからも“アリス”をよろしくお願ひ致します！

第22話 傷跡・3（前書き）

お待たせいたしました。今更なんですが・・・。双子が何弁をしやべっているのかわかりません・・・。へたに関西弁とかにするからこんな収集のつかないしゃべり方になってしまつんですね・・・。
。ウフ。（反省）

「サクラさんとツバキさんはまだ帰っていないよ
リアンは、扉を開けるなり相も変わらずブスくたれてるブラック
とホワイトに、半ば呆れ気味にそう告げた。

「・・・何で帰らんのや・・・」

「しつこい奴らやな・・・」

「ブツブツと・・・クッショングを抱えながら咳かない。
怖いっつーの。

あの後。

まさしく収集のつかない現場から。逃げ出したのは・・・やはり
ブラックとホワイトだった。といつても。クイーン邸の数ある客室
の一室を乗つ取つたつてだけなのですがね。1階にサクラとツバキ
がいるので、自分たちは2階の客室を選ぶくらいが、2人ができる
せいぜいの意地なのかもしれない。どうせ、どこまで行つても追いかけてくるのだ。だつたら。たくさん人もいて安易に手を出すこと
のできないここで根競べをすればいい。

あとは、あいつ等があきらめるまで待てばいい。そう、2人は判断し客室に引きこもつてゐるのだった。

もちろん。

他のメンツは、予想通り。思い切り巻き添えをくらはめになつたのであった。

「・・・ねえ、ブラックとホワイトは何でそんなにあの2人のことが嫌いなの?」

ブラックとホワイトが篭城している客室には、アリス・マスター・ソウ・リアンもいた。その中で、アリスは気になつていたことを質

聞いてみた。

この2人がここまで頑なになるところを始めて見たのだ。そこまで、あの2人のことが嫌いなのだろうか。あまり悪い人っぽくはなかつたんだけどなあ。とアリスは密かに思つ。

まあ、好きでもない人間との結婚とは嫌に決まつてはいるが。他にも何か、理由がありそうで……。

「……別に……」

「嫌つとるわけや、ないんやけどなあ……」

困つたような、笑み。

「……話してみて、くれませんか？お一人がここまでされる理由を……。もしかしたら、力になれるかもしませんから……」

その2人の表情に、マスターが心配そうに声をかけた。

アリスも、ソウも、リアンも。真剣なまなざしで2人を見やる。ブラックとホワイトは、しばし2人で視線を交わした後、ぽつりぽつりと話始めた。

「わいらは……わいらが本当に婚約しどったんは……あいつ等やないねん……」

「あいつ等の……兄貴やねん……」

ブラックとホワイトは目を伏せたまま、話を続ける。

「婚約は……わいらも同意の上やつたん。ちゅーか、まあ。これでも結構いいとこの坊ちゃんやからな。わいら。そういうんがあるんは、仕方ないってのもあつたんやけどな……」

苦笑を浮かベブラック。

「親同士も仲よかつてん。わいらも……その、スミレ言うねんけ

ゞ、スミレのこと嫌いやなかつたし・・・

それを引き継ぎ、ホワイトが言ひ。

「・・・ん? ちょっと待てよ。・・・スミレって一人?」

そこまで聞いたところで、リアンが口を挟む。

そのもつともな質問にブリックがうなづく。

あれ?

婚約つて、つーか結婚つて、基本は1対1ですよね? いや、まあ
一夫多妻制つてのもありますけれども・・・。

皆の頭上に? が飛ぶ。

まさか。そのスミレさんとやらも、ジジ家の高飛車さん方のよう
にいくらでも妻つつーか愛人つつーか困っちゃうみたいな人ですか?

「その婚約の書類ゆーのがあやふやなモンでなあ」

皆の無言の間にホワイトが答えづらそうに話し出す。

「明記してあるんが“自分たちの子どもを婚約・結婚させる”つち
ゅー」とだけで、その辺の細かいところが書かれてないねん」

さすがこの2人の親・・・(とその仲良しさへ…)

とうあえず。皆の心の声にはさつとフタをして・・・。

「せやから、誰が誰と婚約する、とか結婚するとかいつもは決まつ
てないねん」

「でも、サクラさんはブラックさんと、ツバキさんはホワイトさん
と婚約してゐるみたいなこと言つてましたよね?」
ソウの質問に。

「それはあいつ等が勝手に決めよつたんや!」

ぎやーぎやーと再び火を加熱し始めるこの2人。 もついいか

げんにしないとコンクリで埋めちゃうや
「え? ジャあ、そのスミレさんは?」

アリスのその言葉に。

2人の表情が一瞬にして凍りつく。

「……え？」

なんか、マズイとここ・・・ふれ・・た?

「……だ」

しばしの、沈黙。

それを小さな咳きが破る。

「……スミレは・・・死んだ・・・」

顔を上げて、皆を見据えて。

「……スミレは・・・わいらが殺したんや・・・」

2人は、そう呟いた。

「そうか、事情はだいたいわかった」

「こちらは、サクラとツバキのいるさきほどどの客間。ここにはクイーン・バー・ガーデン・裕馬がいた。こちらでも少しづつ話をしているようだ。

「だが、ノーテンキなあいつらが・・・あそこまで頑なに嫌がるとはな」

婚約の書類の内容の話まで終わつたところで、クイーンはもうもらう。

「……ノーテンキ・・・?」

そのクイーンの言葉に、サ克拉とツバキは眉を寄せる。

「あの2人は、ノーテンキなんかじゃ ありませんよ?」

その2人の言葉に、今度はクイーン達が眉間に皺を寄せる。

「ノーテンキじゃない?」

あの2人が？

“バスケや～！” “サッカーや～！！”と日々走り回り、いるだけであるで公害の「」とく騒ぎまくるあの2人が能天氣でなかつたら何だと言つのか。

まさしく、それを顔全面にクイーン・ガーデン・バーが出していると。

「・・・俺も・・・てか、俺はあの2人とは付き合い短いからよくわかんないッスけど・・・俺も、あの2人が能天氣だとは思えないんだけど・・・」

裕馬がそこで初めて口を出す。

確かに、ブラックやホワイトと会つて関わった時間はとても少ない。でも、何だか。遠くからあの2人を見ていると・・・。

「・・・どうして、そう思つ？」

クイーンが、静かに問つ。

「わかんないッスけど・・・あの2人は・・・どこか無理してる気がする・・・」

皆の視線が裕馬に集まる中、裕馬はそう答えた。

（続）

第22話 傷跡・3（後書き）

少し話しに展開が・・・！次話ではアリスとソウの各カツプル話
が入つてくる予定です お楽しみに～

余談ですが、20話もいつたし、いつも遅い更新を暖かく待つてく
ださつてくださつている読者様むけに感謝企画でもしようかと。ア
リスキャラでの座談会チックに、各キャラへの質問やこんなシーン
が見たいなどリクエストお待ちしております（メッセージでも評価
でもいいので。アドとかは別に入れなくて結構ですので^ ^）！感
想や評価くださつた方へのコメントも入れたいと思っておりますので
！名前がわかつてている方は出させてもらおうとも思つております（
嫌な方は言つてね）！多くのご参加お待ちしております 9月下旬
か10月半ば頃作成予定 ヒヤするまで受け付けております。

第23話 傷跡・4（前書き）

お待たせいたしました。今回はアリスとソウのお話が紛れていますよ ではでは、本編へ
あと、前話のあとがきにも書きましたが、お知らせがありますので
あとがきも読んでね

第23話 傷跡・4

「何かびっくりしましたよね」。まるで2人とも別人みたい
ソウは、ブラックとホワイトの寝顔を見ながらしみじみとつぶや
いた。

「本当。何か、らしくなかつたよね」

そのソウの横で、アリスもうなづく。

ブラックとホワイトは、話の途中で疲れたから、と眠りについて
しまった。残された面々は、それぞれに・・・悶々としていた。

「ああ！…やっぱり気になる！…気になるところで話が途切れたら
あ！…ブラックたちとスミレさんとの間に何が！？」

突然発狂したように叫びだすrian。

そのリアンを、2人が起きますよ、とマスターが咎める。だって
えと言いながら、リアン。

「…下に降りてみませんか？サクラさんたちの話も聞いてみた
いし」

マスターは、リアンを咎めた後、思い立つたようこそう言った。
何だか、話が尋常じゃない方向に流れてきた今。

もつと確かな情報が欲しい。

「ん~・・・そうだねえ。そうしますか」

リアンも同じ事を思ったのか、腰を上げる。

リアンとマスターはそう言つと、静かに部屋を出て行つた。

何となく。

その場に残つたのは。

アリスト。

ソウ。

そういうえば、2人きりになるのって初めてだな・・・。
ふと、アリスはそう思った。

ちらりと横を見やると。そちらのアイドル顔負けの、清楚なお顔。
男子校に通つていれば、きっとアリスと悩みを分かち合えたひつ。
そんな顔立ちに、雰囲気。

「・・・アリスさん・・・」

じつと横顔を眺めていると、ソウがこちらを振り向く。

「え？」

「あまり見つめないでくださいよ～」

照れます。と顔を赤らめてソウは言ひつい。

か・・・可愛い・・・。

なぜかアリスまで赤くなる。

「あ、や、・・・」めんぐめん

そのアリスの様子に、クスッとソウは笑み。

「もう、あんまり熱烈に見られるとムラムラしてきちゃうじゃないですか」

につ、「ことと恐ろしい」とを言ひなさる。

「！？」

皆様、お忘れかもしだせませんが。

「なーんて。冗談ですよ。僕の好みはガタイのいい人なんです
この可愛らしいお顔をしたソウくんは。

「今は裕馬さん一筋ですしね。ね、裕馬さんってヤリがいがあると
思いませ・・・」

「わーわーわー！――！」

バリバリの男の子くんだつたのでした。

てか、黒い笑顔で裕馬の貞操を狙わないでくれ……と、いうか。

発言が教育指導ものです。

「もう！アリスさんてば可愛いんだからあ

・・・どこまで本気だ。あんた。

ああ。何か。このノリは・・・。
リアンに似ている・・・。

遠くでそんなことを思いながら。

「・・・ていうか・・・ソウって、ほんとに裕馬のこと・・・アリスは、現実へどうにか戻つて。
ずっと気になっていたことを聞いてみた。

「はい。愛しますよ？」

「あ、そんなつぶらな瞳で言われると・・・めまいが・・・。
「最初はほんと、外見が好みだなって思つたんですけどね」
いや、うん。

確かに、裕馬はいい男だと思つ。

身長もあるし、ほどよく筋肉もついてるし。

女の子にもモテるし。

「最近はもう・・・僕と目が合つただけでほのかに顔を赤らめると
こうとか・・・」

え？誰ですかね？？

「ふいにキスした時の驚く顔とか、抱きついたりちょっとイタズラ
したりした時の何ともいえない表情に・・・ふふ。
えつと。それは俺の知ってる裕馬くんと本当に同一人物ですかね？
ていうか、今何て？
い・・・いたずら・・・？

「ちよつともうそひそろ・・・押さえがきかないかなあ・・・なんて・・・」

裕馬・・・！貞操の危機・・・！？

遠くを見ながら黒く笑むソウ。

悪友が遠くへ行つてしまひ予感をひしひしと感じるのであつた・・

「...」
「...」
「...」
「...」
「...」

打ちひしがれながらも。

アリスは黒く笑んでいるソラはやがて二質問をしてみた

すりと、氣になつていた。」

「何ですか？」

「その…・し・・・・・したい、もん・・・・?」

や、
それは男だし。

その気持ちはよくわかるがたはとて
可分、第三ド龍りづかし、二つも、二

だから、どうなのかな、とも思うわけよ。

「・・・アリスさんとバー様つて・・・もしかして、まだ？」

アリスは恥ずかしさをこらえながら、俯いたままうなづく。

出会いって、もうだいぶん経つ。

両思いになつてからも、ビのへりに過ぎただけ。

相変わらずバーは、その優しい笑みで、俺を見てくれる。

相変わらずバーは、優しく、額や頬に、キスをしてくれる。

でも。

どれだけ一緒に夜を過ごしても。

バーはそれ以上のことは決してしてこない。

いや、されども困るんだけど、ね。

それでも・・・。

204

俺に、魅力がないからなのかな・・・。とか、思つてしまつから・・・。

「す、」「・・・」

乾いた、ソウの声。

「や、やっぱ、ありえない・・・?」

これだけずっと一緒にいて、手も出されないなんて、やっぱりおかしいよな・・・。

あ、何かちょっと、泣きそう、かも。

じわっと、目頭が熱くなるのをアリスは感じた。

「大事に、それでるんですねえ・・・」

「・・・え？」

思つても、みなかつた、こたえ。

思わず顔を上げたその先で。

優しそうな、どこか羨ましそうな、照れていくような・・・ソウの笑顔と視線がぶつかる。

「それって、すごく大事にされてるんですよ。アリスさん。アリスさんの心の準備ができるまで、この世界に慣れるまで・・・きちんと待つてくださってるんですよ。きっと」

「・・・そ・・・なの、かな・・・」

「まあ、わかりますけどね

「・・・？」

ソウはアリスの声に出さない思いに気付いたのか、にこりと笑んで。

「バニー様を見ていたら・・・バニー様がすっごくアリスさんを大切に思つていらっしゃるのが

ああ。

涙が、溢れてくるよ。

「ふふ・・・僕はお一人がとっても羨ましいです。何だか、とっても理想なんですよ」

涙が。
溢れる。

「・・・お一人を見ていると・・・僕も、裕馬さんを大切にしなきやつて、思えてくるんです」

アリスは、溢れてくる涙をぬぐいながら。

「そうだよ。裕馬は俺の親友なんだから」

人に愛されて。

人を愛することって。

「絶対、大事にしてやつてよ・・・！」

こんなにも、心が温かくなる・・・。

明るく笑うアリスに。

「もちろんですよ」

ソウも、笑顔で応えた。

「体の隅々まで、僕なりに大事に扱わせてもらいますよ」

「今までのプチ感動話を返しやがれ。

どこまでも、ゴーイングな。

ソウなのであつた・・・。

「無理？」

クイーンは真剣な面持ちで裕馬の言葉を反芻する。

「ええ。無理に明るく振舞つてるような気がするんですけど・・・。まるで・・・何かを必死に忘れようとしてるような・・・。ま

ガシャン・・・！

陶器の倒れる音が室内にこだまする。

テーブルクロスには、琥珀色のシミが広がっていく。

「・・・すみません・・・」

サクラは倒れたカップを無表情に元に戻す。

「何か拭くものがありますか」

「あ、これを」

サクラの問いに、裕馬は近くにあったナフキンを手渡した。

サクラはそれを受け取ると、琥珀色のシミをふき取り始めた。

一方、ツバキは相変わらず無表情ではあったが、どこか思いつめたような瞳をしている。それを横田に、クイーンとガーデンは静かに言葉を交わす。

「・・・何かあるな」

「ああ・・・」

そういってみると、リアンとマスターが部屋に戻ってきた。
「ねえ、サクラくん、ツバキくん。ちょっと聞きたいことがあるんだけど」

リアンは、どかりとクイーンの隣の椅子に腰掛けると、間髪入れずに話を始めた。

「スミレさんのこと、聞きたいんだけど」

“スミレ”

その言葉に、案の定。

サクラとツバキはぱっと顔を上げ、反応する。

その反応を見て、マスターが続ける。

「・・・ブラックさんたちが言っていたんですね。その・・・

スミレさんは・・・自分たちが・・・殺した、つて・・・

続

第23話 傷跡・4（後書き）

いかがでしたでしょうか。久しぶりの愛の国物語（笑）裕馬危うし・・・というか、ソウが黒いよ・・・。書いていくうちにこんなキャラに・・・アレ・・・？そんなソウくんからお知らせです。

「ここにちは。ソウです。前話でも告知しましたが、作者が読者様への感謝企画をもぐろんであります。アリスキャラでの座談会を予定しているみたいなので、ゼヒ僕らへの質問や見てみたいシーンなどお寄せくださいませ。僕と裕馬さんのラブラブシーンが見たいとか、裕馬さんのドレス姿が見たいとか、裕馬さんの・・・」「それはお前の希望だろ！？」「裕馬・・・大変だね・・・。では、評価やメッセージお待ちしております」「！？ちょ・・・アリス！まためんなよ！？」お待ちしております（＾＾

第24話 傷跡・5（前書き）

やつといの話の前半戦が終わった感じ……。ブラックとホワイトのへせで話が長いですね（笑）

第24話 傷跡・5

はい。皆様こんにちは。アリスです。
えーと、今どういう状況かと言いますとね・・・。

ソウまで、眠りの世界に行っちゃいました・・・。

『何か、いい話したら眠くなっちゃった（そのいい話を最後の最後
後にブチ壊したのはアンタだ）。アリスちゃん一何か進展があつたら
起こしてくださいね～！』

そう、言葉を残して。

ブラックとホワイトが寝ている、密室のキングサイズのベッドに
潜り込んでいったのであつた・・・。

そんなわけで、ただ今一人で呆けてあります。

手持ちぶさたになつたアリスはつまらなそうに辺りを見回した。
すると、ベッドの脇に何か落ちていてことに気付く。

「ん? 何だろ・・・これ・・・?」

アリスは、それを拾い上げる。どうやら、ペンダントのようだ。
拾い上げたそれを、角度を変えて見回している。

急にペンダントのフタがあき、ザアッと何かがかすめる。

「わあ・・・!?

驚いてガシャンとそのペンダントを落とすと、その何かは揺らめ
き、そして、形を持つていった。

「立体・・・映像つて・・・ヤツ・・・?」

それは、形を作り一人の少年の姿となつた。

どの姿は、どこかしらツバキとサクラに似ていたが、どこか柔ら
かく、人を安心させるような雰囲気を醸し出していた。

「・・・これが・・・スミレさん・・・?」

その顔には、どこまでも優しい笑みが、刻まれていた。

アリスは、ちらりとブラックとホワイトを見やると、もう一度立体映像にその瞳を移す。

それから、ペンドントを大切に拾い上げフタをすると、眠る2人の横にそっと、返しておいた。

スミレは、じりだらり・・・。

とてもとも、暗い場所。
明かり一つ、ない場所。

隣には、自分の片割れがいるのに。お互を見やることも、話をすることもできない。

「ブラック、ホワイト・・・」

声に振り返ると、そこには、いつも笑顔のスミレがいた。そして、その唇が、言葉を放つ。

「愛してくるよ・・・2人とも・・・」

もう囁ひ、スミレは炎に包まれだす。

スミレ・・・!-

叫ぼうにも、近づいても、動かないし、声も出ない。

そうしていのちに、スミレは見る間に炎に包まれていく。

その、笑顔のまま。

いやや・・・・・スミレ・・・・・

手が、届かない。

スミレが、そこにいるのに。

そして、フツと炎が消え、ブラックなしきみやくソレに手が届く。

ソレは・・・。

無残にも足元に崩れ落ち。

指の隙間から、ハラハラと散つていつたのであった。

いやや・・・スミレ・・・・!

置いていかんといて・・・!

スミレ・・・!スミレ・・・!

「は・・・は・・・・!」

「う・・・・!」

2人は、同時に目を覚ます。

そこは、暗く、何もない場所ではなく。明るい場所だった。額には汗がにじみ、その頬には涙のあとがくつきりと残る。

嫌な、夢。

そう、あの時の。スミレを殺した時の夢・・・。

「わー!? 2人とも、どうしたのー?」

アリスは、起きた2人のその表情を見てギョッとした。

「・・・何でもないんや・・・」

ブラックは、小さな沈黙の後、その手の甲で汗と涙をぬぐいながらそう言った。

ホワイトも、涙の後をコシコシ消していく。

「・・・ブラック・・ホワイト・・・」

「変な夢見ただけやから・・・氣にせんといで・・・」

ホワイトは、力なくそつぶやいた。

「ブラックとホワイトがそんなことをー?」

マスターの言葉に。

サクラは顔色を変えてテーブルに身を乗り出した。ツバキも渋い顔をしながら、つぶやく。

「・・・兄さんのせいだ・・・何だってあの人は・・・こんなことになるのなら、あの時、どうして止めなんだった・・・!」

「!」

「あの時って・・・?」

そのつぶやきに、クイーンが反応する。

「・・・それは・・・」

「話してみたらどうだ? 少しあは力になることもあるかもしけんガーデンも、2人を後押しするように言う。

2人は、顔を見合せた後、重い口を開いた。

「まだ、あいつ等……あるん?」

「あ、うん。そう……みたい」

唐突に、ブラックが尋ねる。

「まだおるなんか……わいらも下行こうで。何言われるかわかつたもんやない」

ホワイトは、ベッドから降りると、つかつかと扉へと向かう。その後を、無言でブラックもついていく。

「ちょ……!? オイ……!? 2人とも……?!?」

いきなりの行動に、アリスはどうしていいのか戸惑う。

そして、しばし迷った末。アリスも2人を追いかけ、階下に向かった。

「……あの2人には、話さないでくださいね
きつちり、釘を刺して。ツバキは話始めた。

「……兄さんには……別に恋人がいたんですね

（続）

第24話 傷跡・5（後書き）

はい、いかがでしたでしょうか。ちょっと核心に触れつつ、終わった前半戦。・・・後半戦の内容・・・はや考えなな・・。

「はい！よいこの皆さんこんちは～！アダルト担当のリアンさんです！今回の感謝企画の宣伝は俺で～す！まだまだ質問やリクエスト受付中です。ちらほら集まつてきてるよ～。俺への質問もよろしく～！あ、でも俺ってばシャイだから～あんまり過激な質問はダメよ？」「どこがシャイだ・・・」「ちょっとクイーン、横から茶々入れないでくれる？」「では、たくさんの方のご参加お待ちしております」「そんなにこやかに・・！でか、俺まだしゃべり足りない・終。

25話直前！アリス感謝祭（前書き）

やつてまじりました～！感謝企画 とてつもなく頭悪そうなものができた予感（笑）セリフのみで進行していますので、少し見づらいかもですが・・・ではではーどうぞお楽しみくださいませ～～！！

25話直前！アリス感謝祭

「あいさつ

アリス：えっと、みなさんこんにちは。いつも“アリスな話！”ご愛読、ありがとうございます！日ごろの感謝を込めて、今日は感謝祭もとい座談会を企画しましたので、違ったアリスの魅力を楽しんでいてください！今回、司会進行のアリスです。よろしくお願ひします！で、これでいいのかな・・・。（不安）

リアン：アリス、カンペ棒読みすぎ！もつとリラックスしたら？アリス：だつて・・・！こんな大役・・・！リアン、代わってくれよ！！（必死）

リアン：え、メンディから嫌～！あはははは！（サラリ）マスター・リアンさん・・・。（あきらめたような笑み）大丈夫ですよ。アリスさんなら。ね？

アリス：マ、マスター・・・！（感動）ガーデン：何の根拠もねえけどな。（ズッパリ）

マスター・ガーデンさん！――

「」この世界の構造は？？

アリス：俺、これ、スッゲー疑問。（私も疑問・・・）

裕馬：確かに。地理とかもそうだけどさあ。国？なんですか？この政治体制みたいなのがってどうなってんスか？

クイーン：地理から言えば、10の地域からなる。1つの地域がそつちの世界でいう日本くらいの大きさか。その地域をくぎるよう線状の海がある。各地域にはそれぞれ富豪がいてその富豪によってその地域はまとまっている。それをさらに王家の人物がまとめる、といった感じか。

ガーデン：地域をまとめること度は富豪レベルができるが、この世界をまとめ、維持することは王家の人物にしかできないからな。

ソウ・ちなみに僕もサドナつていう地域の富豪の出です。

アリス・へ～、そんなシステムなんだ～。（今決めてみました・・・）

王家・・・て？

アリス・王家・・・って何回か出てきてるけど・・・？

バーナー・10ある地域のうち、このレグナつて地域だけは王家の管轄なんだよ。だから、王家やその分家が多く住んでるんだ。

裕馬・ソレ！俺、ずっと気になつてたんだけどさあ・・・。もしかして、みなさん、王家のつながりなんじゃ・・・？（恐る恐る）アリアン・あれ？知らなかつたつけ？マスターはクイーンの弟になるんだよ。

アリス＆裕馬・ええ！？（似てない）

マスター・ええ。そうなんです。あと、ガーデンさんとは父方の従兄弟同士になるんです。

アリス＆裕馬・従兄弟！？（クイーンとガーデンにはつながりを感じる・・・）

アリアン・さらしさあ・・・クク・・・・ブラックとホワイトはクイーンの甥になるんだぜ～～～！（大爆笑）

アリス・クイーンがおじさん・・・！？（ちょっと笑える）

クイーン・余計なことは言わなくていいんだよ！（怒）

こつちの世界での生活

アリス・スケールが違うよね・・・。建物とか服とか食べ物とか、根本は変わらないんだけど・・・。

裕馬・どつか中世のヨーロッパ風なところはあるよなあ。向こうみたに電化製品ガチャガチャあるわけじゃねーし。

アリアン・生活でいうとそんな感じかもねえ。でも、スケールの大きさは王家の生活だからだよ。一般的のご家庭じやこんなじこの御殿？みたいな生活してないって。

バーー・?これが普通じゃないのか?

クイーン・普通だろ?

リアン・あはは。黙つてる。このボンボン共。（ザックリ）

裕馬・このスケールには相変わらず、何か慣れないよなあ（苦笑）

感想などについて

アリス・嬉しいかぎりです！ほんと。読んでくれてるだけでも嬉しいのに、感想や評価までいただけると本当に嬉しいです！！
バーー・BLには抵抗があつたけど、って人や、主婦＆ママ業しながら読んでくれてる人とか。BL好きな人とかね（笑）僕たちも恥を忍んで日々の恋愛中継してるかいがあるよね、アリス。（にっこり）

アリス・・・・・！（赤面）

リアン・ビニラへんを忍んでるのが教えて欲しいわ。（ツッコミ）
マスター・でも、作者としてはボーイズラブ（BL）を書いていいものかいろいろ悩んでの投稿でしたから・・・。こうしてみなさんに作品を読んでもらって楽しんでもらってこむことはとても嬉しいことですよ。（涙目）

ソウ・マスターさん・・・。本當ですかね！僕もそう思います・・・！要は・・・これからも読者を離さないようガッツリ私生活を開いていくってことですよね！！？

マスター・え・・・・・や？（違つ・・・・・）

アリス・・・・ほんと・・・どこまでも・・・。

ガーデン・いい話をブチ壊す奴だな・・・。（遠い目）

コメント・質問

アリス・えっと、今までに寄せられたコメントや今回、感謝企画を進めるにあたつて寄せられた質問を紹介、お答えしていきたいと思います！えっと、まず始めは・・・。

(霜月黎夜様よりの「ご質問」)

『やつぱり、と言いますか……裕馬クンが受け、ですか?』

裕馬：・・・・・！？（赤面）

ソウ：あ、僕たちのことですね！裕馬さん！

裕馬：アリス！！何でこんな質問持つてくんだけよ・・・！？

アリス：いや、だつて、来たんだもん。

裕馬：テメ・・・！？

ソウ：やつぱりっていうか、そうですね！

裕馬：ソウ・・・！？

リアン：へへ、やつぱり裕馬くんの方が受けなんだ？

裕馬：リ・・・リアンさん！？やつぱりって・・・！？

ソウ：（裕馬を無視して）僕、ガタイのいい人組み敷ぐの・・・大好きなんです・・・。（うつとり）

裕馬：・・・！？

アリス：あはは。何だか結構、ソウと裕馬の動向を気にされている方もおられるようなので。次のシリーズあたりでは、2人の話も出てくるんじや・・・？（しょせん他人事）

裕馬：・・・！？な！そんな恥ずかしい話できるか・・・！？

リアン：そんな恥ずかしいような恋愛話なわけ？2人の関係つて（ニヤニヤ）

ソウ：そうですよ！いつ教育的指導が入るかヒヤヒヤものの作品になりますよ！？

裕馬：ソウ！？

クイーン：・・・お前、ソウを嫁にもらわなくてよかつたと心底思つてるだろ・・・。

バーー：本当に、心の底から思いますよ・・・。（遠い目）

とりあえず・・・裕馬と言ひ名のスケープゴートに合掌。

(ゆんち様よりの「」感想)

『強姦されたなんて過去があつたなんて驚きです。それからどうしてクイーンを好きになつたのか・・・!?(気持ちはよかつたら?)』

リアン：いや～ん、そつなのよ～つて・・・、そこ、ヒかない。冗談だつて。

アリス：ヒくわー！（赤面）

リアン：まあ、そこいらへんはノクターンの方で番外編書いてるから、詳しいことはおいおいそこでわかつてくるんじゃない？

ガーデン：おーい。何だか一人喜びに打ちひしがれてるのがいるぞ。

クイーン：（何だか静かにニヤケ顔）

バニー：恥ずかしい両親を持つて僕はもうどうしていいかわからな
いよ、アリス。（涙目）

アリス：バ、バー・・・。（きゅん）

リアン：ソコ、どうせここにまぎれてアリスに抱きつかない。つか、恥ずかしいお前の母親はアリスの義理の兄だつての。つーか、クイーン、にやけ顔キモイから。

ガーデン：・・・お前はもう少し恥じらいと優しい言葉を身につけたらどうだ・・・?

リアン：・・・ちょうど心外。

バニー：どつちもどつちだろ。

（いつもメッセージありがとうござりますー今回はお手数おかげしました！）

(青空海陸様よりの「」感想)

マスター：お友達の紹介でアリスを読んでくださつたそうです。

ソウ：お友達、グッジョブ！！ですね！！

アリス：何でも、青空さんはリアンに似ているらしいよ。

リアン：俺に？そりゃ、スゲーいい性格じゃん！！

バニー&クイーン：別の意味でな・・・。（失礼）

リアン；俺に似てたら将来安泰よ！バッチリ

バニー＆クイーン；・・・・！（思い切り足を踏まれた）

ガーデン；ある意味な・・・。（哀れみの目で2人を見る）

マスター；でも、リアンさんみたいな方が他にもおられるって素敵ですね。一緒に話しているところとか見てみたいですね～（ほんわか）

アリス；あ、でもコレ、他にもおられたんだけど、リアンの話し方が男の人には思えないって。

リアン；あらまあ。

アリス；目の前にして話すとどこまでもおちゃらけてるって感じしかないんだけど。確かにそつかも。語尾を伸ばすっていうか・・・。リアン；場を和ませようとしてわざといつづりしゃべり方なのにねえ。軽くオネエ言葉だからねえ。

ガーデン；文字だけ見ると頭悪そうだもんな。

リアン；ほめ言葉として取つておくわ。

アリス；・・・何か火花散つてるんですけどー・・・。

（くるみ様からのご質問）

『アリスとバニーに進展は・・・！？』

アリス；や、えつと・・・その・・・。（赤面）

バニー；僕はどこまでも先に進みたいと思つてるんだけどね。（元つっこり）

アリス；・・・ええ・・・！？

バニー；ふふ。でも、こればかりは相手のいることだし。どつかの誰かみたいにゴーカンまがいのことなんかしたくないしね。

クイーン；おい。

バニー；（無視）少しづつ、2人で愛をはぐくんでいこうね。アリス。

アリス；・・・う、うん・・・。

リアン；・・・我が息子ながら何だか周到すぎて恐ろしいやねえ。

(苦笑)しかし・・・どうこまでも爽やか路線で通す気が。ガーデン・お前等の息子なんだから性格に難アリなのは仕方ねえだろ。

マスター・ガーデンさん!!
ソウ・アリスさんとバニーさんはゆっくりとした恋愛ですね。・・・
代わりに僕が頑張らなくっちゃ!!
裕馬・頑張らんでいい!!

(友人代表N様・・・)

『続きを読む・・・!番外編の続きを・・・』

リアン・また来週ツ!
アリス・違うだろ!?
裕馬・これきっと、読者の思い全部反映されたコメントだと思づぜ・・・。
リアン・カメな作者を許してね・・・!!

今後の展開

アリス・どうなるんでしょうか・・・。
クイーン・・・・作者しだいだなあ・・・。
裕馬・そんな現実的な・・・。
ソウ・うちはラブラブって決まってますけどね!!!
裕馬・お前、頼むからもうしゃべるな・・・!!
バニー・(アリスを選んで本当によかつた)
リアン・いいかげん、寄り道しすぎてるって作者も自覚してるから、近いうちにアリスとバニーの話に戻つてくるんじゃない?今はそれぞれ脇役がメインでやつてるし。
マスター・ですね。婚約後、の進展とかも・・・。
ソウ・僕はマスターさんとガーデンさんの出会いとかも気になるところですけどね!!

(一部ブリザードが吹ぐ)

アリス・お、俺、一般庶民の生活とかもみてみたいなあ！！

裕馬：お、俺も！－ははは－！（乾いた笑い）

バニー・ソウナの?じやあ、近々お祭りもあるし、一緒に行つてみようか。

アリス・祭り！？うわ！行く行く～～～～！

リアン・ま、何はともあれ、ブラックとホワイトの今のは話が一段落ついたらだ・・・

全員；

アリス：そ、そういえば……ブラックとホワイト……は？（今頃）

マスター：婆、見ませんね・・・?

ガーデン……そこらへんで転がつてんじやねーか。

リアン；（アンタ2人を何だと思ってんのよ）・・・もしかして、招待し忘れ？？

沈默。

バニー・・ま、過ぎたことはしようがないですから！（爽やかに）
クイーン・・ま、あいつらがいても場の収集がつかなくなるだけだしね。（ウザそうに）

アリス：（い、いいのかな・・・）じゃ、じゃあ、時間も来たこと
だし、最後に一人ずつ読者の方にメッセージをどうぞ！

ソウ・幸せに、なります！！

裕馬………狙われてます……。

マスター、これからもよろしくお願いします。(ペーパー)

クイーン・遼々としているが暖かく見守つてやつてくれ。

バーン；みなさんの期待に添えるように頑張ります。（にっこり）
リアン・リアンファンクラブでは、隨時会員募集中（勝手に発足）アリス：（収集つかね～・・・）えっと、こ、これからも、アリス
な話！をよろしくお願ひします！今回ご協力いただいた方をはじめ、いつも読んでくださっているすべての読者様に感謝を込めて。本当に、ありがとうございました！！

バタン！！（唐突にドアが開く）

フツッケ！ああ！！？せん縫めに入るとかん！？

ホーリー・ホーリー・ガーデン! ひといれ・・・・! わいわい隠隠モード!

一
息

(息を切らして登場)

（二三〇七） クーリン：よぐねか二たた
ガラリ、さう三重三

アラッケ…あ…せり…處…!!? (ガビン)

元「」子らがいれ

るー?今からもう一回仕切り直そうや・・・

バー・もう時間ですから、無理です。（せっぱ

みなさん、これからも“アリス”をよろしくお願ひします～（ここで

やかに

ホワイト：強制的にまとめようた～～！？

ブランク：この冷血一族が～～！！（泣き）

「クラシック・ワードの構成が、より柔軟性がある」。

これにて、感謝祭、終了です！！

25話直前！アリス感謝祭（後書き）

いかがでしたでしょうか？今回のために質問を送ってくださった方、今まで感想や評価で「メンントくださった方、読み専の方々、とにかく皆様に感謝感謝でござります！！なかなかテンポよく更新できずについてみません。こんなカメのように進むアリスシリーズですが、これからも暖かく見守ってやってくださいませ！！今回のこの企画はとっても楽しかったです！本当にありがとうございました！！

第25話 傷跡・6（前書き）

あああああ。本当にもう、何と出だしたらいいのやら・・・！
1ヶ月以上もお待たせして申し訳ありませんでした！！感謝企画の
次がそんなかよ！というシソコミは謹んで承りたいと思つております。
す・・・。それでは、本編へ・・・！

第25話 傷跡・6

「・・・何・・・?」

リアンは顔を曇らせてサクラたちを見据えた。

重い沈黙がその場に流れる。

「ブラックたちは・・・自分たちが兄を殺したと思つてゐるみたいですが・・・実際、兄は・・・」

「自殺、したんです」

サクラとツバキは目を伏せて、重く、重くその言葉を紡いだ。

「・・・あれは、もう30年も前のことです・・・」

「さあさー今日の仕事はこれで終わりだよ!みんな帰つた帰つた!」「お疲れさんで~す!~!」「だつだぴろい厨房。

その厨房に響き渡る数人の男の声。一番歳のいつた男の掛け声に、厨房にいた「ブラックたちはそれぞれ後始末を終え、散つていった。一番最後に残つた男も、厨房をぐるりと一瞥し。

「よし。俺も帰るとするか」

異常のないことを確認し、その厨房から出て行つた。

その後。人のいなくなつた厨房に。

シュー・シューといつ不吉な音が。その静寂の中に響きわたつてい
た・・・。

「今日は遅くなつたので旦那様たちは別宅に泊まつて帰られるそ
うですよ」

にこやかに笑む、初老の紳士。

相手に対する、慈しみの感情がその瞳には溢れてい
る。

「なんや。帰つてこんの?」

「ほな、もう寝よつか」

同じ顔をした、少年が2人。

白いパジャマに身を包み、顔を見合わせ話をする。整った顔に、完全に成熟しきっていないその体が、どこか危うい印象を与える。

「ロジ、もうさがつてもええよ。僕らは2人で大丈夫やから」

にこりと、その紳士を安心させるように笑む。

「ですが・・・」

「ロジんとこ、今日は婿さんおらんのやろ? サジさんとコナちゃん2人や心配やん。行つてあげて」

いわいそと、2人は寝支度を始めながら紳士に声をかける。

「ほり、もう寝るだけやもん」

「朝、また来てくれたええよ」

ベッドに腰掛け、2人は言つ。

「・・・すみません。お2人が起きられる前には戻りますので」

紳士は、しばし考えこんだ後。そう言つた。

その言葉に、2人の少年は嬉しそうに微笑む。

「ん。おやすみ、ロジ」

「おやすみなさいませ・・・ブラック様、ホワイト様」

「どうこうことだ! 兄さん・・・! ?」

「今、話した通りだよ」

その青年は、静かにそう口にした。

青年を信じられないといった面持ちで注視する一つの視線。その痛いほどの視線を、まるで感じないかのようだ。その青年はその口元に、笑みすら浮かべて。

「・・・・今言つた通りだつて! ? どうこうつもりなんだ・・・! ?

他に・・・他に恋人がいるなんて・・・! ?

ツバキとサクラには、兄がいた。名をスミレという。

一人はない、とても柔らかな雰囲気を持った兄。そして、その温和な人柄に合わせず、実はこうだと決めたらそれを最後まで貫き通す強固なまでの意志をも持つ兄。だからこそ、今日、スミレが突然“自分には婚約者のブラックとホワイト以外に、かけがえのない恋人ができた。だから、婚約を解消する”と言い出した時、兄は本気なのだろうと悟った。

しかし。

なぜ。

ずっと昔から、この婚約は決まっていたことだった。
確かに、曖昧で、不確かな内容ではあつたかもしれない。
それでも。

ツバキとサクラは、この婚約は絶対なのだと信じていた。

ブラックとホワイトは。

いつか、この兄と結婚するのだと。

否。

ブラックとホワイトも。

そう、信じていたのだ。

それが。

突然の、スマレの裏切り。

ツバキとサクラは、兄の突然の告白に衝撃を隠せない。

どうしてこうなった？

なぜ？

いけない。

許してはいけない。

婚約は絶対であり、今更覆すことなど、できるはずがない・・・
!!

「・・・僕は今から一人にこのことを話に行つてこようと思つ」
ツバキとサクラの葛藤など、まるでぞ知らぬ顔で、淡々とスミレ
はそう言つた。
まるで、早くカタをつけてしまいたいといったように。

「兄・・・・！」

そんな兄を行かせてはならないと、ツバキが制止の声をかけよう
とした、その時。

大きな音がしてその扉が開いた。

「大変でござります・・・・！」

息をきらして入ってきたメイドは、その非礼を詫びることも忘れ、
ひどく慌てたようだつた。
そして、その口から告げられたのは・・・。

「ブラック様と・・・ホワイト様が・・・・！」

3人がブラックとホワイトの住む屋敷についた頃には、その屋敷
は、すでに手のつけようがないほどにまで紅く燃えていた。

「早く・・・！早く火を消すんだ・・・！」

「ダメだ・・・！火の回りが速すぎる・・・！」

「ああ・・・！早くしとくれよ・・・！ブラック様とホワイト様がまだ中に・・・！」

屋敷を囲む、大勢の人。

屋敷に残る者を救助する者、火消しのため放水する者、ただただ、屋敷に残る者の無事を祈る者。

しかし、その火の手は。
もはやほどこしようもなく。

1階から出火した火は、ブラックとホワイトのいる最上階にまで、
その勢いを伸ばす。

もはやそこには絶望しかなく。

誰もが、その場にただ呆然と。
泣き、崩れる。

それは、ツバキとサクラとて例外ではなく。
メイドから事の次第を聞き、馬車を跳ばしてようやく屋敷についた、その時には。

誰が見ても、手遅れの状態だった。

そのあまりの火の手の勢いに、ただただ、呆然とその場に立ち尽くす。

ザバッ

その水音に、二人ははっと我に返る。
そして、振り向いたその先には・・・。

「・・・！？兄さ・・・ー？」

ポタポタと、水がその体を伝い、紅く染まる地面に黒く跡を残す。
スミレは、水を滴らせながら、フツとツバキとサクラに向かって微笑んだ。そして・・・。

「きやあああ・・・！？」

何も言わず、その業火の中に消えていった。

（続）

第25話 傷跡・6（後書き）

1ヶ月待たせてこれかい！…つーほど進展がなくてすいません…。
！！ああ…！…もうどこまでも読者様に頭が上がりません…。（平謝
り）…！…待たせすぎて本当に申し訳ないです…。まったく毎度
のこの反省が活かされていないという…。私の人となりがバレ
バレですよね…。うふふ…。

感謝企画への感想も、遅くなりましたがありがとうございました！
！楽しんでいただけたようで何よりです　またしたいです（頼むか
らその前に本編を進めてくれ）…！…あ、一つ。ノクターンやムーン
ライトは行つても法外なお金取られたりはしませんから大丈夫です
よ　年齢制限だけは守つてね　ムーンライトのほうが女性は入りや
すいかと…。宣伝しといてなんですが、そっちの更新も早くし
ろつて感じですね…。（墓穴）つ…。次で傷跡も佳境に入る予
定でっす…。!

第26話 傷跡・7（前書き）

いよいよブラックとホワイトの過去が明らかになつてきました。つか最近、どこまでもシリアス調に進んでんなあ・・・。・・・笑 ついの神よ・・・！・！つて、こんな話のどこに笑いを入れると・・・。
(笑)

「…………」「んん…………？…………つわあ…………！…………？」

寝苦しさと、息苦しさ、不審な物音を感じて、目を覚ます。その目の前に広がる情景に、ホワイトから一気に眠気が吹っ飛び。部屋の扉の隙間から、白い煙が立ち込めていく。いつたい、何事なのか、と。

最悪の事態を予想しながらも、そのドアノブに手をかける。

紅。

ただそこには、深紅が広がる。

この階まで火の子は届いていないものの、螺旋階段から見える階下は紅に染まつていて。

その煙が。

ホワイトの喉をつく。

「げほつ…………！」

ホワイトは震える手でドアを閉めると、ブラックを揺さぶり起こした。

「ブラ……！……ブラック！……起きて……！……」

その声に、ブラックは混沌としていた意識をそちらに向ける。「何やの…………？」

「大変なんだよ…………火事…………火事なんだ…………！」

半分、興奮と恐怖で泣き顔になつて。

「は・・・? けほ・・・! -! な・・煙・・・-?」

起きたばかりのブラックも、そのただならぬ雰囲気にパ一ックとなる。

「ど・・・どひじよひ・・・! -? 下はもう真っ赤なんや・・・! 降りられへん・・・! -!」

ぎゅっと、ブラックにしがみつくホワイト。

「そんな・・・! -? しないしたらええんよ・・・?」

そのホワイトの言葉と仕草に。

絶望を、感じ取る。

「・・・! のまま・・・焼け死ぬ、いつこと・・・?」

パチパチ

ゴオオオオオ

その扉の向こうで静かに、静かに迫り来る、音。

足がすくんで、動くこともままならない。

崩れるのが先か。

炎がこの部屋に届くのが先か。

絶望と恐怖だけが、二人を包む。

「い・・いやや・・・! -!」

「誰か・・誰か・・・! -!」

言葉にできない悲鳴が、響く。

おねがい　だれか　たすけて

ゴオオオ・・・バキバキッ・・・

ガタツ・・・ダン・・・・

「・・・?」

部屋が、その白い煙に侵食され、2人の意識が朦朧となり始めた頃。

階下から、不自然な音がし始めた。

そして。

バタン

「ブラック・・・! ホワイト・・・!」

その扉を開けて、入つて来たのは。

なによりも　いとしい　ひと

頭には濡れた布を被つているものの、顔も体も、ススで汚れ、怪我をして。所々火傷もしている。

その様相に。

迫り来る火の手のすごさが窺い知れる。

「スミレぇ・・・！」

スミレは2人のもとに駆け寄ると、ぎゅっと2人を抱きしめた。
「無事だつたんだね・・・！2人とも・・・！」

肩で息をするスミレに、2人は今だ続く恐怖と安心感に震え、涙する。

「大丈夫、絶対、助けるから」

なぜ、おかしいと思わなかつたのか。

後にして思えば、そう思う。

愛する人ができて。

愛する恋人ができる。

どうして。

ためらいもなく、あの業火の中に飛び込んだのか。

ブラックと、ホワイトのために？

それもあるだろう。

いや、どんな状況であつたとしても、あの兄なら、2人のために命をかけることなど造作もなかつただろう。

けれど。

けれど、あの笑みは。

「2人とも、ちょっと離れておくんだよ」

スミレはそうこうと、はめ込み式の窓に向かつて椅子を思い切り叩き付けた。

その窓は、悲惨な音を立てて暗闇に消えていく。人の通れるスペースができたソコからは、冷気が流れ込む。

「ツバキ!! サクラ・・・!!」

声は到底届かない。しかし、その落下物の元へ、2人が駆け寄つてくる。そして、兄の意を汲み取る。

もしかして、と用意していたのは、大きなマット。

それを窓の下に広げる。

「さあ・・・! ブラック、ホワイト、ここから飛び降りるんだ・・・！」

その様子を確認し、スミレが2人を促す。

「・・・ス、スミレは・・・!?」

「2人のあとからいくから。先にいきなさい」

いつものような笑み。

どこまでも人を安心させるような、笑み。

ブラックとホワイトは、じくりとうなづくと意を決して窓の外へと大きく跳んだ。

ドスンという衝撃に、目を開けるとそこにはツバキとサクラがいた。

まわりから、わあっと大きな歎声が上がる。

その様子に、ああ、助かつたんだな、と2人はいくぶんか安堵した。まだ体は小さく震えていたけれど……。

「兄さん……！」

ブラックとホワイトをマットから降ろすと、再び、その紅く染まる部屋を見上げる。

次はスミレだと。

誰もが思つた。

スミレは、静かに炎に包まれていった。

そして、まるでその瞬間を待っていたかのように、屋敷は大きな音を立てて崩れ始める。

十分、その炎から逃げられたはずだ。

スミレは。

わざと飛び降りなかつた。

「ス・・ミ・レ・・・・・？」

「や・・・・」

「スミレ　・・・・・・・・・・・・」

倒壊する建物に近づこうとするブラックとホワイトを羽交い絞め

にし、食い止めながら。

ツバキとサクラは、最期の兄の姿を見た。

目が、合つた。

やつと、君の所へいける・・・

ブラックとホワイトをよろしくね・・・ツバキ、サクラ・・・。

確かに、最期に兄はそう言つた。はつきりと、そう、言つたのだ。

“やつと キミのところへ いける”

「焼け跡からは、兄の死体が見つかりました。そして、後から調べてわかつたんですが・・・」

「兄が死ぬ3日前に、兄が本当に愛した恋人が他界していました・・・」

そこまで話すと、2人は口を閉ざした。

“スミレを殺した”

その真相は、スミレの自殺。

「・・・あの2人にそんな過去があつたなんて・・・」

眉を顰めて、リアンが小さくこぼす。

「火事で死人が出たことは知つていたがな・・・」

「そんな理由があつたから、俺たちにも詳しいことが降りてこなかつたんだろうな」

クイーンとガーデンも知らなかつた、と呟く。
マスターはすでに涙ぐんでいる。

「・・・ふ、2人とも、走るの早・・・！」

ハアハアと肩で息をしながらアリスがブラックとホワイトに次いで、その扉の前に到着する。相変わらず無駄に広い構造だ、とアリスは内心思う。

しかし、2人に追いついたものの。

ブラックとホワイトはその扉の前から動こうとしない。

わずかに開かれた扉。

微かに漏れてくる、室内の会話。

「?2人とも、どうし・・・」

「嘘や・・・」

その静寂を破るかのように、ブラックが小さく、しかしあつさりと、そう言葉にした。

「え・・・? ブラ・・・」

「嘘や・・・! スミレに・・・! 他に好きな人がおつたなんて・・・

! ! !

ブラックとホワイトは、そう叫ぶと反転し出口に向かって走つていぐ。

「え?・・・ええ・・・! ?」

今ここまで来たかと思ったら。

今度は外へ・・・?

もう、意味がわからない。

「ちょ・・・! ブラック! ! ホワイト! ! !」

アリスは大声で2人を呼ぶも、2人は振り向きもせずに屋敷から出て行つた。

1人残され、途方に暮れるアリスのもとに声を聞きつけてツバキたちが扉の方を向く。

そこには、残されたアリスがただ1人・・・。

「・・・ブラックと・・・ホワイト・・・は?」

掠れた声で、サクラが問う。

「え?いや・・・何か・・・嘘だ、とか何とか言って走つていっちやつたけ、ど・・・て、ええ・・・!?!?」

アリスが言い終わらないうちに、サクラとツバキも2人に負けないくらいのスピードで屋敷から飛び出して行った。

「・・・? ? な、何事・・・?」

その2人を、呆然と見送るアリス。

ゆっくりと、残された面々へ視線を移すと。

リアンは渋い顔をし、あちゃ～と頭を抱えている。その横では、マスターがどうしましょう、と半泣き状態でパニクっている。

「俺たちも追いかけたほうがいいな」

そう言って、静かにクイーンとガーデンが立ち上げる。

「・・・は?」

「ええ、このままだと・・・あの2人まで自殺しかねませんよ」

真剣な、裕馬の顔と台詞に。

状況を把握できないアリスも。

ただ事ではない、と感じるのであった。

（続）

第26話 傷跡・7（後書き）

いやあ、双子の恋の行方が気になるところですねえ、ソウくん。「いやあ、ぶっちゃけ、僕、興味ないですから」「ええ……!？」
そんなことより早く僕と裕馬さんを書けって話ですよ（こりこり）「ちよつとーー黒じょーーソウくん・・・!」「あはは、冗談ですよ（こりこり）」「どこまでが・・・?」さて、次の回では僕も大活躍な予定みなさんお楽しみにね「え!? そんな予定な・・・!」ソウにより、後書きは強制終了となりました

第27話 傷跡・8（前書き）

よ、みづせりと続きが出せました・・・いつも亀で本当に申し訳ございません・・・しかもまだ終わらない、双子シリーズ・・・！そして、双子シリーズだというのに、双子がないという（笑）では、お待たせいたしました！アリス続編、お楽しみください――

室内に響き渡つたのは、

先ほどまで、サクラとツバキのいた部屋に、今度はかわりにアリスがいた。とはいっても、さつきまでとは違い、クイーンもバーニーも、祐馬もガーデンもそこにはいない。正確には、リアンも。残ったマスターに、アリスは事の顛末を聞いていたのだが……。聞くだけ聞いて、この叫び。何だかんだでみんなパーティク、みた
いな。

「ですから、今、話した通りです・・・」

マスターはもう涙ぐんで、今にも泣き出しそうである。

「マスターまで弱気になつてどうするのさ……！大丈夫だよ！すぐに2人は見つかるよ……！バーチたちが見つけてくれる・・・絶対・・・！！」

マスターを泣かすことなかれ、をギャッヂフレーズで、この世界は回つております。とか、そんなことは置いておいて。アリスはスターの肩を掴んで励ました。

自分を。する。な。否。

ああ。

なんて。

なんて。

胸が苦しいんだろ？

あなたのことをおもいつ、なんて、むねがくるしこんだろ？

ブラックとホワイトは・・・。

いぐど あのえがおのしたで ないていたのだろうか。

バタン

「ハ・・ハ・・・！」

扉が勢いよく開き、入ってきたのは息を切らしたリアン。せりゅやら走つてきたりしい。

「い、今・・・トランプ兵に命令を・・・!出してきた・・・!」

「大丈夫！？ リアン！？」

珍しく、本氣で息も絶え絶えなリアンの元へアリスとマスターは駆け寄る。

「全力で走るなんてン年ぶりだよ・・・?ゼはつ・・・!」

「い、今冷たい飲み物持つて来ますね！」

気遣いのマスターはそう言つと、パタパタと奥へ駆けていく。リアンは力なくよろしく～と言つと、その広いソファにどかりと体を沈めた。

「はは・・・」んなリアンの姿、他に見れないね

苦笑しながら、アリスは言った。

「・・・こんなことでもないとねえ・・・」

それに、リアンも苦笑で返す。

クaine・ガーデン・バー・祐馬は、サクラやツバキが出て行った後ブラックとホワイトのいそうな場所を探しに手分けして出て行つた。アリス達は万一、2人が戻ってきた時のため・何か連絡のあつた時のために待機することとなつた。

でも、こうしていると、本当に痛感する。

ただ、待つてゐるだけの苛立ちを。

己の、無力を。

「・・・スミレさんはどうしてブラックたちがいるのに・・・他に恋人なんか作つたのかなあ・・・?」

アリスは、ぽつりとそう漏らした。

「・・・何も言わずに自分は死んで・・・それで満足?・・・残される人のことなんて、これっぽちも考えずに・・・それって、ひどいよね」

あんなにも、あんなにも。

ブラックとホワイトはスミレという人のことを想つていった。
かの人が死んでしまつてからも。

それは、見えない傷となつて、2人を縛る。

どうして?

どこから違つてきたの?

「・・・人の想いはさ、ビリでどうなるか、わからないと思つけどねえ・・・」

リアンの、優しい声。

「俺がクaineに恋に落ちたように・・・アリスがバーに恋に落

ちたよつて、スミレも、恋に落ちたんじゃないかなえ。他のもの、すべてを投げ出してもいいほどに、その身を投じてもいいほどに、その人を深く愛してしまったんじゃないのかねえ・・・」

きつとそれは、運命と呼べるような出会い。

「悩んで、悩んで・・・」

きつと。

「それでも、その人のことが、好きだったんだらうねえ・・・」

家を裏切つても。

幼い頃からの婚約者を裏切つても。

想い人は、死んでしまつても。

儚くも、強い、想い。

「俺やアリスだつて、すべてを捨てて、ここにいるんだ。それは、忘れちやいけないよ」

日々、気に病み続けることはない。

だけれど、覚えておかなければいけない。

自分たちは、すべてを捨てて、ここにいることを。大切なことに、無断で、ここに残つてこることを。

「・・・ごめん・・・」

「・・・いいや・・・」

静かに、リアンは呟いた。

「恋は、狂氣だねえ・・・」

どこまでも、人を狂わせる。

「う・・・ん？」

一方、こちらは「う」と。一人、この大混乱の中、爆睡していたマイペース少年・ソウ。ようやつと、起きてみました。

「・・・？誰もいない・・・？」

寝惚け眼であたりを見回すが、静まり返ったその部屋には自分以外の人間はないようだつた。

「えへ、みんな僕を置いてどこかいちやつたの～？」

「ふうと、一人平和に不貞腐れながらベッドから降りる。と、カシヤツと音がして、何かが床に落ちた。

「？口ケット・・・？」

どうやら、アリスがベッドに上げたものがまた落ちたようだ。ソウはゆっくりと、その口ケットの蓋を開いた。

そして。

「・・・これ・・・！」

ソウは、その口ケットを手に握り締めると、急いで階下へ向かつた。

その表情は、いつになく真剣なものだつた。

（続）

第27話 傷跡・8（後書き）

いかがでしたでしょうか・・・。話進んでませんね。すいません・・・。
「ああ。もうちょっと、こう一進む予定だったのにな・・・！」
いいです。というか、ソウくん、一人平和すぎだろ。いつまで寝
てるんだ・・・！まあ、これから活躍に期待ですねー何やら
走つてましたしね！ついわけで、今後の展開に期待！！（無理やり
まとめやがったな）次はもっと早く・・・！って、いつも言こすぎ
てて、信憑性にかけまくってるよ・・・！

第28話 傷跡・9（前書き）

人を愛するって、まさに狂気なのかもしませんね。とか言ってみたり。

第28話 傷跡・9

あなたがいれば他に何もいらない。
恋だけがすべてで。

愛だけがすべて。

ねえ、貴方の他には何もいらないの。

貴方がいる、それだけがすべて。

私の、すべて。

ああ。

恋は狂氣だ。

255

「バカ、みたいやなあ・・・」

沈黙を破ったのは、ブラックだつた。

2人は、ある場所に来ていた。そこは、ブラックとホワイトが初めてスミレに出会った場所。大きな、湖のほとり。暗い湖畔に、明るい月明かりだけが妖艶に笑む。両親に連れられて、自分たちはスミレと出会つた。

一目で、恋に落ちた。

この恋が、永遠に続くと、信じていた。

「何かの、3文小説みたいや・・・」

「しあわせ」と、ホワイトは髪をかき上げる。

「……わいら、何のために、ここにいるんやわ！」なあ……

貴方が助けてくれた命だつたから。

私たちは、今まで生きて来れました。

「ずーっと、信じとつたんになあ……誰よりも、信じとつたんに、なあ……」

このひかりところのないせかいへ、わたしたちまじめづけきました。

どちらからともなく、顔を合わせる。
対になる、その顔。

その瞳の奥の、深い、深い闇。

その頬を、涙が静かに伝う。

「……もう、疲れたわ……」

どちらともなく発したその声は、
凜と、静寂の中に響いた。

「ブラックさんとホワイトさんは……!?」

お前、今頃何言ってんの……?

冷静に心の中で突っ込んでみました。

ソウは、階下に着くと、広間の扉を開けるなり、そう叫んだ。

「……ソウ！？」

起きたんだ、とアリス。

広間は、緊張した雰囲気に包まれていた。

探しに出た面々は、方々を探し回ったが、2人の影はそこにはな

く。一度戻つてきていだ。地図を広げ、探し回つた場所にチエックを入れていく。

スミレの墓標。

焼けたブラックとホワイトの屋敷の跡地。

ブラックとホワイトが好んで行きそうな場所、等等。

「どこか、他に思い当たる場所は？」

クイーンが、サクラとツバキに問う。

問われても、2人は眉間に皺を寄せるだけだ。

「心当たりは・・・すべて・・・」

自分たちは、あの2人の何を見ていたんだろう。
こんな場面にあっても、2人の行きそうな場所を見つけることすら叶わないなんて。

あの2人から、ただ一人の影さえ・・・ぬぐつてやれないなんて・
・。

「湖畔・・・！湖は探しましたか！？」

アリスとマスターから、ここまで流れを簡単に聞いたソウは、少し考えてそう投げかけた。

「・・・湖・・・？」

「湖といえば・・・ここか？」

再び、みな視線が地図に落ちる。

スミレの墓標から、少し行った場所にある、小さな湖。

ガーデンが指すそこは・・・。

「・・・！そこは、うちの所有地だ・・・」
ツバキが、ハツとそうつぶやいた。

みんなの視線が、会わせる。

「行つて、みましよう・・・。」

ソウは、ペンドントを握り締めながら、強い瞳でそう言った。
（続）

第28話 傷跡・9（後書き）

最終話です！！！長かったなあ・・・つてまだ終わってねーよ。次話では、某キャラが恋愛感を熱く語る予定（何だそれは）
く小夜さん、メッセージありがとうございました。あて先がなかつたのでこんな場所から失礼致します。これからもアリスをよろしく
お願い致します！！カメのような更新ですが・・・！

第29話 傷跡・10（前書き）

この回は、とっても気合いを入れて臨みました・・・内容はちよ
つとグテグテなんじやあ・・・と思う部分もありますが・・・!
気合い入れないと、あの子に押されてしまつ・・・!と、いうわ
けで、本編へどうぞ!!

恋つて何？

そんなの、聞くだけ無駄だし、考えるだけ無駄。
本能で感じたままに、動けばいい。

それが、運命なのだから。

「もう俺は、この世界で何見ても驚かねえ・・・！」

「俺……、常識つて何か、わからなくなってきたな……。」
こんだけシリアスに進んでいる流れにそぐわぬ会話の主は。
アリス・リアン・祐馬。
なぜ、こんな会話になつたのかといふと。

「じゃあ、各自馬車に乗って湖まで行こう。

の、馬車だつたのです。もちろん、運転（？）はトランプ兵。つーか、動力は何ですか？何だか車輪の下から聞こえてくるこのうめき声みたいのは何ですか？？いやいや、恐ろしこじこにはフタをしきましょ。」

で、何だか。かぼちゃの馬車を見て、どうと疲れてしまつた裕馬とアリスだつたわけで。その反応が、あまりにも想像通りで、バカ受け、なリアンさん。

そんな中、珍しく。

静かにソウは裕馬の横に収まっていた。

「ソウ？ 大丈夫？ さつきから難しい顔してるけど。ブラックたちならきっと……」

そんなソウに、アリスが声をかけると。

「……僕は、怒ってるんです」

静かに、ソウは言った。

「ソ、ソウ……？」

その瞳には、確かに怒りがにじんでいた。

ほどなくして、一行はスマーレの墓標の近くにある湖に到着した。その周りを、全員が手分けして2人を探す。

その湖を見て、ソウは、ああ、ここだ、とつぶやいた。手中に握られる、ペンダント。それを、再び強く握り、ブラックとホワイトを探しに行くのだった。

「ブラック～！ ホワイト～！ ……」

静寂を破る、人の声。

声。

静寂を破る、音。

音。

ああ、世界は遠くて。うまくその音すら聞き取れない。

ああ。

ああ。

ぼくらのせかいは、よつやくおわる。

いろも、ひかりもない。

さほうもない、このせかい。

「…………ブラック…………ホワイト…………」

ああ、誰かの声がする。

声が、する。

お願いだから、そんなに強く抱きしめないで。
脆くて、脆くて、脆くて。

形がなくなりてしまつよ。

ああ、ああ。

この、頬を伝へ、熱いものは、何？

ねえ、

もつ、ねむらせて……。

眼前に、光が広がる。

「……」

瞬きを、何度もする。

体がだるい。そのだるさが、自分がまだ現世にいるのだと、痛感させる。

「・・・・！ブラック！！目が覚めた・・・・！？」

自分を覗き込む、アリスの顔。

ねえ、何でそんなに心配そうな顔をしているの？

「ブラック・・・・！」

続いて、自分を見る、見慣れた、サクラの顔。いつも無表情のその顔が、苦渋に歪んで。その後。泣くように、強く、抱きしめられた。

「ホワイト・・・・目を覚ましたのか・・・・！」

ふと、横を向くと。鏡に映したように。自分の半身も、強くかき抱かれていた。

「2人とも、もう少し発見が遅かつたら・・・死んでいたかもしけなかつたんですね・・・・間に合ひて・・・本当によかつた・・・！」

自分を抱く、その横からマスターが涙を流しながら、言つた。
自分たちを見つめる、多くの瞳。

「なんで、たすけたん？」

ぽつり、とこぼす。

「もつ、どうでもよかつたんに・・・。色も光もない、この世界におる理由は、もうないのに・・・」

世界は、終わった。

表情なくつぶやくブラックとホワイトに、誰もが困惑の表情を浮

かべる。

大きな、大きな、心の傷。
その深さを、田の当たりにする。
痛いほどの、悲痛な、叫びが。
部屋の中に広がる。

つかつかつか。

ビシャ。

「ちよつとは、頭、冷やしたらどうですか？」

ぼた、ぼた・・・。

「ソ・・・ソウ・・・!-?」

その悲痛な空間を引き裂くよう。

ソウは、2人の顔に思い切り水をひっかけると、持っていたコップを、サイドテーブルの上に音を立てて置いた。

「こんだけたくさんの人迷惑かけて、心配かけて。それでもまだ駄々こねるんですか？ガキじゃないんだから、いつまでも叶わなかつた初恋引きずるのはやめたらどうです？」

「ソ・・・ソウくん、ちよつと、も、そこらへんにイ～～」
さすがにリアンも、ソウのキレイぶりにマズイと思つたのか、口を挟む。

そして。

「ちよつと、黙つてくれださい」

一蹴、されました。

「は・・・ハイ・・・・」

「だいたい、あんたたちも！傷を見ないフリして愛語つて何になるんです。だからこのお二人がいつまでもバカみたいに死んだ人間の幻影を引きずらないといけないんでしょ？」

そう言つて、今度はサクラとツバキにダメだし。

「いつまでも傷物に触るみたいに接しないで！！乗り越えさせるためなら傷口だって抉ればいいんですよ！！」

「・・・！そんなこと、できるわけないだろ？・・・！」

サクラが、さすがに言い返す。

「傷口を抉つて、みんなに見てもらえばいいでしょう？そうしたら

「みんな、その傷の痛みに気付くんだから」

誰も気付かなかつた。

誰も知らなかつた。

2人の、大きな、大きな傷。

その傷は、体の奥深くを、確実に蝕み、侵食し。

こうなるまで、その深さに。

その深刻さに、誰も気付かなかつた。

「だいたい・・・！いつまでも居もしない人間のこと引きずるのはやめてください。不毛です」「

ずつぱり、ぱつさり。

「・・・さつきから黙つて聞いてれば何やの？ソウに何がわかるん？」

涙が、頬を伝う。

胸が、熱くなる。

大きな声で、ソウを睨みつけながら。

「わいらにひとつで、スミレがすべてやつたんや……！」

「だつた？今だつてすべてじやないですか」

「そいやー！スミレがすべてなんよ……！それの何がアカンのや……！」

・・・

「現実を見りつけて言つてるんですよ……どれだけスミレさんを想つても、スミレさんは生き返らないし」

やめて。

やめて。

そんなこと、いわんといて。

「スミレさんに、他の人を愛した事実は変わらないんですから」

ああ。

げんじつを、つきつけないで。

「ソウ……！いくらなんでも……！」

さすがに、見かねて裕馬が止めに入ろうとする。

「僕は、裕馬さんを心から愛しています」

は　　い　　？

ソウは、突然、裕馬を振り返り、そう言つた。

いつもとは違う、真剣な、真剣な表情。

「だから、裕馬さんを自分に振り向かせるためなら、どんな努力だつてします。だって、僕だけを見て、僕だけを愛して欲しいから」

ソウは、その時だけ、ふつと、優しく笑んだ。

「無償に愛されることが続くなんて、僕は思わない。恋愛は、『与えるものじゃない』でしょ？　相手がいて、その相手とするものなんだから」

ちくり、ヒ、その言葉が。

裕馬とアリスの心にも、小さなトゲとなつて刺さる。

「ブラックさんとホワイトさんは、本当にスマッシュさんと“恋愛”をしていましたですか？　気持ちだけが後から後から、大きくなっているだけじゃないですか？」

婚約、といつその言葉が、いつまでも、どこまでも、錯覚を、引き起します。

まるで。

そこには、愛があつたかのよう。

冷たい、ソウの視線が突き刺さる。

愛があつたか？

そんなこと。

あつたに決まっている。

それが稚拙と言われようと。

勘違いだと言われよつと。

あの時、あの瞬間。

スミレを愛していた。

その想いに、変わりはない。

「・・・わいらば、本当に、本当に・・・！スミレを愛しつた・・・！」

「その想いは、嘘やない・・・！」

とめどなく、とめどなく、その頬に、涙が伝う。

想いまで、否定しないで。

心まで、否定しないで。

痛いほどに、2人の叫びが。
その場に居る全員に伝わる。

「・・・だつたら、それでいいじゃないですか」

ソウの口調が、突然柔らかくなる。

「お一人は、スミレさんを本気で愛していた。だけど、スミレさんは、他に愛する人を見つけてしまった。お一人は、失恋したんですね。ただ、それだけです」

笑顔で、さらりと。

「で、まだその失恋相手のことが吹っ切れてないから、サクラさんとツバキさんの求婚には応えかねる、と。そういうわけですよね？」

「・・・え？ や、う、うん・・・・？」

何だか、虚をつかれ。ブラックとホワイトは、ぐじやぐじやの顔のまま、半ば放心。

「実際、お一人は、スミレさんから別れの言葉をきちんと聞けなかつたから、強くわだかまりが残つてしまつたんですよ。・・・お二人が傷つかないように、と思つた行動が、逆に、ブラックさんたちがスミレさんをふつくる機会をなくしてしまつていたんです。」

ソウは、言いながら、ポケットからペンダントを取り出した。

「それ・・・！」

アリスがあの時のーと声を出す。

「スミレの・・・」

スミレがいつもつけていた、ペンダント。形見に、譲り受けたもの。

ソウは、静かにそのペンドントのフタを開ける。ざつと、スミレの立体映像が現れる。

「ブラックさん、ホワイトさん、このペンドントに仕掛けがあるのを知っていましたか？」

「……し、かけ？」

初めて聞いた、とブラックとホワイトは顔を見合わせる。サクラとツバキも顔を見合わせて「ことから、きっとこの2人も知らなかつたのだろう。

「スミレさんは、きちんと、恋の決着をつけていたんですよ。お二人が、次の恋へ進めるよう」

ソウは、そう言つと、カチリ、と中蓋を開け、中の歯車の一箇所を押した。

ざあっといつ音とともに、映像が変わる。

そこは、さきほど湖だった。その湖畔を背に、スミレがいつも優しい笑みで佇む。

ただ、その笑みは。

どこか、寂しそうな、悲しそうな、表情をしていた。

『親愛なる、ブラック、ホワイト』

その立体映像の中のスミレが、言葉を紡いでいく。

「……」

「どうやら、ここにいる他のメンツも、見るのは初めてのようだつた。

『この映像を君たちが見る時は、僕はもう、この世にはいないかもしないね。

僕は、ちゃんと君たちにお別れが言えたかな？
もし、何らかの理由で伝えられなかつた時のために、これを残します。

ブラック、ホワイト。僕は、本当に君たちのことが好きだつたし、愛していたよ

ただ、それは・・・恋愛感情ではなかつたんだ・・・。

ただただ、無邪気な君たちが、弟のように可愛くて。

好きな人が、できたんだ。

愛する人が、できたんだ・・・。

君たちに對する感情とは、まったく違う感情で、僕はその人に惹かれた。

僕は、その人のことを、愛してしまつたんだ

だから、『ごめんね。

もう、ブラックとホワイトの、婚約者ではいられない。

と言つても、まだ僕の片思いなんだけれどね・・・。

君たちとの関係をきちんと終わらせてから、想いを伝えにこいつと思つんだ』

柔らかい、微笑。

本当に、その映像からでもわかる、相手への深い・深い、愛情。

『ひどいことをして、ごめんね。

それでも、自分のこの想いは、変えれないんだ・・・。

都合のいいことを、と思うかもしれないけれど・・・。

これだけは、信じていて。

ブラックとホワイトに何かあつたら、僕はこの身を投げてでも、

助けにいくから。

僕にとって、2人は大切な、大切な存在なんだ。

恋愛は、できなかつたけど。

勝手なことばかり言つてごめんね。

これから、君たちの人生が、幸多きものでありますように・・・

』

そこで、映像は止まった。

ブラックとホワイトは、映像を数分間、見つめ続けた後。堰をきつたように、大声で泣き始めた。

ああ、どうか。

カミサマ。

僕の愛したあの、愛くるしい子達の、未来が、明るく幸せでありますように。

ああ、どうぞ。

カミサマ。

あの子達を、本当に愛してくれる人が、現れますように。

傲慢かもしれないけれど。

僕が言える義理ではないかもしれないけれど。

どうか。
どうか。

あの子達が、いつも笑顔でいれますように。

どうか。

どうか。

カミサマ。

{ 続 }

第29話 傷跡・10（後書き）

わつとーわつとーーーーーーーまでたどり着きましたーーーーーーー、このお話も完結ですね！キーマンはソウくんでした。熱く語るソウを動かすのがおもしろくておもしろくて・・・！いやー、次の伏線もきつちり張つてくれるところがソウくんらしいですね！失恋や人の死を乗り越えるって、本当、時間もかかるし、大変なことなんだと思います。でも、乗り越えるには、やっぱりキッカケが必要だとと思うのですよ。抉るくらいにガツーンとね。ここまで引きずつてしまつやすったら。と、勝手に思つてみたり（汗）ちょっと一部、表現を曖昧なことさせていただきましたが、あしからず。

第30話 傷跡・11（前書き）

気付けば30話・・・（実質31）！？ええ！！？もうそんなに
なるの！？な、長いなあ・・・。ドキドキ。ま、まだ続けても大丈
夫なんですかね？これ・・・。そんな一抹の不安に駆られながら。
傷跡、最終話でござります！！

第30話 傷跡・11

「…………しそうりへふりの、殺意だ……」

クイーンは、うなづいたよつて言った。

眼前には。

「あ～～……アリスト……アーヴィング、わいが食べようと思った
んにーー！」

「え？ もうたべひやつひや

「い・ま、まさに食いつた～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「落ち着いてください。2人とも。じつにもありますから

「ぱく

「…………ああああああ～～～～～！

「ソウ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

和やか、を通り越して。

うるさい食卓。

よく晴れた、ランチタイム。

まるで、昨日の出来事が嘘のよつて、温かい、温かい時間が流れ
る。

つーか。

「何で、マスターが取ってくれたんをお前が食べるんじゃーーー！

！」

「わいの・・・-わこの『アダム』!」

温かいっつーか、ウザイ。

そんな双子に。

今回、大・活躍な、恋愛のペテン sh・・嘘です。うつかり口が滑りました。偉大な恋愛の教祖、ソウ様は。

「・・・僕が食べちゃ、いけないって言うんですか?」

これでもかつてほどの笑顔でのたもうた。

ル・ル・ル

周りの人間は、知らず、笑みを浮かべるのだった。

誰も知らなかつた、双子の心の傷。
ずっと、ずっと抱えていた、叶わぬ想い。

秘めて、秘めて。

崩れ落ちそうになるまで。

その二人に、今まで、笑顔が戻っている。

へるへると、変わらぬ表情が。

・・・口をえ開かなければ、國へゆし。

傷ついて。
傷ついて。
傷つけて。
傷つけられて。

みづちやぐ、大声で泣くことができた。
よづやぐ、想いを口にすることができた。

みづちやぐ。

前を向くことができた。

よづやぐ。

あなたのじとを。

笑顔で思に出来事になつた。

それは、本郷に奇跡のような出来事で・・・。

「今日は、本郷に迷惑をおかけしました」
「ありがとうございました」

楽しくも、にぎやかな昼食会も終わり。

ツバキとサクラ、ブラックとホワイトはクイーン邸を後にするこ

とにした。今から、スミレのお墓参りにいくところ。

今まで、行くことができなかつた、スミレの墓標に。花を手向け

」。

クイーン、バーー、ガーデン、祐馬を前に、ツバキとサクラは深

々と頭を下げ、挨拶をしている。

「で？これからどうすんの？」

その斜め後方で。ブラックとホワイトに、リアンが問いかける。

どうする、とは、きっと婚約のことだろう。

「そやなあ。今んところは、何も考えてへんわ

「ん。吹っ切れたばっかりやからなあ」

問われて、二人は、苦笑しながら答える。

今までとは、どこか違う、二人の笑顔。わだかまりのなくなつた、

いい表情をしている。

「何がきつかけかもわかれへんし？」

はは、とブラックが笑う。

「そうですよ」

マスターも、嬉しそうに笑顔で返す。

「まだまだ、これからですよ！田指せ！いい恋！…ですかうね！…」

前回に引き続き、熱く語るは、ソウくん。

そこに、笑い声が広がる。

ああ。
ああ。

何で、幸せなんだろうか。

「じゃあ、一人とも気をつけてね！」

アリスも笑顔で見送る。

「まだ無理しちゃいけませんよー！」

マスターは少し心配顔で。

「ソウさん」

マスターとアリスが双子と話している横のソウに、ツバキとサクラがそつと近寄る。

「はい？」

相変わらず、無表情なその顔。しかし、どこか雰囲気が柔らかくなつたように思つ。

「・・・ありがとうございます」

深々と、頭を下げる。

「・・・どういたしまして」

一通りの挨拶をすまし、4人は屋敷を去つていった。

長い、長い時間がようやく終わる。

それぞれのカップブルも、クイーン邸をあとにするのだった。

「あの4人、どうなるのかなあ・・・」

「どうかな」

アリストドバーは、気持ちのいい風を感じながら帰路についていた。

前を向いて、ゆっくりと歩く。

「・・・愛とか、恋とかって・・・難しいね」

アリスは、小さく言つた。

自分は、何も考えていなかつた。

ソウみみたいに考えたことなんて、なかつた。

ただ、与えられているだけだつた。

「・・・アリスは、今までいいんだよ」

歩を止めて、バーーは、アリスを見据えてそう言った。

「・・・え？」

「僕はアリスから、十分、愛をもらってるから」

優しい、笑顔。

ふふつと、子供のように笑む。

「・・・お、俺も・・・バーーから・・・じゅ、ぶん、もらってる・
・から」

バーーのその笑顔に。アリスは真っ赤になつて答える。

語尾が、震える。

涙が、こぼれた。

「・・・あ？れ・・・？」

涙が、ポロポロと頬を伝づ。

「ど、してかな・・・え？え？」

涙をぬぐいながら、アリスは自分の涙の意味が分からず、困惑する。

「アリス」

そのアリスを、バーーが優しく抱きしめる。

「・・・！」

「アリス」

優しい声が、耳から、全身を駆け巡る。

ああ。

ああ。

「・・・バニー・・・」
しつかりと、その背にしがみつく。

愛おしい人が、手の中にいるといいことが。
こんなにも、こんなにも・・・。

「俺つて・・・幸せ者だったんだな・・・」

幸せなのだと。

「・・・・・」

そのアリスの笑顔に。

「・・・僕もだよ

バニーは、アリスの唇にキスを落とした。

2人は、しばらく静かに時を過ごして。

再び、歩き始めた。自分たちの、屋敷に向かつて。その手は、かたく、かたくつながれていた。

（傷跡・完）

第30話 傷跡・11（後書き）

長かった双子話がようやく終わつた～～～！！終わった今でも、ブラックの相手がどっちで、ホワイトの相手がどっちだつたかをきちんと把握していない最低物書きもえにござります。今回はちょっとラブい雰囲気で。アリストたちの進展も図りたいし、ちょっと、今回いい男？っぷりを発揮したソウくんとの話も進めていかないとですね。いつそのこと、ダブルデートでもしやがれ！！（投げやり）あ、もう一つお知らせを。たいへん、遅くなりましたが、番外編の続きをアップしましたので、首をながくして、文句も言わずに待つていてくださいました方々、どうぞ、みてやつてください！！評価やメッセージも、またお願ひいたします！！では、次はどんなアリストワールドを開拓しようかな～

第31話 秘密の花園・1（前書き）

ようやく…戻つてきました…アリス&祐馬コンビ…・・・で、あれ？何か違うって？とりあえず。電波的な初回です（笑）

第31話 秘密の花園・1

「じゃ、気をつけて行っておいでよ~」

「いやかな、リアンの見送りを後に。
その可愛らしくもファンシーな。

秘密の花園？的な扉を開いて、一步踏み入ったそこは。

ジャングルでした。

完。

「つて！危うく話終わりかけたつつの・・・！」

「おお～い！久しぶりに初っ端から出張つてんだぜー～！こんなと
こで終われるか・・・！」

そう、たとえ。

電波少年的扱いを受けたとしても。

そう。

今回のお話の主人公は。
最近とんと脇役に押され、影の薄くなっていた。

この話の主人公、アリストくんと。

その御学友、もとい悪友の祐馬くん。

さてさて。そろそろ、主人公とその悪友というポジションを読者
様に思い出してもらわねば・・・と意気込んでの御登場が、これ。

この小説の作者の質が知れるって話ですね。

まあ、そんな話は置いておいて。
時間をちょっと、遡って。

「「あいさつ？」」
「そーあいさつー！」

この日、朝早くリアンに呼び出された2人が訪れたのはガーデンの管理する庭の、最奥にある高い塀に囲まれた花園の入り口だった。ここは普段、扉に施錠がしてあり勝手に入ることはできない仕組みになっている。アリスと祐馬も、ここにだけは勝手に入ること、ガーデンから強く言われていた。

その、花園に。

リアンは今から入れと言つ。

しかも、だ。

あいさつをして來い、と言つた。

「あいさつって、誰に？」

当然のごとくの質問を、アリスはリアンにした。

「行つたらわかるよ。ここには彼女たちしかいないから」
にこにこと。

リアンはいつもの飄々とした体である。

質問を無視して、さつさと自分の作業を進める。

かちやりと、扉の開ぐ音。

「彼女たちって……？」

「ここって、男しかいないんじやないんスか？」

そんな、少年たちの素朴な疑問も、リアンさんのマイペースという言葉の前には塵を通り越して、「ハハセーーー！」

「いいから 行つてこーーーい！ー！」

どん。

がちやん。

扉から中へ突き入れて。

再び、施錠。

こうして。行き先も。
目的も。
すべてが曖昧なままで。

花園とは名ばかりの。

ここって、花園じゃなくて密林つすよね？的な場所へと、投げ出されたのであつた……。

「・・・ちょ・・・！？」
「rianさん～～～・・・！？」

たまの登場で、この仕打ちかい～～！～と、2人は厚い扉に向こうに向かつて。

若さで叫ぶのであつた。

「あらあら、おしろい。客人が入ってきたよ」
「まあまあ、本当ですわね。ベにおお姉様」
「今回の依頼人は誰だつたかねえ？」
「rianだつたと思いますわ」
「rian？あそこのは数年前に受けたばかりじゃなかつたかしら？」

「何でも、もう成人して婚約者を迎えた、とか」

「あらあら、もうかい？ さすが、外来種が入ると違ひねえ。じゃあ、

今回はその婚約者が来るのかい？」

「みたいですね」

「じゃあ、もう1人の子は？」

「さあ・・・・？ リアンからの手紙には何も書かれていなかつたけれど・・・。あら、お姉様。リアンからの封筒の中に、もう一枚。封筒が入つていましてよ」

「おやおや、おしおいは相変わらずあわてんぼうだね。どれどれ、見せて」「うん」

クスクスクス。

ふふふふふ。

悩ましい声が響く。

むせ返るような、甘い、香り。

「・・・すつづー・・・匂いだ・・・」

アリスと祐馬は、扉から入つてもう30分くらい道なき道を歩いていた。そこはまさに、手入れのされていない庭。否。やっぱ密林。という表現がぴったりくるような場所で。

生い茂る草木を焼き分け。

伸びたツルを焼き分け。

それでもなぜか。

導かれるように。

足は止まることなく。

奥へ、奥へと進んで行った。

「つーか、あいさつついでいつたい、誰にすんだらうな?」

祐馬は、ふと、アリスに向かつて言つ。

横を歩くアリスは、絡まるツタを乱暴にむしりながら。「何のあいさつかもよくわからないよなあ

はてなマークを飛ばしている。

「リアンさんは彼女たち、って言つてたけどな」「可愛い女の子か?はたまた魅惑のお姉様系か?にやけながら期待する祐馬に。

アリスは。

「大丈夫だ、祐馬、これだけは言える」

今度は進路を遮る樹木をなぎ倒しながら。

「リアンの発言だけはあてになんない。きっと、かぼちゃ級の驚きが待ってる」

真剣な目をして。

人の夢を打ち碎かないでください。

つーか。

まだ根に持つてたのか。かぼちゃ。

「あら~、人をかぼちゃ呼ばわりするなんてひどいぼつやだ」と
「馬車と同レベルで語らないでほしいですわ」

頭上から、女の声がした。

そう思つて、大木を振り返り。

アリスと祐馬が目にしたのは。

「・・・・・!?!?」

たしかに。

かぼちゃ級の驚きだったかもしれない。

いや、2・8倍くらい驚き増しだったかな・・・。

「私はべこお

厚い唇に、けだるそうな瞳。やるくウエーブのかかった肩までの
髪。ふくよかな胸。その脣には、キセルのようなモノが銜えられて
いる。

「私はおじい

同じく厚い唇にぱっちりの一重。こちらは黒のロングでストレー
トの髪が、何とも愛らしく。そして、こちらも。ふくよかな、胸。

で、何が問題かと言いますと。

ベにおは赤の。

おじいこね白の。

それぞれ、椿のような花の花弁から。上半身を覗かせていたのだ
つた。

そう、彼女たち、は。

「「私たちほ、」」の花園の番人よ」

上半身が人で、下半身が花、という何とも奇怪な生き物であった
のだ。

「 ようじや。まつやたち 」

アリスと祐馬は。

無性に帰りたくなつたのだった・・・。

（ 続 ）

第31話 秘密の花園・1（後書き）

前作がシリアルだつたから、無茶苦茶この話書くの楽しかったです！－んも、馬鹿なノリ最高ですね！－って誰に同意求めてんだ。私は。もっとアリスと祐馬の悪友＆親友的な会話も出したいですね。ちょっと楽しみなこのシリーズ そういえば、評価への返信機能ができましたので、今更ではありますが。アリスへの評価へ返信させていただいてます（笑）よろしかったら更に返信を。エンドレスで返信しあいましょう（笑）も一つ。アリスの番外編、クイーン×リアンをノクターん（ムーンライト）で書かせていただいておりましたが、無事完結いたしましたので。そんな性描写のキツイものではないとは思いますが、18歳以上の方で、サイト内容が大丈夫だという方はそちらも読んでみてくださいね～。短編になるとおりあります！ではでは、続きをお楽しみに～！！

第32話 秘密の花園・2（前書き）

書いていくうちに、そのキャラの内面を改めて知ることがよくあります。あらかじめこうしよう！と考えているわけじゃなくて（それもどうだ）流れのままにというか。まあ、大筋はきめてかかるのですが。rianも、まさかあんな内面になるとは思つていませんでしたが。何か、このシリーズでも、この子たちの新たな内面を再発見しそうな予感でいっぱいです。ではでは、遅くなりました。新シリーズ第2弾へゴウ

人生、いろいろ。
つーかね。そういうことを思つてね、もう少し歳いつてからで
もいいと思うわけよ。

じつちはや、若い身空なわけよ?えつと、公式設定いくつだっけ
?俺ら。

15か16あたりじゃねえ?

そんなさ~、わっかい俺らはさ。や、あれですよ。
処理能力?つてのに限界があるわけよ。

わかる?

限界。

そりゃあさ、こんな世界じゃん?何でもありだろつて。
シンクロしたアリスに呼ばれて。

何となくノリでじつちに残つたのは俺ですけどね?

その時に、まあ、それもまた、運命じゃん。とか軽く思つたわけ
よ。

どーにかかるじゃん?つて一か。なるよつにしかならないつづ
か。

でもや。

結局のどい。

覚悟がさ、違うんだって。

俺は、この世界に残つたことを。
少し、後悔し始めてるのかもしねない。

「で？名前は何て言うんだい？」

麗らかなお田様の元。
ジャングルの中で。

正座で、よくわからない生き物を前にして半分放心状態です。ハイ。

「さ、佐久間アリスです・・・」

とりあえず。

質問にのみ答えるくらいしか。
脳の処理能力があつつきません。

「瀬戸、祐馬っす」

どうやら隣の悪友も右に同じくんな様子だ。

「フー・・・」

名前を聞き終わると、べたおは口から煙を吐き出す。
むせ返るような、甘い花の香り。
何だか、匂いに悪酔いしそうで。

「30点」

どーん。

「・・・え？」

ゆうに10秒くらい置いて。アリスはようやくそれだけ発した。
「まったく、つまんない子たちだねえ。リアンなんて私たちを見た
瞬間にやあ、綺麗なお姉様方だこと。来たかいがあつたねえ。何
て言ってのけたんだよ？それくらいの順応力がないとねえ」

それは、あの方だから言える（できる）ことだぞ」といいます。

かの人を思い、アリスと祐馬は心中で大きくハモッた。

「だいたい、貴方たち、ここに何をしに来たかわかっているの？」
その綺麗な顔を嘲笑に歪め、おしゃりいが問う。

「いや、まつたく」

「・・・そんなところでハモんなくていいんだよ」

呆れたようにべにおが言ひ。

「や～だ。これだから外来種は」

小ばかにしたようなおしゃりいの笑い声が、耳をつく。

ああ。

さつきから。

どうも気分が悪い。

「ここはこの世界の中心」

「私たちはこの世界の創造の源」

「私たちはすべての母」

「私たちはすべての愛の根源」

ぐいぐい、する。

「ど、どう」とすか？

ああ、ちつとも頭が働かない。

「私たちはね、両性具有なんだよ。この世界で唯一のね。すべての生命は私たちの作る種から生まれるんだよ」

だから、男しかいないこの世界でも子供ができる。

「その代わり、代償に愛をもらうの。私たちは

「子を授けるかどうかを決めるのも、その愛が本物かどうか判断するのも、私たちの仕事なんだよ」
ぐすくすくす

「ふふふふふ

「私たちのおめがねに叶わなきや、この世界じゃ子供は生めないのさ」

「愛を語る資格すら、ないわよ」

何だか。

ちゅう厄介な物と遭遇してしまった感バリバリなんですけど。

「ああ、『まつやたちの愛を見せてもらおうかね?』

その言葉を合図に。

辺りにぶわっと花粉が舞う。

「・・・・・?うつわ・・・・・」

「わあ・・・・・」

嗅覚が麻痺するくらいの、甘ったるい香り。

視覚を遮る、花粉の粒子のオーロラ。

遠くで、べにょとおじろいの笑う声が響く。

2人の意識は、そこで途切れた。

「・・・どう思こます？べにおお姉様」
おしりこは楽しそうにべにおを見上げる。
「そうさねえ。何にしても久しぶりのお客だ。楽しませてもうおつ
じやないの」

くすくすくす

うふふふふふ

ああ。

何て世界だよ。本当。
かぼちゃ、花人間ときて今度は花粉による襲撃か。
まったく、どこまでも人の常識を覆しやがる。

あいつもそうだ。

あいつも、俺の常識を打ち破ってくれる。

ソウ。

お前は俺を愛していふと言つたれど。

俺は、じうやう。

お前のことが、嫌いみたいなんだ。

うふふふ

くす

くすくす

継
ぐ

第32話 秘密の花園・2（後書き）

いやだわ・・・。この後、どう収集をつけるか（聞くな）気になる所で終わりましたね！先にスポットが当たったのは祐馬くんでした～～！！アリスは・・・？？？という突っ込みには平に謝らせていただきます。何かね、ソウと祐馬の続きが気になる、という意見をいくつかいたいので（言い訳）。意見と言えば。リアンさんが人気です（笑）あのしゃべり方がいいらしいです。ファンクラブに入ってくれている方もいますしね ゆんちさん（笑）きちんと会員登録済み（笑）ではでは、今後のソウと祐馬の展開に御期待を～

第33話 秘密の花園・3（前書き）

ああ・・・。書いても書いてもしつくりこぼ、ようやく続きが書けました。この2人、何気に難しい・・・。この2人の恋の行方はどうなるわけ！？（お前がそんなんでどうする）

第33話 秘密の花園・3

愛していると、祐馬は言つ。

最初の恋人は、中学校時代の同級生。ちよつとおませなその子とは、キスまでした。

初めてのお相手は、塾の講師の女の先生。しばらく、関係は続いたけれど、高校進学と同時に、バイバイになつた。

高校に入つてからも、何人かと付き合つた。

することとはとつべにすませたし。

女に不自由を感じたこともない。

でも、恋愛はめんどくさい。
本当に、めんどくさい。

構わないとスネるし、好きと言わないじゴネるし。
電話やメールもはつきり言つてめんどくさい。
もちろん、付き合い始めたら、義務的に欠かしたことはないけれど。

「祐馬さん、好きです」

「アイツも、他の女たちみたいに、そいつ。
俺は、苦笑する。

「祐馬さん、愛します」

俺は、男だぜ?
何で、惚れられる?
しかも。
自分よりもタッパもあって、がっちりしたような男。
俺には、信じられないね。

「祐馬さん」

まとわづついてくるその腕は。
女みたいに細くて。

全開の笑顔は、女みたいに愛らしくて。

でも。

最近、頭の片隅に、冷静な自分がいて。
そいつが。

言つんだ。

反吐がでそつだつて。

「祐馬さん」

「か、わいらしく笑いながら・・・・・！」

「人を襲うな～～～・・・・・！」

ソファでうとうとしていたら。

いつの間にか、眼前にソウくんのお顔。つーか、人の腰に乗るな・・・・・！

「やだ、祐馬さんって可愛い〜」

ちゅっちゅっと、ソウは祐馬の顔にキスを落とす。

「ああ〜〜〜〜〜〜やめろ・・・・・ソウ・・・・・！」

いつもの、じやれ合い。

祐馬が嫌がると、ソウはいつも、えへ、と言いながら身を引いた。

だが、今日は違った。

ソウは、おかまいなしに祐馬のシャツの裾から手を入れてきた。

「！？・・・やめろ・・・！？」

祐馬は、びくりとして、ソウを引き離す。

その、ソウの表情は。

「・・・ソウ・・・？」

「・・・貴方は、ヒドイ人ですね」

「・・・」

「貴方は、アリスさんを恋愛感情でみてはいなけれど・・・」

当たり前だ。

ガキの頃から知ってる相手に。

しかも男に、恋愛感情もクソもあるか。

「僕にも、恋愛感情はないでしょ、う？」

それは、禁句。

きっと、ソウの中で禁句だったに違いない。

愛していると、君は言つ。

好きだと、君は言つ。

だけど。

祐馬はそれに応えたことはない。
いつだって。

決まりのようご、ソウがその言葉を言つて。
祐馬が流してきた。

気付いてはいけない。
口にしてはいけない。

だつてその瞬間。

この関係は終わるから。

祐馬は、何も応えられなかつた。

「・・・祐馬さんは、戻れなくなつて、一いちらに残つただけですもんね」

ソウが、その一言を口にした。

その時。

世界の終わる、音がした。

「そういえば、ソウは？」

ここは、アリストバニーの屋敷。

いいお天氣の中。バニーとリアンが、テラスでコーヒーを飲んでいる。

どこか、バニーは落ち着かない様子だ。

リアンはとすると、2人を花園に押し入れた後、息子であるバニーの元へ来ていたのだった。2人を花園へ連れて行くことは、数日前に言つてある。

もちろん、ソウにも。花園へ案内した後は、バニーの屋敷で、帰りを待つ予定になつっていたのだが。

「・・・それがねえ。昨日、うちに来て一度実家に帰つてくるつて

言つてたんだけどさあ・・・

クッキーを頬張りながら、リアン。

「何だか、ちょっと様子がおかしかったんだよねえ・・・」

「・・・ソウガ?」

「祐馬くんと何かあつたのかね?」

「・・・ケンカとかってことか?」

その台詞に、リアンは噴出す。

「あはは。そりやないでしょー!」

「何でだよ・・・」

その反応に、ムスッとバーが返す。

「あの2人は、ケンカするような関係ではないからだよ

リアンはそう言つと、『ヒーヒー』のおかわりを注ぐ。

「・・・はあ?」

バーは、眉根を寄せ、理解できないと言つたふつだ。

「だつてあの2人は、始まつてもいないじゃないかい

リアンは、楽しそうに微笑を浮かべ、そう言つた。

嵐の、予感。

(続)

第33話 秘密の花園・3（後書き）

リアン投入にてどうにか収集をつけてみたけど、あまり収集がついていない気もする。つーか、どこまでも暗くなりそうな予感がするのは私だけ・・・！？あれ！？一番、何かノリにノッてそうなカツブルだつたのに！？あれ～？まあ、そんなこともあるか・・・しかし、何だかんだで時間が空いてしまつて申し訳ないです。更新を早くするという今年の目標が早くも崩れそうです（オイ）。最近、おススメ小説の所に、名前があがつているのを見つけたのですが・・・・BLですけど大丈夫なんですか～～～！！とパソの前で突っ込んでいる小心者は私です。でも、これも皆様の暖かい応援のおかげですね・・・！？ありがとうございます！これからも頑張ります！（いつも言つてんな・・・）

第34話 秘密の花園・4（前書き）

少し間があいてしまって申し訳ないです・・・！学習能力欠如しているとしか思えん・・・（笑えない）！ではでは、続きへどうぞ・・・！

俺は、ソウのことが嫌いだ。

男だから？

それもあるかもしねない。

だって、ありえないだろ？

そんなことが、他人じゃなくて、自分の身に起こるなんて。

なぜ？」ではそれが自然の摂理なのに？

自分の常識や観念にあわないから？

それじゃあ、あの子の気持ちはどうなるんだい？

お前は。

なぜここに残つたんだい？

・・・・。

もう、戻れなかつたから・・・。

・・・お前は、ここにいる資格はないようだね。
お帰り。

私たちの可愛い子供を。

アンタにはやれないよ。

戻りたいのなら、私が戻してやるよ。

「・・・は？」

ぱっと、目を開く。

花粉で麻痺していた五感が、働きを取り戻す。

そして。

「祐馬ー！」

「こひは。」

「・・・は、はは？」

「遅刻するわよー。さつさと起きなやこー。」

聞き覚えのある、声。

見覚えのある、風景。

そこは。

自分が育ってきた。

「・・・マジで・・・?」

家だった。

久しぶりに学校へ行つた。
みんな変わらなかつた。

普通に、時が過ぎる。

変わらない、時が過ぎる。

あれは、夢?

ここにある感触は本物で。
ああ。やせと。

常識が、戻ってきた。

ただ一つ違うことは。
あの悪友の姿が。
ここにはなことじだつた。

俺はどうやら本当に。
この世界に戻つてきたらしい。

(続)

第34話 秘密の花園・4（後書き）

今回、短めです。ちょっとキリのいいところで。つーか、帰ってきました祐馬くん。つーか、追い出された？

第35話 秘密の花園・5（前書き）

離れ離れになってしまったソウと祐馬。お互に何を想つのか・・・とか、シリアス調に前書き書いてみたりして（そして、この時点
でブチ壊し）

「祐馬～、女の子が呼んでる～！」

「お～」

「また祐馬かよ・・・！？」

「瀬戸モテすぎ～～～～～～～」

「お～い、ソイツは悪い奴だぞ～～～！」

「お前ら、うるせえよ・・・」

祐馬は、後ろで飛ぶ野次に苦笑しながら、校門で待つ女の子の元へ駆け寄る。

この制服は。

隣の女子高の制服か。

「忙しいとこさ、『メンね

髪は肩までで、ちょっと茶色がかつたるかな。

目はぱっちりしてて、ちょっと、恥ずかしそうに俯く姿が何とも愛らしい。

「や、かまわないけど」

男子校に、一人で来るのはそつとう氣がいったことだらう。

明るい声は出してはいるが。

肩が微かに震えている。

「あ、の。陸上の大会で、瀬戸くんをみて……それから、ずっと。
・・瀬戸くんのことが、好き、で」

「もし、よかつたら、……付合つてくれない?」

「……せ、ぜ、れだよな」

「え?」

「あ、いやいや。いこよ。俺、今フリーだし? 可愛い彼女が欲しかったんだ」

嬉しそうに泣き出す女の子。

そうだよ。

俺が求めてたのは、これなんだって。

女の子との、恋愛。

だつて、アイツは男じゃん? どんなに田がぱしつして、どんなに可愛い顔で笑つたって。

だつて。

だつて。

だつて。

覚悟なんてない。
覚悟なんて。
ないんだ。

ないんだ。

その日、俺は。
アリスの存在の残る物を。すべて片付けた。

「ソウ、一緒にお茶でもどう?」
眩しい木漏れ日の中。
大きな木の下で、ソウはうとうとしていた。
昔からの、お気に入りの場所。

「・・・かあさま・・・」

「向こうでの生活はどうだったの?」

「楽しいですよ。みなさん良くしてくださるし」

にこにこと、アリスさんが、リアン様が、バー様が・・・とソ

ウは向こうでの生活を語る。

そのソウの言葉に、丁寧に相槌を返す。
ソウにかあさま、と呼ばれるその人は、

ソウにそつくりの容姿をしていた。

ソウの、こちらの世界でいう母親。

似ているが、醸し出す雰囲気はどこか優しく、そしてどこか強い

⋮

「…かあれめ…」

ソウは、それまでの明るい声とは違った、小さな小さな声で。

「僕は…裕馬さんにとって何だったのかなあ…」

ソウは、俯いたまま。

言葉をつむぐ。

「どんな人に好きになつても…・・・黙黙なことつてあるんですね・

・・

貴方が好きです。

貴方が好きですが、好きです。

ねえ。
ねえ。

聞こえてますか？

届いて、いますか？

「ソウ・・・」

「・・・祐馬さんにとつて、僕は・・・

「何だつたんだろうなあ・・・

ソウの肩が微かに震える。
そして、ぽつぽつと。

固く握られた拳の上に墨が落ちる。

「祐馬くん」

「祐馬くん」

可愛い匂からつむがれる、自分の名前。
それなのに。

心はひとつとも動かない。

ひとつでも、可愛いくとは思ひ。

女の子特有の華奢な肩。

(そういえば、アイツも華奢な方だつたな)
シャンプーの香り。

(いい香りがいつもしてたのは、何の香りだつたんだひつ)
くつくつとおおきな目。厚い匂。せりせりな髪。

何で。
何で。

アイツを重ねてしまつんだ。
何で。

アイツを重ねてしまつんだ。

「祐馬くん?」

「…あ、いや」

彼女と一緒にいるの?。

他の奴、しかも。

男のことを考えるなんて。らしくない。

「疲れてるんじゃない？」

「そうかも」

ハハ、と愛想笑いを返す。

笑顔さえ返せば。

それで丸く収まる。

「そういえば、男子校ってさあ」

「ん~？」

ファミレスの一角。ドリンクバーで粘りながら。

「やっぱ、ホモとかいるの？」

なんて、タイミング。

「いやせ、よく聞くじゃん~? どつのかな、って思つて」

「ハ、ハハ。どうだろ。俺はよく知らないけど」

こんな会話、やめてくれ。

「そりなの? 友達のお兄ちゃんもそこ通りしててわあ。こるーじこつて聞いたんだよね」

動悸が、する。

「ありえないよね。男同士なんて」

ガシャン。

「わ、大丈夫?」

祐馬の前のグラスが、倒れる。

女の子がナップキンで、こぼれた琥珀色の液体をふき取る。

「・・・ああ。ゴメン、ゴメン」

綺麗に整えられた、爪。

「でもさあ、だって男同士だよ?」

「人には、それぞれあるんじゃないの?」

アリスだつて、そうだつた。

「え~、そつかなあ。お手軽にすませたいだけじゃない?」

リアンさん達だつて。マスターさん達だつて。

「そうじやない人たちも、いるかもしねないだろ」

あんなに。
お互いを。

「う~ん。でもオ、祐馬くん的にはどうなの?」

「なしだと思わない?やっぱり

彼女の瞳が。
俺を射抜く。

覚悟がないんだ。

覚悟が、足りないん、だ。

「それとも

「覚悟が、ない？」

ぐるぐると、頭が回る。

気分が悪い。

頼むから。もう。俺に構わないでくれ。

俺を、惑わさないでくれ。

よひよひ。
よひよひ。

俺はすべてを捨てる覚悟をしたの。

（ 続 ）

第35話 秘密の花園・5（後書き）

ようやく半分くらいかな。ソウと祐馬の話。な、なかなか書き辛いです・・・。この2人・・・！ラスボスが待つてた感じ。あ、や、ラスボスはまだですね・・・。ハイ。あ。今回、祐馬ちゃんの彼女がいろいろ言つてますね。ホントはもつと過激に言わせようとも思つたのですが（笑）否定するような話が出てくるのが駄目な方もおられるようなので、このあたりで。

配慮はしたつもりですが、グサつときた方おられましたらすみません・・・！ついか、祐馬、切り替えはや！！

第36話 秘密の花園・6（前書き）

気付けば、アリス、読者アクセス数、3000を超えました・・・！－うわオ！びっくり！！ほ、本当にありがとうございます！－これからも、よしなに・・！

第36話 秘密の花園・6

まるで。

すべての時が止まつたよ。」

まるで。

世界が隔絶されたかのよ。」

「どう、なの？ 祐馬くん

あの、香りがする。

すべてを麻痺させるような。あの、香り。

「あなたことって、ソウくんは」

「いらない存在だった？」

「わざわざしかつた？」

「向こうで生きていくためだけに、必要な存在だった？」

「嫌い、だつたんじょ？」

その箇が。

痛いほどに、眞実をつむぐ。

頭が、働かない。

そして。

言葉となつて、出るのは。

眞実。

「・・・嫌い、だった」

「わざわざしかつた・・・」

「向こうで生きていくのには・・・確かに、必要だった・・・」

愛していたわけじゃない。

好きだった、わけじゃない。

覚悟が、ないんだ。

「何でそんなに」

覚悟が、ないんだ。俺には。

「泣きそつた顔をしてるんだい？」

祐馬は、その言葉にびっくりする。

危険だ。
危険だ。

この女は何者？

ああ。

ああ。お願ひだから。

それ以上。

気付かせないでくれよ。

「好きだったんじゃ、ないのかい？」

「・・・違つ・・・」

「好きに、なりかけてたんじゃないのかい？」

「ち、がう・・・」

「じゃあ、なんで。そんなに苦しそうな顔をしてるんだい？」

「違つ・・・・・・」

祐馬は、バンッとテーブルを叩きつける。

「俺は、あいつのことが嫌いだった・・・・もう、それでいいだろ
う！？たのむから・・・！」

祐馬は、力なく。

ソファに寄りかかった。

「頼むから……」これ以上、かき回さないでくれ……

両の手は、視界を遮り。
その遮られた視界で、何を見る？

「覚悟が、ないいんだろう？」

それでもなお。
その女はしゃべり続ける。

「…………ねえよ…………あるわけないだろ！？」

その女の言葉に。

切れたように、祐馬はしゃべりだす。

「あいつは、あっちじゃ名の知れた家の子息だぞ！？元々は、国の大
次期王と婚約するような地位の人間だ……俺なんかを相手にし
てる場合じやねーだろ……！」

「いつまでも帰つて来なきや、家の人に心配する！しかも、
俺みたいな人間と、なんて……！許せるはずがないだろ……！
！常識で考えてみろよ……！」

違う。

そうじゃないんだ。

何を、言つてるんだ。

俺は。

何を。

言つてゐるんだ。

「それ……！」

「あいつは、バーを好きだつたんじゃねーか……」

「バーに振られたから、俺に乗り換えたんじゃないのかよ……」

お前が、甘く囁くたびに。
お前が、愛を語るたびに。

吐きそつなほど。
俺の中の俺が。
悲鳴を上げる。

言葉はとても簡単で。
言葉はとても、重くて。

だから。

俺には、覚悟がないんだ。

覚悟が、足りないんだ。

「……言葉も信じねえ……。好きになる、覚悟もねえ……。」

言葉だけを信じて。

あなただけを、素直に愛せたら。

何で幸せだったのかしら。

素直に言葉を信じること。

祐馬は、言葉を信じられないよつたな、恋しかしてこなかったから。

嘘を囁くことも。

相手を喜ばす言葉も。

祐馬はよく知っている。

だから。
だから。

ソウの言葉の真意がはかれなくて。

まるでゆつくつと底なしの沼にハマつていいくつこ。

抜け、だせなくて。
息すらできなくなつて。

結局。

ソウに、あんな顔をさせてしまった。
それだけが、後悔。

自分が、初めて。

好きになれたかもしれない相手への、最後の後悔。

いつの間にか。

祐馬の頬に、涙の筋ができる。

「・・・不器用な、子だねえ・・・」

ぬぐつても。
ぬぐつても。

「どうしてお前たちは、そんなに臆病で。自分勝手で。相手の思いに気付けないんだろうねえ・・・」

嫌味ではなく。

優しい、優しい口調。

「だから私達は・・・お前達が愛しくて・・・しちゃうがないんだろうねえ・・・」

吐き出してしまった想いに。

祐馬は自分で傷つくる。

認めてしまつた、認めたくなかった、自分の想い。

本当は、ずっとずっと、辛くて。

辛くて。

気付かないふりをして。
見ないふりをして。

本当にさすがだ。

痛いほどに傷ついていたの。

「辛かつただろ？・・・？祐馬・・・」

その、一言が。

「でもねえ、ソウもずっと、辛かつたんだと思つて」

そつと、祐馬の両の手を握る。
その、視界に入ってきたのは。

あの、ベにおだつた。

「あんた達は、もつと話をしなきゃいけないよ。お互い、相手を傷つけないようこ、自分が傷つかないようこって行動するから、結局お互いにが傷つくんだ」

「ねえ、祐馬」

「本当にさすがだ、ベにおほ口を開いた。

すべてを、抜きにして。

「本当は、やうしたいんだい？」

いつさいを、考えずに。
ねえ。

そうしたら。

あなたに残る、思いは何？

「覚悟が・・・欲しい・・・」

人を愛する、覚悟が欲しい。
あなたを、好きになるために。

あなたを。

好きになるために。

その言葉に。

ゆづくじ、べにおは微笑んだ。

（続）

第36話 秘密の花園・6（後書き）

ゞゞ今まで続くよシリアル調。なんて。雰囲気ブチ壊しのあとがきです。ようやく、ソウ×祐馬編の先が見えてきましたね。つーか、祐馬にのみ焦点あたりすぎだなあ。あはははは。。。。はあ。そして。べにお様再来。どうなる次回。。。。つーか、笑顔の下に、みんないろいろなモノ抱えすぎやつちゅーねん（笑）こと恋愛に関して臆病ものばつかやん。まあ、人間らしくていいじゃないってことで（綺麗にまとめてみました）

第37話 秘密の花園・7（前書き）

間があいてしまって申し訳ないです。花園続編です！何だかスラン
プっちゃって ようやく書けましたよ（お前にそんな纖細なもの
があるのか）つーわけで。お待たせいたしました！どぜ！本編へ！

第37話 秘密の花園・7

本当はずつと。

本当はずつと。

「ああ、今度は。本当の決断の時だよ。裕馬」

ぐにゅうと周りの空間が歪む。

「元の世界へ戻って元の生活に戻るか…あがりの世界へ行って、ソ
うともう一度やり直すか…」

「じつ、ある。」

祐馬の瞳に、迷いはなかった。

「うん…」「うん…」

「僕、こいつで帰つてこようかな…・・・

「いいじゃん。」

ンウは、少し躊躇ひながら言った。

「もう、疲れ切った…・・・

人を愛することに。

貴方を、愛することに。

「・・・それも、いいんじゃないかしら」

母は、静かに応えた。

「貴方は、この家の名取にもなれるのだし。何の肩書きもない外れのものと苦労して一緒になる必要はないわ」

もう冷めてきた紅茶を含んで。

「貴方と一緒にになりたいと思う子は、他にもたくさんいるのだし」

「辛い恋なら、終わらせねばいいわ」

ソウは俯いて。

静かに、うなずいた。

「ソウは・・・!？」

息を切らして。

その場にまさしく、登場したのは。

花園にいるはずの、祐馬。

「・・・祐馬くん・・・?アレ?ビラシでここに・・・?」

突然の祐馬の登場に、驚いた様子のリアンとバー。

珍しく、リアンが目を丸くして叫びつ。

「帰つて来たんだよ! あそこからーーー。」

確かに。

帰つてきたらしく。

ちょっとひどい格好だ。

あのジャングルのような場所に行ってきたのだから、仕方ないと
いえは仕方ないが。

祐馬が通ったあの掃除のことを考えると、少しげんなり（どうせお前はしないだらう）
「あ、そつてで、どうだった……」
「で、ソウは……？」
「リアンに有無を言わせや。」

どうせや、ひどく慌ててこらめりだ。

「こつもの鷹揚さが、今の祐馬にはない。」

「こじこじはない。実家に帰つてゐみたいだが」

祐馬に、バニーが応える。

「実家……？」

祐馬の瞳に、動搖が走つた。

「どうしたのや。祐馬くん、りじへないねえ。ソウならすぐ帰つて
……何も、ないんだ……」

「え？」

祐馬は、額を押さえながら。
その場に、へたり込む。

「あいつのもの、みんな……なくなつてたんだ……」

声が、震えてくる。

ようやく、覚悟ができたのよ。
ようやく、貴方を。
好きになれると思ったのよ。

否。

よひやべ。

いの連こそ。

気付けたの!。

貴方は。
もう。

「ソウせ・・・俺を・・・」

「おいていつたんだな・・・」

リアンとバーーが顔を見合わせる。

祐馬は小さく。

すいませんでした、と笑ひつい。

その場を去つていった。

～ 続～

第37話 秘密の花園・7（後書き）

先が見えてきたといった矢先にこれかい。まったく先が見えてねえよ。オイ。と、自分でセルフツッコミ 相変わらずどこまでも雰囲気ブチ壊しなあとがきですね。ウフ。今後の祐馬の動向が気になります（オイ）

遅くなりました。メッセージにお返事 知者猫様。たぶんアリスへのコメントだと思うのですが、恋つてええなーと思つて読んでいただけて嬉しいかぎりです♪愛の国、ですから（力説）！…まあ様。番外編みて、本編を見てくださったそうで。こんなに続いてる話しきを読むのは大変だったと思います。めげずに読んでください、ハマつていただけ大変嬉しいです こ、こんな痛かったりばかばかしかつたりするアリスですが、皆様、これからもよろしくお願いいいたします！ぺこり。

第38話 秘密の花園・8（前書き）

長らくお待たせしてしまって申し訳ございませんでした・・・。ちよ
つとホフのほうが立て込んでしまして・・・。ようやくと続きた。

「それって、修羅場ってこと? 終わったってこと?」

焼きたてのアップルパイを頬張りながら。リアンは、人事のように言つた。

いや、まあ。

人事なんですがね。

「どう、なんでしょうか。でも、屋敷からソウさんの物が一切なくなつていたと言いますから・・・」

言いにくそうに、マスター。

「・・・捨てられたってこと?」

納得、とリアン。

「そ・・・そこまでは・・・」

そのリアンの言ひ方に。

マスターが反応する。

「だつてそうじやない? でかけて帰つてみたらもぬけの殻? なんて。逃げられたとしか考えられないじゃん」

もぐもぐと。間で紅茶を一気飲みしながら。

「・・・! リアンさん! !」

マスターは、さすがに、とリアンをたしなめる。

だつて。

「この場には。

「いいんです。マスターさん・・・。本当の、こと? スから・・・。表情を強張らせながらも、笑顔を作ろうとしているのは。」

祐馬だつた。

リアン、マスター、祐馬。

3人で、小さなテーブルを囲む。

「・・・あのさあ？祐馬くん

ヒツヒツと、リアン。

卷之二

「アンタ、いいじの茶飲んでる場合じゃないんだが~~~~~。」

花園から帰つて来た祐馬を待つ人は、もう、いなくて。

呆然と。広い屋敷のすみずみまで見て回つて。
ソウの。

匂いのするものが、何一つ、残っていないことを知つて。

一晩が、過ぎた。

長い長い、夜だつた。

そういえば、こちに来てから一人で夜を過ごすのは初めてだなあつと、まるで人事みたいに思つたりして。

何だか。
笑えた。

心が、ザワザワする。

ザワザワ、する。

そして。

事を知ったマスターが心配して。

リアンを連れて朝から来てくれたのだ。

リアンは昨日から。

事は知っていたのだけれど。

「はは、そうシスよね
リアンの叫びこ、よつやつと。

笑顔で祐馬は答えた。

「ははつて、アンタね！
笑つてる場合！？」

「・・・俺、ソウを迎えに行こうと、思つんです」

身を乗り出すリアン。

それを止めようと、マスター。

もうともせず、いきなり、祐馬。

その瞳に。

迷いはなく。

「どうなるかわかんないんですけど……」

祐馬は、一口、紅茶を飲むと。
はあ、っと息を吐いて。

「生まれて初めて」

「あがいてきます……」

欲しいなんて思ったことはなかつた。
いつも、向こうから始まりは来て。
いつも、時期になると終わりは来ていって。
すがつたことなんてないし。

追いかけたことなんか、ない。

追いかけて、すがつてまで。
誰かを引き止めたいなんて。
思ったことなかつた。

「・・・・」

リアンは、無言でマスターの止める腕を振り払つて、祐馬の前ま

で歩み寄る。

リアンと、祐馬の視線が交差する。

「・・・リアンわ・・・」

リアンを呼ぼうとしたその声は。

かき、消された。

「絶対大丈夫だからーちゃんど、ソウを連れ戻してくるんだよー。温かい、それが。リアンの胸だと。気付く。

「リアンさん・・・」

マスターの、驚いたような、涙ぐんだような声が聞こえる。

「ここは、愛の国なんだからー。」

「俺だって、つまくいつたんだから・・・」

リアンは、祐馬を見据えて、そつ置いた。

その言葉に。

2人は、笑つた。

その日の午後。

「馬車に乗つてたら、ソウの実家まで運んでくれる手配だから」ときばきと。

馬車を手配して祐馬を乗せる。

ええ。

例のあの、かぼちゃですね。ハイ。

ひ、一人で乗るのか・・！
これに・・・・！

いやさか不安を覚えながら。
馬車の座席に腰を下ろす。

馬車が、ゆっくり動き出す。

小窓の外では、リアンとマスターが見送ってくれている。

ふと、顔をあげると。

クイーンと、バニーが視界に入った。

“言つて來い”

そう、クイーンの唇が動いて。バニーは、控えめに手を振る。

ああ。

ここは。なんて。

「つ・・・・いつてきます・・・ーー!」

涙が出るべりー。

優しい場所なんだろ?うか。

どうして。

気付かなかつたんだろうか。

どうして。

大切なものはいつも。

なくさないと、その大切さに。
気付かないのだろうか・・・。

馬車の中へようやく。

祐馬は。

ソウを思つて、泣いた。

（続）

第38話 秘密の花園・8（後書き）

リアンは、どこか自分に似ている祐馬を、実はきつと。一番心配しているんじやないかと（笑）自分みたいになつて欲しくないつて、思つてるのかかもしれません。去つた人を追いかける勇気は、並大抵の勇気じやないと思います。祐馬の足元は、きっと今ガクガクでしょうね（笑）！がんばれ！祐馬！！私がハラハラしながら見守つてどうする（笑）

第39話 秘密の花園・9（前書き）

なかなか続きが書けない。ソウと祐馬を思つて、愛が苦しいよ。愛くるしい？いやいや。何言つてんの。大変遅くなつて、すみませんでした・・！では、続きをどうぞ！

子供みたいに、馬車の中で「うすくまつて。

どうしようもなく、体が震える。

思い浮かぶ考えは、最悪の結果ばかりで。

なぜ、来てしまったのか。

帰りづよ。

なぜ、あがいてるのか。

らしくない。

なぜ。

なぜ。

こんなにも。

あなたを思つと胸が苦しい?

こんな感情、知らない。

こんな恐怖、知らねえ。

なあ、ソウ。

お前は、ずっと。

こんなきょうふとたたかっていたのか？

馬車からのぞいた外界には。
街が見え始めていた。

「・・・かあさま・・・」

うんざつしたような、ソウの声。

「あら、ソウ、なあに？」

ここにいるはずのない自分の息子を見つけて、かの人は少し驚いたような顔をする。

「いいかげんにしてください・・・！僕は種馬じゃないんですよー。？」

いきなり、何を言い出すか。

「いやーん。ソウってば、怒らないでよ。だって、ソウ、振られて傷心中でしょ？だからかあさま、ソウの好みそうな貴族の息子さん達になぐさめてあげてってお願いしたのよ。そうしたら・・・」「いったい・・・！何人に声をかけたんですか・・・・？」

そのソウの言葉に、指折り数える母。
すいません、すでに両手使ってないですか？

その母の様子に、大きくため息を吐きながら。
母の座るソファの対面に腰掛ける。

「疲れちゃった？」

小首をかしげて、母。

「そりや、いくら好みな方々とはいって、今日だけで5人も6人も相手をすれば、疲れますよ・・・！」

うんざりしたように、ソウは吐き捨てる。

「いや～ん、ソウつてば、罪作りねえ」

それに反し、楽しそうな母。

「いいじゃない。別に」「

「バニー様の元へ行くまでは、それこそ、うちの息子は種馬だったかしら？つてほど遊びっぷりだつたんだから。もとの生活に戻つただけでしょう？」

にこやかに、とんでもないことを囁つ。

ソウは、バツの悪そうな顔をするだけ。

「でも・・・簡単に、体を開くんですね・・・」

ボソリと、ソウはつぶやく。

「貴方ほどの地位にいれば、取り入ろうとする輩が多いのは当然でしちゃうっ！」

さりと、核心をつかれる。

「・・・そんなの・・・誰も、本当の僕なんて見てないじゃないですか・・・」

空を見る田に、涙が滲む。

ああ。
自分は。

何をやつてこらのだらうか。

「でも、恋の痛手には、恋だと思つわ。探せばいいのよ。これから」

「身が焦がれるよつな、恋の相手を」

身が焦がれるよつな恋なんて。
これからするひとがあるのだらうか?

田の前にいる青年。

にこりと微笑むだけで、赤くなつて俯く。
手を差し出して触れれば、抵抗せずに受け入れる。

今まで、ずっと、そつだつた。

貴方だけが、俺を拒んだ。

時間をかけて。

貴方に会わせて。

柄にもなく、たくさん、たくさんたくさん。

愛を叫んだ。

貴方は、振り向きもしなかつたけれど。

何人目かわからないその行為は。
すでに、感情など入っておらず。

ただただ、貴方を思つて貪るように。

貴方を思つて、涙が出た。

「何の、イベント……？」

馬車が止まり。

目的地だと思い、降りたそこには。

ガタイのいいお兄さん達の。
列ができていた。

果然と、その列を見やつていると。

「おやおや、また追加かい？いやいや本当に、ビームでも増えるな
あ」

小人のような、小さな男。

どうやら、列の整理をしているらし。

「で？君は、どこの家の子だい？」

「・・・え？どこつて・・・？それより・・・、この列つて・・・

?俺、ソウに会いに来ただけなんだけど・・・」

そう言つが早いか、その小人は、思い切り祐馬の脛を蹴る。

「・・・・・ッ！？」

突然の痛みに、声もなくづくまる祐馬。

「たわけ！ソウ様を呼び捨てにするとは何事じゃー！」

「ああ、そうか。ソウは名家の出だつたな、と。今更ながらに、い
きなり呼び捨てにしたことを後悔。

「だいたい、列の意味も知らずに来たのか？この列は、ソウ様への求婚者の列なのだ」

「きゅ、うじん……？」

心臓が、バクバクと音を立てる。

「ソウ様は、結婚相手をお探しなのだ。この列は、ソウ様に求婚をするための順番待ちの列なのだ」

世界が、違う。

「そのようなことも知らずに来るとはーお主、いったいどこでソウ様のことを知った」

世界が、違いすぎるんじゃ、ねえ？

「下賤な者を、ソウ様に近づけるわけにはいかん！！」

アタマを。

殴られた気分だよ。

ソウ。

} 続

第39話 秘密の花園・9（後書き）

あとがきが入つてなかつた・・・。ガーン。もういろいろショックだ（笑）。結構熱く語つたあとがきが消えてへらへら。ハハハ。思い出そう。うん。何だか、まだ暗くなるのか、この話。祐馬の思いも、ソウの思いも痛くてかないません。ヤラレ氣味。あ〜チクショウ。考へてると泣きそだよ！泣かないけど！！（笑）何て可愛いんだ！お前達！自分のキャラにツッコむなってね（笑）この子達の思ひが、うまく伝えられるだけの文章力がないのがすごく悔しい・・・！ギリギリ。この子達のこの思いが、少しでも伝わっていれば幸いです。

第40話 秘密の花園・10（前書き）

この話で、やつと本編は40話になりました・・・えつと、な、長くなってしまったなあ・・・。秘密の花園も、もう10話になる。皆様、いつもお付き合い、本当にありがとうございます。ここまで続けることができたのって、奇跡だなあ・・・。（しみじみ）

人を好きになるつて。
覚悟なんだな。

何ものに変えても。
貴方を愛するといふこと。

「とりあえず、ここで大人しく待つとれ！」

案内されたそこには。
きらびやかな世界。

一目見れば、その彼等が纏っているものがどんな品なのががわかる。

いふ、とりどりの、世界。

10人ほどの青年が、その場にはいた。
どの青年も、自分と同じくらいか、または自分よりも雄雄しい体
をしていて。
しかも、何とも育ちのよさそうな。

何で、俺は、ここにいるんだ……？

初めて、自分を恥ずかしいと、思った。

決心が、足元から崩れそう。

祐馬は、震える足で、その場に踏みどじまる。

「次はね、ソウ。いわゆる、合コンよ」

母は、じごく嬉しそうに言つ。

「はいはいはい。もう、好きに付き合いますよ」

ソウは、疲れたようにぶーっと頬を膨らましながら母のあとをついていく。

「ヨウ様」

2人で歩いていると、執事が声をかけてくる。

「?どうしたの?お客人は集まつて?」

にこやかに聞き返すヨウ。

ソウを先に促す。

「・・・妙な輩が、混じつておりまして」

「妙な?」

小声で、その執事は続ける。

「まるで、そこらへんのガキ、といった人間が1人混じつているのですよ」

「・・・あらあら、何でそんな子を入れたの?」

「それが・・・馬車に乗つて来ておるのですが、その馬車がどいつも王家のもののようにして・・・」

「王家の？」

「はい」

ソウの母親は。
しばし、考えた後。

「その子を、連れておいで」

「くれぐれも、粗相のないようにするんじゃぞ！」

そう言って、突き飛ばされるかたちで入れられた部屋にいたのは、思い人の、面影のある、人。

「・・・」

祐馬は、入れられたその部屋に。

その人を見て、呆けたように固まつた。

「貴方の名前は？」

ぼうっと眺めていると、その人はくすりと笑つてそう聞いた。

「え・・？あ、せ、瀬戸祐馬です・・・！」

祐馬は、自分が見惚れていたのだと知つて、真赤になつて答えた。

「・・・そう、貴方が祐馬さん・・・」

「私は、ソウの母のルカと言こます。息子が、向ひではお世話になつたよつで・・・」

「あ、あの・・・そんな、やめてください・・・！お、俺は・・・」
深々と頭をさげる。

「あ、あの・・・そんな、やめてください・・・！お、俺は・・・」

俺は・・・。

「それで?」ソウへはゞのよつな「用件で?」

祐馬が、その言葉にドキリとする。
言わないといけない。
伝えないと、いけない。

「ソ、ソウに・・・」

「ソウの婚約者を、見にいらしたの?」

「・・・え・・・?」

にこやかに、微笑みながり。

その人は、祐馬の手をとる。

「あの子、向こうで失恋をしたらしくて。失恋には、新しい恋だと
思いません?」

その瞳は、実は。

「あの子にふさわしい、地位の方との、ね?」

笑つては、いなかつた。

祐馬は、ソウから田が離せず。
手を、払うこともできず。

「祐馬さんは、賢そうな方ね」
くすり、と笑う。

「私の言いたいこと・・・おわかりに?」

「わか……りません……」

祐馬の口から漏れたのは、

小恵な。

小さな、勇氣。

「……なんて?」

「ソウを、ソウに……会いに来たんです……! ソウに、会わせて
ください……! ……!」

初めて。

手に入れたいと思つたんだ。

ソウのことを、ソウの家族のことを考えたら……。
絶対に、してはいけないことなのだろうけれど。

それでも。

それでも。

ただ、ただ。

貴方を……。

「貴方は、ソウの想いには答えられないのでしょうか。それなのに、
今更あの子に何の用があるんです?」

「貴方は、ソウの想いには答えられないのでしょうか。それなのに、
今更あの子に何の用があるんです?」

「あの子を、これ以上、傷つけないでいただきたいわ」

きつと、祐馬の手を握る手に力が入る。

「さす・・つけません・・。俺、俺は・・」

「ソウが、ソウのことが・・・

「好き、なんです・・・！」

言葉が、溢れて。
溢れて。

うまく、カタチにできなくて。

ああ、ソウ。

お前のことだが、好き、なんだ。

ああ、駄目だって、わかっているの。

そのまま、立ち去ればいいと、わかっているの。

なぜこひんなに涙が出て。
なぜこひんなに。

いの場所にどうまつてしまつてこらのだれつか。

「好き、なんです・・・」

足元から、崩れ落ちそうな、恐怖。
どうして。
どうして。

ମୁଦ୍ରଣ

「おや、言葉にござたのせ。

何とも陳腐な、愛の言葉。

「・・・そうですか、と、渡すわけにはいかないって、貴方もよくわかつているでしょ？」

声はどこまでも、明るく。

まるで笑みでもたたえてこようとしているよ」

「バニー様の婚約者になるくらいこの家系なの。」

「貴方じゃ、ソウにはふさわしくないの」

この世界の王の息子。

その、婚約者。

それが。

この世界の住人でも何でもない、王家との関わりすらない自分と。

共に、歩んでいくなどと。

それは、大それた、夢？

「だから・・・帰つてちょうだい？」

きつちつと。
くつきつと。

その拒絕の言葉は、祐馬を侵食して。

その瞳の色は。
どじまでも。

祐馬を突き放す。

「貴方が譲れないよ。私も、譲れないのよ。」

子を思つ、貴方の心が。

イタイほどに。

「すいません…すいません…」

貴方の気持ちは。
イタイほどに。
わかるんです。

わかつて、いるんです。

「すいません…すいません…」

「それでも…俺も…」

ああ。

アリス。

今なら。

おまえのきもちがよくわかる。

「ソウを・・・譲れないんです・・・

思いよ。

お願い。

この思いよ・・・。

伝われ。

「・・・母様は？」

いいかげん、愛想笑いにも疲れた。
一緒に来るはずの母は一向に来ない。
どうしたものか、と。

ソウは、執事を呼んで問うた。

「ヨウ様はまだで？」

執事は、まだあの下賤な者と・・・?ビブツビツ言つて居る。

「・・・?下賤な者?」

「はあ。身なりのしゃんとしない童が一人混じつておりましてな」

「ふうん」

興味なさそうに、ソウは答える。

大方、どこかの下級貴族の子息か何かか。

どうでもよさそうな、ソウに。

「まあ、今にヨウ様が追い返しになるでしょう。あのような者、ソウ様には無相応です。」

「いや、

「王家の馬車に乗つて来た者とはいえ・・・」

その言葉に。

ソウの顔から。
表情が、消えた。

} 続

第40話 秘密の花園・10（後書き）

もう一、2話で、ソウと祐馬の話は完結すると思いります。いきなり嫁姑戦争から始まつてますが（笑）ソウと、祐馬の今後をお楽しみに・・・。

そして。今後のことですが。

アリスは、とても皆様に愛していただいて。ここまで長期に渡つて書かせていただきました。すぐありがたいことだと。いつも感謝しております（それがまったく反映できていないのが悔やまれるツス）。アリスな話！ですが、ソウと祐馬の話が完結後、バーーとアリスのお話を入れて連載終了とさせていただこうかな、と思っています。番外編を、また短編なりで本館で書かせていただくかもしれません。が。ケジメとして。一度くぎろうかと思います。もうしばらく。皆様、アリスにお付き合いいただけると嬉しいです。本当に本当に。いつも温かく見守つていただきて、感謝の気持ちでいっぱいです！連載終了にあたり、また感謝祭も企画するつもりですので…皆様、そちらもお楽しみに！！では！秘密の花園・11でお会いしましょう！

第41話 秘密の花園・11（前書き）

どうにもいつもにも進まず・・こんなに間があいてしまいました。待つていてくださった皆様、スマセン・・! どうにも、ソウと祐馬の2人は難しいらしいです。○→ようやく書けました、花園11お楽しみください!

「今……何て言つた……？」

ソウは、大きな瞳を。さらに大きく開いて。その執事へ、静かに問うた。

「は？ええっと……今に、ヨウ様が……」

「違う。その後だ。王家、の……？」

ああ、と、執事は思い出したかのように。それを伝える。

「王家の馬車に乗ってきたとはい。あのよつな者、ソウ様には不釣合いでしょう。身なりも、身分も、そして、態度も不相応ですからなあ」

その口が、よく動いて。紡ぐ。

「どんな……人だったの？」

心臓が、まるで。

爆発しそうだ。

「短い髪をした……がっちらりしたタイプの青年でしたよ

外見だけなら、ソウ様のお目がねにかかるかもしませんね。

そう、執事は。

何も知らず、笑った。

その場から、どう出たかなんて。
覚えていない。

ただ。

ただ。

「祐馬さん・・・ー！」

口を出たのは。

諦めた、あの人の名前。

「お願いです……ソウに、会わせてください……」

大切なことを。

まだ。

俺は、一切、伝えてないんだ。

「ソウに、伝えたいことが、あるんですけど……」

もし、この想いが報われないのならば。

それはそれで。

仕方のないことなのだと。

諦めて、しまっから。

ただ。

お願いだから。

この想いを……。

「……強情な子ね」

「諦めるわけに……いかないんです……」

よつやく。

覚悟ができたんだ。

ようやく。

知ることができたんだ。

なりふりかまわず。

人を愛するといつひとを。

自分の生きた、世界を捨てた。
誰かのためにここまでするなんて。
自分でも意外すぎて、笑えてくるくらいだ。

だから。

だからこそ。

怖いものなんて。

何もない。

「ソウは、どこですか？」

「・・・教えるわけにはいかないわ」

祐馬と、ヨウの瞳が交差する。

しばし。

二人の間に重苦しい緊張が走る。

バタン

突然、扉が大きく開く音がして。

視線と、視線が交差した。

だいぶ、長い間。

会つていなかつた気がする。

肩で息をしながら。

眼前に立つのは。

「・・・ソウ・・・！」

ああ。

よつやく。

貴方に会えた。

「ゆ、祐馬さん・・・?」

思い切り、ソウを抱きしめた。
その祐馬の行為に、驚いたような声をソウが上げる。

「ソウ、ソウ・・!」

言いたいことが、あつたんだ。
伝えたいことが、あつたんだ。

それなのに。

出でくるのは。

貴方の名前だけ。

「ど、どうして・・・ここに?」

ソウは、めずめずと祐馬の背中に腕を回し半身をあやす様に背を
なでる。

祐馬は、ソウの肩口に顔を埋め。
小さく震えている。

「お前が・・好きなんだ・・・」

うめく声、小さな声。

「よつやべ、覚悟ができたんだ……」

静かに、祐馬の口から出たのは。
ずつとずつと。

聞きたかった、愛の言葉。

ずっと、お前を傷つけてきた。
ずっと、見ないふりばかりしてきた。

ずっと。

ずっと。

渾身でお前は俺の傍で、涙を語りあわせられると聞いてたんだ。

「・・・や、ま・・・そん・・・?」

ソウの瞳が大きく見開かれ。
その瞳に、涙が溢れる。

「俺を、好きでいてください」

初めて紡ぐ、本当の、愛の気持ち。
初めて伝える、本当の、言葉。

「・・・はい・・・」

泣きながら、二人はしばらくその場で抱き合っていた。

強く、強く抱き合つて。

その腕を。
離すことなく。

～続～

第41話 秘密の花園・11（後書き）

ようやく会えた2人。次で最後の予定です。だんだん・・・祐馬が祐馬じゃなくなつていく気がするのは私だけでしょうか・・・（遠い目）次の話は、ずっとシリアスが続いたぶん、明るくいきたいですね！長つたらしくなつてしまつた2人の話にお付き合いくださいまして、本当にありがとうございます！もうしばし、お付き合いのほどを・・・。

第42話 秘密の花園・12（前書き）

ようやく、完結しました。秘密の花園。オンもオフも立て込んで、まさかの170日以上の更新停滞ッ・・・すみません・・・とにわかくにも、本編へどうぞ！

愛なんて、一度語つてしまえば。
ああ、なんて、心が軽くなるのかしら。

貴方の腕の中にいれる喜びを知るしが、こんなにも。
心地いいことだなんて、思わなかつた。

一人きりになつた部屋の中で。
同じソファに腰掛けて。
絡まる指先から感じるのは、むずがゆいほど、温かさ。

「・・・あーーーッ・・・・・! 恥かしいッ――」

そこに、突如大きな声を出したのは、祐馬。

「ゆ、祐馬さん?」

それまで、会話も少なく穏やかな空気が流れていただけに。
突然叫んで顔を覆う祐馬の拳動に、ソウは心配そうに祐馬を見や
る。

「お、れは・・・今までこんなことしたことねーんだよ・・・自分
がマジありえねえ・・・!」

よくよく見ると、その大きな肢体を丸めて、顔を膝につづめた祐
馬。

その耳も。

その首筋も。

微かに見えるその頬も。

見たことのないほどに赤くなっていた。

「……んな。家まで乗り込んで、母親相手に啖呵きるとか……う、わああああああッ……！」

今までの自分の行動をようやく冷静に思い返し、祐馬は狂ったように叫びだす。

「……フフ、嬉しいなあ、祐馬さん。僕のためにそこまでしてくれたんですね？」

見知らない土地に。

一人でやってきて。

ただ一人、自分のために。

愛を、語ってくれた。

それだけで、もう、舞い上がつてしまいそうなほどに、嬉しい。

「……そ、いうわけ、じゃあ……」

モゴモゴと、心地悪そうに祐馬はどもつた。

ガラじやねーんだよ、と、祐馬は言つ。

そんな祐馬の様子に、ソウはどうまでも上機嫌だ。

「……でも、よかつたの、か？」

ふと、これまで照れたような、困ったような表情だった祐馬がそのまま瞳に影を落とした。

「え？ 何がですか？」

「……お前は……バニーの、妻になれるほどの……家柄の人間、なんだろ？ あそこまで啖呵きつといてなんだけど、わ。おふくろさん、とか……どうすんだ？」

自分の、モゴだと、思つ。

ソウの可能性を、自分は潰したことになるのではないだろうか。

もつと、いい出会いがあつたかもしれない。

バニーでなくても、それなりの良家の人間と結婚し、この家を繁栄させていく」とのほうが、もしかしたら最良の道だつたのかもしない。

感情的になつていた自分。

しかし、ふと我に返ると、そこに立ちはだかるものは、壁だ。

大きな、大きな、壁。

「・・・僕は・・・貴方がいいんです」

そんな祐馬の背を、そつとソウは撫でた。

「バニーさんでもなく、他のどんな人でもなく」

その手は、祐馬の頬を、捕らえ。

そして、自分のほうを向かせる。

「貴方が、いいんですね」

その瞳は。

優しく、祐馬を捉えた。

だれでもなく、私の身を焦がすほどに捕らえたのは、貴方。
何ものとも投げ捨ててでも、傍にいたいと思わせたのは、貴方。

他のだれでもなく、貴方が。

ただ。

ただ。

愛おしいんです。

「・・・お、れは・・・男、だぞ・・・」

その、瞳からは、再び涙が溢れた。

「知つてます」

きゅうと、祐馬の手が、ソウの手に重なる。

「俺は、お前より、ガタイもいいし・・・」

「そこが可愛いんです」

「・・・こここの、住人、でも、ないし・・・」

「今はこここの住人です。・・・これからも、ずっと」

「・・・良家の、人間でも、ねえ」

「名前だけで、好きでもない相手と一緒にになるのなんて、ゴメンです」

「それに・・・」

「生涯、一緒にいたいと、思つた

まだ、何かを言おうとする祐馬を遮つて。
ソウは、言った。

「僕は、貴方が、いいんです。そう思つたのは、貴方が初めてです」
ちゅうと、その脣に、キスを落す。

「祐馬さんじやないと、嫌なんです。僕の、お嫁さんになつてください」

ああ、もう、駄目だ。

ボロボロと、涙が頬を伝つて。
祐馬は、ソウに抱きついた。

その腕を、心地よいと感じながら、祐馬は眠りに落ちた。

「・・・その子を選ぶの？ソウ
どのくらい時間が経つたのか。
静かに時の流れるその空間に、ヨウがいた。
立ち入ることのできない、その再会の場面に一度は席をはずして
いたヨウだったが、確認をすべきことを聞きに戻つて來たのだ。
「はい」

曇りのない表情で、ソウはヨウにそう言った。

その膝の上では、小さく祐馬が寝息を立てている。

「・・・意思是、かわらなそうね・・・」

ふうっと、ため息をつきながら三ウは言った。

「変わりませんよ・・・みやげく、手に入ったんですから」

嬉しそうな、ソウの姿。

これが、さつきまでこの世のすべてを諦めたような表情をしていた人物と同一人物だといつか。

それほどまでに、この子は。

「・・・まつたく、この私に正面きつたてつく子なんて、初めて

よ

苦笑交じりに、三ウは祐馬を見下ろす。

「フフ、素敵でしょ? 僕の祐馬さんば

「そうね」

ふつと、三ウも笑む。

「これだけは知っていて? ソウ」

三ウは、ソウの額に、そつと口付けをした。

「私は、貴方が幸せであればそれでいいの。どこかの誰と結婚しようと、どこで暮らようと、そんなことなどいぢることの」

ただ、望むことは。

「幸せい、おなりなさい、ソウ」

貴方の、幸せ。

「・・・母様・・・」

思いがけない母の言葉。

それに、力強くソウはうなづいた。

その様子を見ると、ヨウは満足そうにその部屋を後にした。

「元気に、暮らすのよ？」

翌日、ソウと祐馬は元の屋敷へ帰る事にした。
きっと、みんなが心配しているだらうから。

見送りに来たヨウは、ソウの手を取ると、そう告げた。

「ええ、母様も」

その横で、祐馬は一人青くなつて今にも震えだしそうになつていて。

感情に任せて、啖呵をきつてしまつた相手を田の前にして、うまく対処ができるほど祐馬は大人ではない。

しかし、これから一緒に暮らしていくソウの、母親と何も会話を交わさないわけにはいかない。しかも、仲が悪い、などもつてのほかだ。

一人、どうしようかと俯いて考えていると。

「祐馬さん」

ヨウは、祐馬へと向き直り声をかけた。

「は・・はい・・！」

とりあえず、まずは昨日の非礼から詫びるべきだらうか、などと思考を巡らせていると。

「ソウを、よろしくお願ひしますね」

「・・・え・・・?」

「ふふ・・・昨日は意地悪をして」「めんなさいね」
弓やは、その瞳を細めて、笑った。

「また、これからも遊びにいらしてね?」「は・・・貴方の戻るべき家でもあるのだから」

その、言葉の。

意味するものは。

「あ、りがとう・・・」「ありがとうございます・・・!」

一瞬、その意味がわからず、祐馬はきょとん、とじ。

ついで。

その言葉の意味を、理解すると。

泣きすがいで、枯れ果てたはずの涙が。
また、湧き上がる。

「もへ、祐馬さんってば、泣くのはベッドの中でだけにしてください」

ソウが、笑う。

「お、おま・・・!」

「あらあら、いいわねえ、若い人は」
その場の空気が、たゆたゆと、揺れた。

「それじゃあ、母様、また!」

「ええ、楽しみにしてるわ」

一人は、馬車に乗り、その場をゆっくりと離れる。

来る時は、あんなにも怖かつた場所。
来る時は、あんなにも遠かつた、場所。

祐馬は、窓の外を見やり、その風景を眺める。

「・・・いろいろ、あつたなあ・・・」

しみじみと言う祐馬に。

「そうですね」

ソウガ、答える。

静かに、馬車は揺れながら。
二人を、運んだ。

「だから、追い出されたんだって！」

そして、所変わつて。

「・・・追い出されたあ？」

公館。

その場にいるのは、

優雅にお茶をすする、クイーン、リアン、バー。

そして。

まさしく、難民状態、なアリス。

「そうだよ！何かよくわかんないけどさあ、まだ早い！…つてあの
一人に追い出されたんだよ・・・！」

そして、なぜだか・・・。

「・・・しつかし・・・ふふ・・・あの、一人のおめがねには、適
つたみたいだねえ・・・？」

そのアリスの額には。

「笑うなよッ！！」

「大きな、合格のスタンプが。

「あはははは！だって、笑うつしょ・・・！検品かつつーのーー！」

腹を抱えて笑い出すリアンに軽く殺意を覚えつつ。

バニーが、こっちを向いて、アリス。と、汚れた顔を拭いてくれる。

そう。一人花園に残されたアリスくん。
たゆたゆと、お昼寝から目を覚ますと。

『ま、アンタはギリギリ合格ね』

と、ベにお様にペタン、とスタンプを顔に押され。意味がわからず、疑問符を頭上に飛ばすアリスをよそに。

子供はまだ早い、だの、先に結婚だの、とおしゃりい様と何やら語り合った後、ペいつと、花園から追い出されたのだ。

「わ、け、わ、か、ん、ねえツ・・・ー！」

バニーに身なりを直してもらひながら、アリスは一人憤慨している。

「ハハ、いいんだよ。それで」

ニヤニヤと、リアンは楽しそうだ。

「はあ？」

「さて、そろそろ祐馬くんたちも帰つて来るかねえ・・・」

リアンは、窓の外を見下ろしながらポソリと言つた。

「・・・そういうや、祐馬は？」

一人で帰つてきちゃつた、などと言つアリスに。

「・・・幸せだな、お前は」

ボソリと、クイーンは暴言を吐くのだった。

「え！？何が？祐馬が、どうかしたの？？」

「え！？何が？祐馬が、どうかしたの？？」

まつたく、状況についていけず、アリスはおたおたと脇の顔を見渡す。

「・・・ゆつくり、説明してもらつたらいいよ、アリス」整え終わったバーーはそう言つと、窓の外を指差した。

「え？」

「おーおー、いい顔しちゃつてー」

リアンが、おかえり！と、窓の外へと叫ぶ。それを受けて、アリスも窓の外を見やつた。窓の下には。

眩しいほどの笑顔の、一人がいた。

「ほんとにまあ、久しぶりにいい暇潰しだったですわね。お姉様」「本當だねえ、おしろい」「あ、そういうえば、べにおお姉様、もう一通の手紙は誰からだつたんですか？」
ぐるぐると、その大きな瞳を動かしながら、おしろこばげにおに問うた。

「ああ、リアンと、もう一通は・・・ミウからだよ」
「・・・ミウから？」

「祐馬の相手の子・・・ソウって言つたりうへその子の親なんだよ。ミウは」

「アラ、そうだつたんですね」
「息子が騙されていやしないか心配だつたんだううよ、ミウも」
ヒラヒラと、その手紙をひらつかせながらべにおは言つた。

「良家になればなるほど、恋は厄介なものになるからね」
「ですわね」

「まあ・・・あの子たちなら問題はないよ」

「一人とも、合格ですか?」

楽しそうに笑う、べにお。

「まだまだ、青いけどね。私が言つんだ。間違いはないよ」

愛だとか、恋だとか。

振り回して、振り回されで。

それでも。

それ、でも。

誰かを心から愛して、愛されて。

何て、素敵なもの。

「・・・これからが、楽しみだ」

そこは、秘密の花園。

秘密の、花園。

恋に迷つたら、ここへおいで。

第42話 秘密の花園・12（後書き）

長かった、ソウと祐馬編はとりあえあず完結。この次は、いよいよ
バニーとアリスの話へと移ります！・・・頑張ります！！（本気で
な）そうそう、この更新の滞っていた間に、企画を考えたりもして
みました。次作と同じくらいに、うまくいけば・・・と考えております。
ます。とりあえずは、新年にかからなくてよかつた・・・！次はもう
少し早く・・・！つて、いつも言つてる・・・！アリス完結に
向け、もう少しお付き合いで頂ければ幸いです・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1204a/>

アリスな話！

2010年11月30日03時49分発行